

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

2. 研究および共同利用

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008422

2 研究および共同利用

概観

本館の研究は2004年度の法人化以降、「機関研究」「共同研究」「各個研究」という3種類の研究を柱としている。「機関研究」は近年の研究動向や問題の所在を調査した上で、研究テーマを設定し、本館が全館規模で取り組む研究活動である。2010年4月より法人化第2期を迎えるにあたり、2009年10月から新たな研究領域「包摂と自律の人間学」と「マテリアリティの人間学」を設定し、研究プロジェクトを開始した。

「共同研究」は、ある共通の研究テーマの下に複数の研究者が集まって研究会などを開催し、共同で研究をおこなう活動で、本館の研究活動の柱の1つであるとともに、大学共同利用機関としての「共同利用」の一環でもある。機関研究が研究テーマの設定やプロジェクトの選定から、その運営、成果の公表まで本館主導でおこなうのに対して、共同研究は研究テーマと組織について、館員のみならず、本館を共同利用する研究者の自主的な提案に基づく。すなわち、館員（客員教員を含む）を対象とした館内募集に加えて、公募もおこなっている。応募された共同研究の提案は、館内募集、公募の区別なく共同利用委員会で審査され、選定される。また、2010年度から「若手研究者による共同研究」が制度化され、一般の共同研究と同様に公募している。さらに、2004年度以来、共同研究会のメンバーだけではなく、研究者、学生、一般への研究会の公開を推進している。

「各個研究」は、館員（客員教員を含む）が自主的にテーマを設定して、個人で実施する研究であるが、館の公的な研究活動の一環に組み入れられている。

館の研究活動である「機関研究」や個々の研究者による「各個研究」を資金面でサポートするのが、館長リーダーシップ経費と科学研究費助成事業などの外部資金である。前者では「研究成果公開プログラム」という枠組みがあり、機関研究プロジェクト以外の大規模なシンポジウムの実施をはじめ、共同研究や各個研究の成果を公開するための研究フォーラムや国外の学会、研究集会での発表を支援するものである。

しかし、2件の機関研究プロジェクト、33件の共同研究、客員教員や外国人研究員、機関研究員などを含めると100を超える各個研究の研究資金を運営費交付金だけから捻出することは到底できない。さらに研究に客観性を担保していく上でも、科学研究費助成事業などの競争的資金の導入を積極的に行っている。そのほか、日本学術振興会以外の独立行政法人が募集する助成金や民間の助成団体等による寄附金なども積極的に受け入れている。これら外部資金に付随する間接経費は貴重な研究支援経費となっており、それらを使用した館内の研究環境整備事業が実施されている。なお、館長リーダーシップ経費の「事業・調査経費」という枠組みも同じ目的で使われる。

また、本館が属する人間文化研究機構が主催する研究として「連携研究」が2005年度から本格的に始動した。連携研究は、人間文化研究機構を構成する6機関（国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国立国語研究所、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館）が連携してさらに高次の研究を目指すもので、「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」、「『人間文化資源』の総合的研究」、「大規模災害と人間文化研究」という3種類の大型プロジェクトが実施されている。

本館における研究成果公開の主軸のひとつである刊行物に関しては、2015年度には『国立民族学博物館研究報告』40巻1号～4号が刊行されるとともに、SES (Senri Ethnological Studies)、SER (『国立民族学博物館調査報告』または Senri Ethnological Reports)、『国立民族学博物館論集』、『民博通信』、『研究年報2014』が刊行され、外部出版制度を利用した成果公開も行った。さらに、研究成果を広く市民に公開するための学術講演会を、東京と大阪で開催している。

2014年度に共同利用に関してその強化を目的とする改革をおこなった結果、本館の共同利用では共同研究の公募、公開の推進と資料・設備の共同利用の促進を強調するようになった。なお、従来から、共同利用を積極的に推進するために、「外来研究員」「特別共同利用研究員」といった研究員制度を設けており、若手研究者の育成支援もおこなっている。

本館は開設以来40余年にわたり世界の民族と文化、社会を研究し、多様な有形・無形の民族資料とそれらに関連する情報を集積してきた。本館では、それらの資料と情報を「人類の文化資源」と位置づけ、同時代の人々と共有し、かつ後世に伝えるため、国際共同研究を組織し、国内外の複数の研究機関、大学、博物館、現地社会と連携しながら研究を推進している。この実現のため、グローバルな共同利用デジタル・データバンクとして「フォーラム型情報ミュージアム」を創出し、人類の文化資源に関する情報の発信、交換、生成、共有化を図る「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」プロジェクトを立ち上げた。このプロジェクトによって、研究者コミュニティのみならず、文化資源を作り出した現地社会との双方向的な交流も実現したいと考えている。初年度となる2014年度は、北米先住民や韓国の文化資源等に関する4件の研究プロジェクトの活動やシステムの基本設計を開始した。2015年度は、台湾原住民や北米北方先住民に関する2件のプロジェクトが加わり、合わせて6件のプロジェクトを実施するとともに、パイロット版のデータベースを作成した。

本館の資料は2004年度より標本資料、映像音響資料、文献図書資料、民族学研究アーカイブズ資料に大きく4分類されている。それぞれの整備および利用状況をみると、まず標本資料は、新構築に係る資料を中心に、寄贈などにより新たに加わった資料がある。映像音響資料の収集も文化資源プロジェクトの一環としておこなわれている。

文献図書資料に関しては、継続的な事業として国立情報学研究所 NACSISCAT（全国規模の総合目録データベース）への登録作業を推進している。2015年度はチベット語図書等4,030冊の他、マイクロ資料（UMI社収集による北米の大学の博士論文）約6,400点を登録した。遡及入力事業で登録された所蔵情報は、本館の図書システムの蔵書データベースとして、Internet を介して広く公開・利用されており、2015年度は本館所蔵図書資料の相互利用での貸出受付が788件、文献複写受付は1,686件と、大学間の共同利用に大きく貢献していることがわかる。また、館外者への貸出冊数も、延べ1,957冊と好評である。

2007年度より民族学研究アーカイブズの共同利用を促進するため、ホームページを開設し、各アーカイブの目録等を公開してきた。2015年度は、梅棹忠夫アーカイブの権利処理に関する覚書を作成するとともに、泉靖一アーカイブの紙資料リストおよび岩本公夫アーカイブの写真資料リストを一般公開した。また、沖守弘・インド民族文化資料の「紙資料」は一覧リストを、「写真資料」はデータベースを作成した。

2006年度に「民族学資料共同利用窓口」を設置し、利用に関する多様な問い合わせを1つの窓口で対応することにより、利用者に対するサービス向上を図っている。2015年度には290件の問い合わせに対応し、利用促進に寄与した。

また、蔵書点検5年計画の3年目として、書庫全体における不明資料の再調査に加えて、雑誌（1層）約6万冊に「カラーバーコード」を貼付し、総計6万2千冊の蔵書の点検をおこなった。

2-1 みんなの研究

機関研究

●機関研究の意義

本館では、現代世界が直面する学術的かつ社会的に重要な諸課題について探求するため、本館の組織をあげて重点的に取り組む大型で公開性の高い共同研究として、2004年度から機関研究を実施している。機関研究は、国内外の大学や研究機関との連携や学術協定に基づき研究者が参加する国際共同研究である。その研究プロジェクトの内容は、申請時に大学・研究機関などの外部評価者の意見を反映させるなど、大学共同利用機関として研究者コミュニティの意見が十分に反映されるような体制がとられている。また、機関研究ではプロジェクトに参加する海外の研究者をも国際共同研究員に任じており、本館と海外の研究者との連携を強化する機能も担っている。

2009年度にはそれまで4つに分かれていた研究領域の改組を行い、学術的かつ社会的な要請に基づいて、「包摂と自律の人間学」と「マテリアリティの人間学」という2つの研究領域を立ちあげた。前者は人と人の関係に、後者は人とモノの関係に研究の焦点をあわせつつ、新たな社会観や人間観の創出をめざして関連諸分野の研究者と協力しながら研究を実施している。

研究領域「包摂と自律の人間学」では、2015年度が第二期中期目標期間の最終年であるため、実施プロジェクトはなかった。一方、研究領域「マテリアリティの人間学」では、研究プロジェクト「手話言語と音声言語の比較に基づく新しい言語観の創生」（代表者：菊澤律子）および「文化遺産の人類学—グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」（代表者：飯田 卓）の合計2件のプロジェクトを実施した。

「マテリアリティの人間学」では、国際シンポジウム「手話言語と音声言語に関するシンポジウム」（2015年9月、本館開催、国際シンポジウム「無形文化遺産の継承における「オーセンティックな変更・変容」」（2016年3月、本館開催）を含め合計4件の国際研究集会を開催するなど研究成果の公開を着実に進めている。

また、機関研究プロジェクトが当初の目的に沿って効果的かつ適切に達成されたかについて評価するとともに、将来における機関研究の水準の向上とさらなる発展に資する助言を受けるため、「機関研究プロジェクト評価要項」を2013年6月に策定した。2015年度には、要項に基づき3人の委員からなる機関研究プロジェクト評価委員会にて、2014年度末に終了した2件の機関研究プロジェクトについて評価を実施した。

2015年度機関研究一覧領域

領域	プロジェクト	代表者	研究年度
1 包摂と自律の人間学 (領域代表：鈴木七美)	※第二期中期目標期間最終年のため、2015年度の実施プロジェクトなし。		
2 マテリアリティの人間学 (領域代表：寺田吉孝)	手話言語と音声言語の比較に基づく新しい言語観の創生	菊澤律子	2013～2015
	文化遺産の人類学——グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ	飯田 卓	2013～2015

●機関研究の領域とプロジェクト

1 「包摂と自律の人間学」 領域代表：研究戦略センター長

グローバル化が進む状況において人と人の関係を、人類学を核としつつ学際的に再検討して、新しい社会の構築を展望する。現代社会においては、マイノリティの自律性を保つとともに、社会的公正をめざす思想や方策が求められている。具体的には、公共圏や市民運動、ネットワーク、トランスナショナル、無国籍・重国籍、福祉、支援などが主要な研究テーマとなる。

2 「マテリアリティの人間学」 領域代表：先端人類科学研究部長

グローバル化が進む状況においてモノと人の関係を、人類学を核としつつ学際的に再検討して、新しい人間観の構築をめざす。モノと人の関係を、産業化や都市化、越境化などの脈絡で問い直し、また長期的時間軸を視野にいれて歴史的にも究明する。物神化の問題、人によるモノの収集と所有の問題、人工知能や情報技術など先端的科学技術と人の関係などが主要な研究テーマとなる。

「手話言語と音声言語の比較に基づく新しい言語観の創生」

代表者：菊澤律子 2013～2015

研究目的

本プロジェクトは、言語と、言語を担うヒトとの関係を、手話言語と音声言語の比較を通じてとらえ直すことを目的とする。

言語は、客観的に観察可能であり記述の対象となるという点で、ヒトからは独立した存在であり、人間が用いるツールのひとつととらえることができる。人間の言語には、手話言語と音声言語というふたつの形態があり、コード化という面で共通性を持つ一方、伝達のために用いるのが音なのかビジュアル情報なのかという「モダリティ」の面で異なっている。言語学は、長く、音声言語を対象とした研究成果に依ってきており、手話言語の記述研究への関心が高まってきた当初は、その音声言語との共通性について論じられることが多かった。本プロジェクトでは、そこから一歩すすみ、モダリティの違いに起因する「違い」を論じることで、人間の言語をよりよく理解しようと試みる。

手話言語と音声言語の違いを見ることは、さまざまな面で、言語学における基本概念の見直しにつながる可能性がある。たとえば、時間軸に沿って一本の情報が流れ続けるとされる「言語の線条性」は、長く言語の基本的な特徴とされてきた。手話では、時間軸に沿う、という点では共通しているものの、同時に並行する複数の系統による表出が可能である。同時並行する情報を、手話話者はどのようにコードとして認識し、理解しているのだろうか？

モダリティの違いに焦点をあてることで、言語というツールを人間がどのように認識しつづけているのかを新たに認識し、これからヒトはどのように言語と付き合っていくのか、本研究により、単にその記述のための方法論にとどまるのではなく、言語教育や社会体制などといったより広い文脈においても考察することができるようになることが期待される。

実施状況

日本財団助成による事業（最終年度）と合わせて「みんぱく手話言語学フェスタ2015」を以下の内容で開催した。これまでの内容を受けたテーマ設定に加え、同じく日本財団助成を受けている香港中文大学との共催での研究発表の時間も設けた。

(1) 時期：2015年9月20-21日

- (2) 場 所：大阪・国立民族学博物館 講堂
- (3) 対 象 者：国内外の大学生、大学院生、および研究者（一般公開）
- (4) 使用言語：英語、アメリカ手話、日本語、日本手話、香港手話（日英同時通訳、日本語－日本手話、英語－アメリカ手話、英語－香港手話通訳付き）
- (5) 内 容：
- ◆ 9月20日「手話言語学研究の現在」
 - 1) 香港中文大学における手話言語学への取り組みに関する報告と研究発表
 - 2) 昨年の内容を受けての音声言語と手話言語の比較による研究報告
 - ◆ 9月21日 国際シンポジウム「文法の強制・許容・制約と回避」
手話言語と音声言語の専門家から相互に関連するテーマで講演後、公開討論。

みんぱくセミナー「通訳学☆最前線：『通訳をする』とは、どういうことなのか」を以下の内容で開催した。

- (1) 時 期：2016年1月9日 13:00-17:50
- (2) 場 所：大阪・国立民族学博物館 第4セミナー室
- (3) 対 象 者：国内外の大学生、大学院生、および研究者（一般公開）
- (4) 使用言語：日本語、日本手話（日本語－日本手話通訳付き）
- (5) 内 容：
- 講演：
- 「米国におけるろう通訳者（Deaf interpreter）をめぐる動向」
川上恵（ギャロデット大学通訳学科修士修了）
 - 「米国における手話通訳研究——社会言語学モデルを中心に」
白澤麻弓（筑波技術大学准教授）
 - 「音声言語の同時通訳における概念化のプロセス」
船山仲他（神戸市外国語大学学長）
- ディスカッション司会：武田珂代子（立教大学教授）

成果

昨年度に続いて、国際シンポジウムを開催した。とくに、手話言語研究と同じトピックでの音声言語研究を組み合わせた研究報告により、手話言語と音声言語の研究者との歩みよりがみられたが、一方で、例年にもれず、関心を持ってくれる音声言語の研究者に限られてしまっているのが残念だった。今後は、言語学会などの、音声言語の研究者がマジョリティである場に今回のような研究発表の内容を持ち出していくことで、より多くの音声言語の専門家にも手話言語の研究に関心を持ってもらえるよう工夫する必要がある。今年度のシンポジウムでは、日本手話と日本語の対照研究（系統の異なる複数の言語の比較）の要素も入ってきたが、これについては、1月に民博セミナーとして、通訳学に関する小規模の公開講演会およびディスカッションを主催した。音声言語通訳の専門家と手話通訳関連との共同での講演の場は国内でも初めての試みとなったが、音声通訳学界における主要研究者を講演者および司会者として招待したところ、非常に大きな関心を持っていただくことができ、今後、通訳学会で積極的に手話通訳をつくるだけでなく、手話通訳関連の研究者に声をかけていきたいとの意向であった。

以上のように、アウトリーチかつ新研究領域に関する啓蒙については、目的を果たすと同時に具体的な成果をあげることができたが、一方で、音声言語研究と手話言語研究の学術的な融合については、三年間を通してまだ芽を出すきっかけになったばかりだというのが正直なところである。ただし、その「芽」は、音声学・音韻論、形態論、統語論、歴史言語学等、言語学におけるひろい分野に広がっている。また、ディスカッションの中では、音声言語と手話言語の多くの並行する特徴についてのコメントがあがってきた。その意味では、新領域開拓というプロジェクトの目的はある程度果たせたと考えているが、今後、これらの芽をどう伸ばしてゆくことができるのが、課題となってくると思われる。

機関研究に関連した公表実績

三年間のまとめとして、講演者、司会者および共同研究者から原稿を募り、出版物を準備中である。

研究目的

過去との結びつきを断とうとするモダニティの圧力が高まり、記憶が共同体のなかで無条件には存続しえなくなったいま、文化遺産を伝えようとする人びとがどのような物質的基盤をよりどころに過去との結びつきを保っているかを実証的かつ理論的に示す。また、過去との結びつきを模索する人たちの動きが合流し、文化遺産を支えるコミュニティがたち現われるプロセスを論ずる。

実施状況

2015年10月13日に国際フォーラム「文化遺産レジームを考える——レギーナ・ベンディクス教授を迎えて」を国立民族学博物館第4セミナー室で開催し（主催：国立民族学博物館、共催：日本民俗学会第67回年会実行委員会、科学研究費助成事業（基盤研究A）「東アジア〈日常学としての民俗学〉の構築に向けて」（代表：岩本通弥）、2016年3月11日～13日に国際シンポジウム「無形文化遺産の継承における「オーセンティックな変更・変容」」を国立民族学博物館第4セミナー室で開催した。後者はとりわけ、3年間にわたって継続した機関研究プロジェクト全体を総括することが開催目的のひとつだった。また、後者の国際シンポジウムに合わせて3月14日～16日に奈良での研究集会をおこない、シンポジウムの趣旨をより広い文脈において訴えかけるための議論をおこない、成果刊行にむけての準備を進めた。

成果

10月の国際フォーラムにおいては、ヨーロッパのヘリテイジ・スタディーズ（遺産研究）の第一人者を招いて議論をおこなった。文化遺産に関わる現象を、社会文化的ないし法的なマクロな文脈において調査研究することの重要性が確認されたのと同時に、本研究プロジェクトがめざすミクロな調査研究や、日本のローカルな文脈に即した調査研究の重要性も確認された。

翌年3月の国際シンポジウムは、上記の確認点をふまえてミクロな文脈およびローカルな文脈において各研究者が研究発表をおこない、なおかつ別個の研究としてでなく「文化遺産の人類学」というひとつの研究潮流としてまとめるよう試みた。こうした個別民族誌的研究の一般化は、機関研究全体をとおして開かれたフォーラム・シンポジウム・研究集会を一貫させる総括的な作業として、期間終了の直前にぜひともおこなう必要があった。結果は、当初意図した以上の成果を収めたといつてよい。

まずミクロないしローカルな視点をとることの重要性は、ユネスコが世界遺産・無形文化遺産に関わるプロジェクトにおいてある種のローカリズムを奨励していること、日本の文化財行政もそのことを意識して制度設計を見直す余地があることから、相対主義的アプローチとして文化人類学の分野から論じていく意義が大きい。現象の解釈においてはミクロかつローカルな文脈を無視できないものの、解釈することの意義はグローバルな背景をふまえてはじめて可能なのである。

また、さまざまな文化現象を「文化遺産」としてまとめあげる視点は、前年度までの議論で明らかになったとおり、19世紀から20世紀にかけてのナショナリズムの高揚によってはじめて生まれたものである。こうした事実は、「文化遺産」という視角がかなりの一般性を持つことを示しているが、文化遺産の担い手自身がそれを文化遺産とみなさない事例においては、有効性をもたないことが当初危惧されていた。しかし今回のシンポジウムでは、ほとんどすべての文化現象が外からのまなざしを受けつつ変貌していることをふまえ、むしろ積極的に文化遺産として考えるべきだという見かたが提示された。

機関研究の副題にある「コミュニティ」は、閉鎖的な担い手集団を想起させる危険があるものの、そうではなく外部に開かれたゆるやかな集団とみなすことにより、「伝承のレスポンシビリティ（応答性、責任）」という複雑な問題にむしろ解決の糸口を開くことが示唆された。これは、意匠のコピーライト（知的所有権）の問題にも連なっている。多くの事例においては、個人や会社が権利を有する著作物と同じように文化の知的所有権を厳密なかたちで主張することには、限界があるからだ。つまり、文化の担い手は、文化を広めようとするいっぽうで、政治的権威や大資本企業に悪用されることを警戒しなければならない。この二極のバランスをとるためには、文化を独占するのではなくシェア（共有）しながら運用していく態度が重要だと指摘された。シンポジウムで検討できた事例はかぎられているが、それ以外の多くの事例において文化遺産に関わるコミュニティが立ちあがる背景として、こうしたシェアしようとする意思が働いていると推測された。

シンポジウムのテーマとなっているチェンジ（変化または変更・変容）に関しては、とりわけ非アカデミックな

場において、文化遺産の継承にとっては否定的なものとならざるを得なかった。しかし無形文化遺産においては、同一とみなされることがらの反復によってものが伝承されており、毎回の実践が否応なく微妙な差異をはらむ。このため、さまざまな時代状況に応じて細部を変更していくことは別の点で同一性を保つためにむしろ重要であり、そうした変更にもかかわらず反復のすべてを同一とみなす担い手自身の視点を理解することが研究者や行政実務者にとっても重要だと指摘された。こうした視点の転換は、ミクロないしローカルな視点を謳いあげる相対主義的アプローチを構成するもうひとつの重要な主張である。

機関研究に関連した公表実績

河合洋尚・飯田卓（編）『中国地域の文化遺産——人類学の視点から』国立民族学博物館調査報告、2016年3月。

人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築

2014年度から、本館が所蔵する様々な人類の文化資源をもとに国際共同研究を実施し、情報生成型で多方向的なマルチメディア・データベースの構築を行う、「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」を行っている。初年度は、プロジェクトに係る基盤構築として、フォーラム型情報ミュージアム委員会のもとにシステム開発WGを置き、資料データ整備やデータベース間の総合連携、公開方法等について検討を進めた。併せて、ウェブサイト公開のため、既存紙ベース『月刊みんぱく』378冊について、写真のデータ化及びPDF化を実施した。

また、「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」、「『朝鮮半島の文化』に関するフォーラム型情報ミュージアムの基盤構築」、「徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」及び「民博所蔵『ジョージ・ブラウン・コレクション』の総合的データベースの構築」の4つの研究プロジェクトを開始し、ソースコミュニティとの共同作業、北アリゾナ博物館（米国）、アシウィ・アワン博物館・遺産センター（米国）及び国立民俗博物館（韓国）との国際学術協定に基づく国際共同研究等を通じて、情報の多層化、多言語化を推進した。

2015年度は、新たに「台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応」及び「北米北方先住民の文化資源に関するデータベースの構築に関する研究——民博コレクションを中心に」の2つの研究プロジェクトを加え、合わせて6つのプロジェクトを実施した。また共同研究の実施のため、新たに国立台湾歴史博物館との間の学術研究交流に関する協定書を2015年10月に締結した。

「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」研究プロジェクト

代表者*	プロジェクト課題名	区分	期間**
伊藤敦規	北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有	開発型	2014年6月～2018年3月
朝倉敏夫	「朝鮮半島の文化」に関するフォーラム型情報ミュージアムの基盤構築	強化型	2014年6月～2016年3月
福岡正太	徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築	強化型	2014年6月～2016年3月
林 勲男	民博所蔵「ジョージ・ブラウン・コレクション」の総合的データベースの構築	強化型	2014年6月～2016年3月
野林厚志	台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応	開発型	2015年4月～2019年3月
岸上伸啓	北米北方先住民の文化資源に関するデータベースの構築に関する研究——民博コレクションを中心に	強化型	2016年1月～2017年12月

*2015年度実施分

**開発型は4年以内、強化型は2年以内

実施状況

4月に、米国アリゾナ州から3名のホビを招聘し、国立民族学博物館（以下民博）にて資料熟覧を行うと同時に、民博国際ワークショップ『資料熟覧——資料熟覧のためのソースコミュニティ招聘プロセスと人類学的ドキュメンテーションの検討』（2015年4月16日～17日）を主宰した。このワークショップの目的は、民博による他機関へのソースコミュニティ熟覧者の派遣、もしくは他機関によるソースコミュニティの招聘を具体的に念頭に置きながら、熟覧実施とその記録に関する注意点や配慮すべき点をプロセスごとに確認することにあった。また、従来の文化人類学者自身が移動するフィールド調査と、ソースコミュニティの人々自身を移動させる熟覧調査との相違点を検討することで、文化人類学的調査の手法やドキュメンテーションの展開を図った。ワークショップ参加機関は、ホビの宗教指導者や木彫人形作家に加え、北海道白老のアイヌ民族博物館（館長、学芸員）、天理大学附属天理参考館（学芸員）、野外民族博物館リトルワールド（主任学芸員）、北海道大学アイヌ・先住民研究センター（准教授、博士研究員、技術補佐員）であった。

6月から8月までの約2ヶ月間、米国アリゾナ州とニューメキシコ州に滞在し、学術協定を結んだ北アリゾナ博物館が所蔵するホビ製宝飾品資料の写真撮影、資料熟覧、ソースコミュニティでの現地報告会などを行った。

9月は、米国ワシントンDCで開催された Association of Tribal Archives, Libraries, and Museums の国際会議に出席し、最先端の議論を聴講すると共に、スミソニアン協会の国立アメリカン・インディアン博物館やコレクション・リサーチ・センターなどを訪問し、資料収蔵状況やドキュメンテーション化の実態を学んだ。さらにDCでは、北アリゾナ博物館やスミソニアン協会の国立アメリカン・インディアン博物館の資料管理スタッフと、本プロジェクトの進捗や今後の予定などを検討し、将来的に協力して実施することを確認した。

10月は、フォーラム型情報ミュージアムの別の開発型プロジェクト（野林厚志代表、「台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応」）に関連して台湾で開催された国際ワークショップに参加し、本プロジェクトの進捗と全体プロジェクトの意義を口頭発表した（「民族学博物館と資源社群の再相會——意義与方法論」国立臺灣歴史博物館と日本国立民族学博物館交流ワークショップ『民族学と歴史学的の交會』国立臺灣歴史博物館（2015年10月15日～10月17日））。

11月には、ホビから2名の熟覧者を招聘し、民博で資料熟覧を実施したばかりか、他館での熟覧に派遣した。愛知県犬山市の野外民族博物館リトルワールド（99点）、奈良県天理市の天理大学附属天理参考館（26点）で熟覧し、その様子を静止画と動画で撮影した。民博での熟覧も行い、昨年度から実施してきた約430点のホビ製とされる全資料の熟覧とその記録が終了した。この時には、4月に実施した国際ワークショップと同様、アイヌ民族のアーティストとホビのアーティストとの交流の機会も設けた。

12月に再度渡米し、夏季に実施したアリゾナ州の北アリゾナ博物館での資料写真撮影と熟覧調査を継続して行い、合計約500点の資料熟覧を終えた。全ての作業の様子を映像と静止画で撮影した。また、ホビ保留地での進捗報告会を開催し、博物館に招聘・派遣できなかった人びとも、資料熟覧調査の様子を共有した。

1月には、東京の国立情報学研究所でシステム構築に関する研究打合せを開催した他、民博館内の関係者に進捗を報告する機会を設けた（第271回民博研究懇談会、2016年1月20日）。

2月には、民博で国際ワークショップ「フォーラム型情報ミュージアムのシステム構築に向けて——オンライン協働環境作りのための理念と技術的側面の検討」を開催・主宰した。スミソニアン協会国立アメリカン・インディアン博物館や極北研究センター、プリティッシュコロニア大学人類学博物館などから研究者を招聘し、フォーラム型情報ミュージアムのシステムデザインと、博物館とソースコミュニティとの間に顕在する協働の思想を同時に検討した。

また、北海道アイヌ協会と民博との間で行っているアイヌ伝統技術保持者の受入制度の機会を利用し、これまで行ってきた熟覧調査や事後報告会のやり方を相対化することが出来た。熟覧以前の情報提供や報告書の執筆と口頭発表といったアイヌ協会側のやり方が非常に参考になった。

3月は、来年度からの資料熟覧を予定している広島県福山市の松永はきもの資料館を訪問し、事務局長など関係者と今後の研究調査活動の方向性やスケジュールについて打合せを行った。この文化施設は2013年度までは私立だったが（旧称 日本郷土玩具博物館）、2015年7月に行政と地域ボランティアによる協働運営に運営形態が変わった（広島県、福山市、経済環境局、文化課）。このためこれまでに実施してきた私立博物館、宗教法人、大学共同利用機関法人とは異なる運営形態における協働プロジェクトが展開することとなる。また、国立民族学博物館・金沢大学とで実施した研究フォーラム「文化遺産の保存と活用：ミュージアムの視点から」において、本プロジェクトの

意義と進捗を講演した。

全期間にわたり、これまで実施した資料熟覧調査の映像・音声記録の文字起こし、内容確認、翻訳、映像字幕編集を行った。また、随時、日本国内外の研究者に本プロジェクトの概要や詳細を紹介した（ケニア国立博物館、パプアニューギニアの大学、国立オーストラリア大学、首都大学東京、関西大学、東京大学など）。なお、一部の熟覧者の招聘などについて、科学研究費助成事業（若手研究 A『日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究』（研究課題番号：26704012））の予算を用いて実施した。

成果

2年目となる2015年度は、学術協定に基づく国際共同研究を実施しながら、3度の国際ワークショップでの発表（その内2度は実行委員長として主宰）、2カ国4機関での熟覧調査、13度の研究発表・招待講演・ソースコミュニティにおける現地報告会を行った。また、4本の論文・報告書・エッセイの執筆を行った。さらに、フォーラム型情報ミュージアムの本プロジェクトに関するデータをビューアにまとめる予定であるため、そのシステムデザインに関する監修を行っている。

成果の公表実績

論文

伊藤敦規 「再会ツールとしての著作権——国立民族学博物館所蔵カナダ先住民版画資料の著作権処理を事例として」 齋藤玲子（編）『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題——国立民族学博物館所蔵のイヌットおよび北西海岸先住民の版画コレクションをととして』（『SER 国立民族学博物館調査報告』131：211-227。[査読有り]

エッセイなど

伊藤敦規 「アメリカ合衆国南西部先住民ホピのソーシャルダンス」、国枝たか子編、『世界のダンスⅡ——百カ国を結ぶ舞踊文化』、pp.78-79、不味堂。
伊藤敦規 「米国先住民ミュージシャン エド・カポーティ」『月刊みんぱく』39(11)：18-19「音の居場所」国立民族学博物館。
伊藤敦規 「民族学博物館とソースコミュニティとの再会」『民博通信』150：10-11「Project」、国立民族学博物館。

シンポジウム・ワークショップなど

- ・「[映像記録『Host Museum and Source Community Responsibilities in Collection Reviews（話者：シンシア・チャベス＝ラマー（国立アメリカン・インディアン博物館、資料管理副部長）、ジム・イノーテ（ズニ博物館、館長）』の視聴]の解説」国立民族学博物館国際ワークショップ『資料熟覧——資料熟覧のためのソースコミュニティ招聘プロセスと人類学的ドキュメンテーションの検討』（2015年4月16日）
- ・「[映像記録『Demonstration of the Collection Review（話者：シンシア・チャベス＝ラマー（国立アメリカン・インディアン博物館、資料管理副部長）、ジム・イノーテ（ズニ博物館、館長）』の視聴]の解説」国立民族学博物館国際ワークショップ『資料熟覧——資料熟覧のためのソースコミュニティ招聘プロセスと人類学的ドキュメンテーションの検討』（2015年4月16日）
- ・「趣旨説明——国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム・開発型プロジェクト「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」および科学研究費助成事業若手研究(A)「日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究」の目的と視座」国立民族学博物館国際ワークショップ『資料熟覧——資料熟覧のためのソースコミュニティ招聘プロセスと人類学的ドキュメンテーションの検討』2015年4月16日
- ・「資料熟覧に関する人類学的ドキュメンテーションについて」国立民族学博物館国際ワークショップ『資料熟覧——資料熟覧のためのソースコミュニティ招聘プロセスと人類学的ドキュメンテーションの検討』（2015年4月17日）
- ・「まとめ」国立民族学博物館国際ワークショップ『資料熟覧——資料熟覧のためのソースコミュニティ招聘プロセスと人類学的ドキュメンテーションの検討』（2015年4月17日）
- ・「民族学博物館與資源社群の再相會——意義與方法論」國立臺灣歷史博物館與日本國立民族學博物館交流工作坊『民族學與歷史學的交會』國立臺灣歷史博物館 [査読無し]（2015年10月16日）
- ・Kathy Dougherty and Atsunori Ito “Hopi Collection Review Project in the US and Japan” in the Minpaku International Workshop System Development for the Info-Forum Museum: Philosophy and Technique,

National Museum of Ethnology, Japan. (2016年2月12日)

その他の学会発表や招待講演など

- Kelley Hays-Gilpin, Atsunori Ito, Gerald Lomaventema 2015 “Hopi Overlay Program”, Museum of Northern Arizona 85th Hopi Festival, Easton Collections Center. (2015年7月4日)
- 伊藤敦規、ジェロ・ロマベンティマ、マール・ナモキ 2015「ソースコミュニティとの協働資料熟覧」伊藤敦規代表、国立民族学博物館共同研究会『米国本土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究、2015年度第2回研究会』、国立民族学博物館。(2015年11月14日)
- 「米国先住民ホピによる民博所蔵民族誌資料熟覧の紹介」伊藤敦規代表、国立民族学博物館共同研究会『米国本土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究、2015年度第2回研究会』、国立民族学博物館。(2015年11月14日)
- Atsunori Ito 2015 “Collaborative Reviewing Efforts of Hopi items in museum collections both domestic and international” Shungopavi Community Building, Arizona, USA. (2015年12月11日)
- 「民族学博物館資料の高度情報化とオンライン協働環境整備に向けた取り組み——フォーラム型情報ミュージアムプロジェクトの中間報告として」第271回民博研究懇談会。(2016年1月20日)

映像作品上映会

- Kelley Hays-Gilpin, Atsunori Ito, Gerald Lomaventema 2015 “Screening Hopi Jewelry: Hopi Culture Expressed on Silver” “Hopi Overlay Program” in Museum of Northern Arizona 85th Hopi Festival, Easton Collections Center. (2015年7月4日)

『朝鮮半島の文化』に関するフォーラム型情報ミュージアムの基盤構築

代表者：朝倉敏夫 2014年6月～2016年3月

実施状況

「朝鮮半島の文化」に関する本館資料の全体的データベースの基礎資料の整備

- 本館と韓国民博と「食」関連資料のデータベースの相互活用
- 本館と韓国民博を基盤としたデータベースの世界発信

成果

民博の資料：1988年以前に収集した資料 2726点

- ① 民博の既存のデータ
- ② ①を辛瑛根によるデータ・チェック、韓国語での補足説明
- ③ ②を日本語に翻訳（高正子他）

このうち、「食」関連の資料 557点

- ④ 英語に翻訳（玄企画）
- ⑤ 書き込み：韓国語で3人（金セツピョル・金月徳・李徳雨）2016年3月に完成

韓国民博の資料：『韓民族歴史文化図鑑 食生活』387点

- ① 韓国語版の英訳（韓国民博）
- ② 韓国語版の日本語訳（権允義）

特別展「韓日食博」での公開（丸川雄三）

国立民族学博物館資料 459点

分類：甕、壺、籠、箱、膳、盆、食器、調理器、祭礼器、農具

韓国国立民俗博物館資料 384点

分類：食器、食膳、調理器、貯蔵・運搬具、加工具

成果の公表実績

- 「韓国食文化データベース」の公開
- 特別展「韓日食博」において展示公開した標本資料とその関連情報をウェブサイトで発信

- 2016年度の前半に館内及び関係者に公開し、内容等調整のうえ一般公開

「徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」

代表者：福岡正太 2014年6月～2016年3月

実施状況

これまで現地での意見交換に基づき、伊仙町馬根集落の十五夜およびイッサンサン行事、天城町西阿木名集落の十五夜行事の調査撮影をおこない、データの充実をはかった。これまでのデータと合わせて、フォーラム型情報ミュージアムのシステムへのデータ登録を進めている。あわせて、現在の伝承における諸問題と映像記録活用の可能性について、徳之島町井之川集落、天城町西阿木名集落、天城町立西阿木名小学校、天城町教育委員会等でインタビュー撮影をおこなった。西阿木名小学校は、民謡保存会の協力により郷土の芸能の学習に力を入れており、授業の撮影もおこなった。また、徳之島町金見集落と天城町西阿木名集落において映像の上映と意見交換会を開催した。金見集落では、徳之島民謡を研究する酒井正子氏の協力を得て、氏が撮影した25年前の映像、住民が撮影した20年前の映像、民博が撮影した5年前の映像を比較上映し、様々な機関や個人が所蔵する記録をフォーラム型情報ミュージアム等のシステムに集積する可能性および今後も記録を重ねていくことの意義について議論をおこなった。なお、徳之島におけるフォーラム型情報ミュージアムの公開と活用について、天城町および伊仙町の関係者と協議した。

成果

徳之島の各集落は、少子高齢化等により、その伝統の継承に困難をかかえている。このプロジェクトの基となった芸能の映像撮影は、消滅が心配される集落の芸能の記録作成および映像を活用した伝承活動の活発化を期待する地元の関係者の要請を受けて開始された。このプロジェクトにおいては、2年間に7集落において芸能等の補充調査撮影をおこない、計28集落の芸能の映像記録を主なコンテンツとするフォーラム型情報ミュージアムの構築を日英2言語により続けてきた。並行して、徳之島各集落の公民館等で6回の上映および意見交換会を開催し、記録映像の活用の可能性について探った。

この研究により、次のことがわかってきた。映像記録は自分たちの芸能を再確認する機会となること、他の集落との比較の機会となること、芸能の習得や創造の参考となることである。さらに、映像は見る者の記憶を活性化し、芸能に関する経験や知識を引き出す大きなきっかけとなることも明らかになった。こうした映像の直接的な効用に加えて、私たちが調査や撮影のために訪問すること自体が、芸能を伝承する上でのある種の刺激となることも地元関係者からしばしば指摘された。また、このプロジェクトによる徳之島芸能の記録映像の集積により、研究者や研究機関等が記録した資料や住民が記録保存している資料についての情報が寄せられるなど、関係資料の集積にもつながる可能性が明らかになった。

このシステムの本格的な稼働後の利用については、次のような見通しを得ている。地元関係者と協力した小中学校における地域の文化の学習の機会は、子どもだけでなく、保護者の関心と参加を誘うことにもつながっており、集落の伝統文化伝承において学校への期待が高まっている。そこで学校におけるシステムの利用を進めるべく調整を進めている。また、島外に暮らす集落関係者が増えており、こうした人々がふるさとの芸能に触れ、学ぶ機会を提供することが期待されており、郷友会等、島外に暮らす集落関係者のあいだでの利用の機会を作る必要がある。

成果の公表実績

このプロジェクトで試作したデータベースについては、ウェブを通じた稼働、特に動画の配信について実験を重ねて、最終的な調整をおこない、2016年度の早い段階で徳之島での公開をおこなう。なお、最初の公開場所は、天城町ユイの館と伊仙町立歴史民俗資料館を想定している。また、天城町立西阿木名小学校の授業において試用の了承を得ている。研究機関以外の、島外での一般公開については、集落ごとに合意を形成することが望ましく、システムを利用してもらった上で同意を得る予定である。

「民博所蔵『ジョージ・ブラウン・コレクション』の総合的データベースの構築」

代表者：林 勲男 2014年6月～2016年3月

実施状況

2014年4月に始まった本プロジェクトでは、海外からソロモン諸島資料に関してリース・リチャーズ氏、メラネ

シア資料の植物材料に関してロビン・ハイド氏（オーストラリア国立大学名誉教授）、フィジー諸島資料に関しては、ロデリック・エウイン氏（タスマニア大学名誉教授）を、またサモアとトンガの資料の熟覧調査のため、山本真鳥氏（法政大学教授）を招聘した。これによって新たに収集されたデータは、G. B. コレクション・データベースに反映させる作業を始めている。ブラウン自身による収集活動に関わるデータを、彼の著作や書簡から析出し、ウェブサイトに掲載するための作業を開始した。

海外調査としては、オーストラリア、ニュージーランド、連合王国で調査を実施し、コレクションのこれまでの変遷や関係記録の確認、および民博が購入した際に連合王国外への輸出が認められなかった標本資料の確認をおこなった。同時に、関係機関の研究者に対して本プロジェクトについて説明をおこない、協力を要請した。

成果

招聘した研究者たちのコレクション資料の熟覧によって、新たなデータが得られた。これらをG. B. コレクション・データベースにいかんにか反映させるか、データベースおよびウェブサイトのインターフェイスのデザインも含めた検討を開始している。

ジョージ・ブラウンの収集活動並びにコレクションの社会的・歴史的背景については、彼の著書および書簡の調査を通じて関係情報を収集し、フォーラム型情報ミュージアム上での見せ方について検討を開始している。

英国での調査によって、大英博物館、ディスクバリー博物館（ハンコック博物館が収蔵していた当時のG. B. コレクションに関するデータを所有）、ボウズ博物館（英国で最初にG. B. コレクションを所蔵し展示をおこなった博物館、ブラウンの生誕の地であるバーナード・キャスルにある）からコレクションの購入・売却、展示、他の博物館との間でおこなわれた資料の交換等に関するデータを入手した。その分析と公開に向けての手続きの検討、および紙媒体からデジタル化する作業を開始している。これらの研究機関の担当者に加えて、ジョージ・ブラウンの弟の直系筋にあたるマイケル・ブラウン氏（ニューキャスル近郊在住）や、2012年度に「G. B. コレクションの再文脈化に関する実践的研究」のため、AHRC IPSで民博の外来研究員として受け入れたクリストファー・マキュー氏らの協力により、情報収集のネットワークが徐々に拡大し、かつてコレクションを所蔵していた機関での管理や展示の様子についても、データが集まり始めている。

すでに、G. B. コレクションの日本語・英語のデータベースは一般公開していたが、G. B. コレクション及びそのデータベースに関する簡単な説明文を、日本語と英語に加えて、メラネシア・ピジン語、サモア語、トンガ語、フィジー語にし、インターフェイスを修正してそれぞれの言語でこの解説を読めるようにした。

成果の公表実績

館内向け公開は、2016年のゴールデンウィーク明け頃を目指している。データベース自体の一般公開は、2016年の初秋を目指しているが、コレクションの遍歴に関する海外の機関から提供されたデータに関しては、公開・非公開について精査していく必要がある。

また、このプロジェクトの経過とその成果について、英文の論文もしくは研究ノートを2016年度中に執筆する計画である。

データの収集活動を継続すると共に、データベースの利活用についてユーザー側の利便性を検討していく。2015年度に招聘したDivine Word大学（パプアニューギニア）のクレイグ・フォーカー教授は、ニューアイルランド島在住であり、G. B. コレクションのソース・コミュニティの住民や出身の大学生たちとともに、G. B. コレクション・データベースの利活用についての検討に参加してもらい、利用しやすいインターフェイルを共に開発していく計画である。

「台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応」

代表者：野林厚志 2015年4月～2019年3月

実施状況

本年度は研究計画にしたがい、次の3点の内容に着手した。

1) 台湾資料、琉球列島資料に関する情報整理ならびに日本語、中国語による資料台帳の作成。2) 学術交流締結機関とのプロジェクト内容の協議、確認。3) 台湾資料に関する情報収集のための現地予備調査。

1) については、台湾、琉球列島諸島の資料に関連した文献情報の収集（琉球列島資料）、台湾および海外の学術機関のデータベース上で公開されている本館所属と関連した資料に関する情報の収集（台湾資料を中心）を行った。また、台湾資料の標本資名については、英語訳、中国語訳を作成した。

2)については、(1)順益台湾原住民博物館を訪問し、博物館長ならびに担当学芸員にプロジェクトの内容についての説明を行い、協力関係の発展的な継続について確認、(2)国立台湾大学考古人類学系および国立台湾大学情報センターを訪問し、当該部門で進めてきた海外資料データベースとの将来的なリンクも含めた研究計画について協議、(3)国立史前文化博物館を訪問し、次年度以降におけるビレッジミーティングの計画について協議、(4)国立台湾歴史博物館と学術協定を締結し、研究協力と成果の公開についての協議、ならびにキックオフとなるワークショップを開催、(5)琉球大学風樹館、琉球大学URAを訪問し、琉球関係資料の資料情報収集のネットワーク形成について協議を行った。

3)については、2)における活動時に並行して先方機関等での予備的調査を実施した。

これらの成果の公開の一環として、外部資金も活用しながら、国際ワークショップを実施した（1月24日）。

成果

当初の研究計画におおむねしたがった研究活動が実施できた。特に国立台湾歴史博物館において実施した国際ワークショップでは、外部資金を活用しながら、館内メンバー全員の参加を実現し、双方の将来構想も含めた情報、意見を担当者のみならず先方機関の所属職員と広く共有することができた。

資料台帳については、台湾資料については英語、中国語、日本語の3言語による目録情報の公開はデータコンテンツとしては可能な状況となっており、システム部分の構築を待つ状態となっている。

成果の公表実績

出版

野林厚志

2015年12月24日 「情報遺産」を博物館が構築する意義——「核としての周縁」からの発信』『民博通信』第151号：12-13

公開シンポジウム

(1) 国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム国際ワークショップ

「台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応」

(中文題目「台湾及周邊島嶼的物質文化之生態學適應性」)

日時：2016年1月24日（日）

場所：国立民族学博物館第5セミナー室

【プログラム】

10：30～

野林厚志・日高真吾（国立民族学博物館）

「収蔵庫資料閲覧のイントロダクション」

11：00～11：40

「台湾および沖縄資料の閲覧」

公開ワークショップ（13：00開場）

13：15～13：45

野林厚志（国立民族学博物館）

「プロジェクトの概要と博物館資料のデータベース化の国際的状況」

13：45～14：45

佐々木健志（琉球大学風樹館）

「沖縄の祭祀に残る藁算と民博の藁算資料の概要」

15：00～16：10

陳俊男（国立臺灣史前文化博物館南科分館籌備處）

「台湾南科園區史前時代的生態資源利用」（逐語通訳有）

（「台湾南科園區における先史時代の資源利用」）

16：10～16：40

質疑応答・総括

16：40～18：00

プロジェクト・ミーティング

(2) 国際ワークショップ「国立臺灣歴史博物館 国立民族学博物館2015年「民族学と歴史学の交流」博物館交流

ワークショップ」

日時：2015年10月15日～16日

場所：国立台湾歴史博物館

本館参加者：須藤健一館長、伊藤敦規、寺村裕史、日高真吾、野林厚志

研究協力者：黄貞燕（国立台湾芸術大学）、范如苑（国立台南大学）、河村友佳子（元興寺文化財研究所）、和高智美（文化創造巧芸）

【プログラム】

時間	日期	10月15日（木）
展示與文化詮釋		
15：00～16：30		本館常設展ならびに「鉅變1895」、「舊邦維新」、「二戰下の臺灣人」見学と意見交換
16：40～17：40		座談会：(民族)の歴史記憶、戦争の記憶の展示と再現 ナビゲーター：呂理政（国立臺灣歴史博物館館長） 参加者：民博ならびに臺史博のメンバー

時間	日期	10月16日（金）
09：40～10：00		臺史博と民博の協定調印式
博物館價值與社會責任		
10：00～11：00		基調講演：友好と公正な博物館 呂理政（国立臺灣歴史博物館館長）
11：10～12：10		專題演講：「21世紀の民族学博物館と博情館」 須藤健一（国立民族學博物館館長）
12：10～13：10		昼食
民族學與博物館の新課題		
13：10～14：30		報告題目：「台湾におけるエスニシティと動物観——イノシシとブタの利用から考える」 報告人：野林厚志（国立民族學博物館教授）
14：40～16：00		報告題目：「民族学博物館とソースコミュニティの再会——意義と方法論」 報告人：伊藤敦規（国立民族學博物館助教）
16：00～		休憩と夕食
原住民の祭礼と文化復興		
20：00～02：00 夜祭開幕(23：00)		台南シラヤ族夜祭の見学

時間	日期	10月17日（土）
10：30～12：00		座談討論：臺灣平埔族祭礼文化の復興 ナビゲーター：呂理政（国立臺灣歴史博物館館長） 参加者：臺史博及民博研究メンバー
12：00～13：10		昼食
博物館資源と科学技術の応用の趨勢		
13：10～14：30		報告題目：「地理情報システム（GIS）を用いた時空間情報の統合の方法論とその意義」 報告人：寺村裕史（国立民族學博物館助教）
14：40～15：20		座談討論：臺史博と民博のクラウド技術応用と資料協力 ナビゲーター：謝仕淵（国立臺灣歴史博物館副研究員） 参加者：臺史博ならびに民博研究メンバー
臺史博と民博協力課題の對話：内田資料を主とした議論		
15：30～16：50		報告題目：内田先生資料と日本学者の収集活動の意義 報告人：野林厚志（国立民族學博物館教授）

17:00~17:40	座談討論：国立民族学博物館所蔵の内田資料にもとづく臺灣研究、臺南研究の一つの方向性 ナビゲーター：謝仕淵（国立臺灣歴史博物館副研究員） 参加者：臺史博と民博研究メンバー
-------------	--

「北米北方先住民の文化資源に関するデータベースの構築に関する研究——民博コレクションを中心に」
代表者：岸上伸啓 2016年1月～2017年12月

実施状況

本年度は、下記の3点について調査・研究を実施した。

- (1) 民博が収蔵している北米北方先住民資料に関してすでにデータベース化されている約2,000点の標本資料の基本情報を整理し、検討した。この作業に基づいて、日本語の基本情報データベースをエクセルで整理した。
- (2) 標本資料を制作もしくは使用した諸民族を地域ごとに分類するために、文化領域の大枠を検討した。具体的には、アラスカ地域、北西海岸地域、台地地域、大平原地域、亜極北地域、五大湖・セント・ローレンス川地域、大西洋海岸地域、カナダ極北地域、グリーンランドの9地域に大別することの有効性を検討した。同時に北米北方先住諸民族の文化と社会、歴史に関する基本文献を渉猟し、各標本資料に関連する民族や文化、社会、歴史、地理環境、映像情報、研究文献情報について調査し、各標本資料に追加する画像やデータを準備した。
- (3) 2016年度に予定している現地情報の収集や基本情報の確認と現地語化するための現地調査の準備をカナダの博物館の研究者と連絡を取りながら行った。

成果

本年度の研究成果は、以下の3点である。

- (1) 本館が収蔵している北米北方先住民資料に関して約2,000点の標本資料の基本情報をエクセルで整理した。その結果、アラスカ・カナダ・グリーンランドのイヌイト関連資料と北米北西海岸資料が大半を占めているが、各文化領域を代表する標本資料も存在していることが判明した。ただし、極北地域と北西海岸地域を除く標本資料については現地語名などの情報が欠落していた。
- (2) 多数の関連研究文献の渉猟を通して、北米北方先住民文化を文化領域で分類する枠組みとして、アラスカ地域、北西海岸地域、台地地域、大平原地域、亜極北地域、五大湖・セント・ローレンス川地域、大西洋海岸地域、カナダ極北地域、グリーンランドの9地域に大別することがもっとも妥当であるという結論を得た。
- (3) 本プロジェクトを推進していくためには、バンクーバー市にあるUBCの人類学博物館、アルバータ州エドモントン市のロイヤル・アルバータ博物館、アルバータ州カルガリー市のグレンボー博物館、サスカチュワン州リジャイナ市のロイヤル・サスカチュワン博物館、マニトバ州ウィニペグ市のマニトバ博物館とウィニペグ美術館、オンタリオ州トロント市のロイヤル・オンタリオ博物館、ケベック州モントリオール市のマッコード博物館、ケベック州ガティノー市のカナダ歴史博物館、ノヴァスコシア州ハリファックス市のノヴァスコシア博物館を調査訪問し、標本資料情報を確認するとともに、現地語翻訳の協力についての話し合いを行う必要があることが分かった。

成果の公表実績

公開シンポジウム

岸上伸啓 「民博のフォーラム型情報ミュージアム構想」国際ワークショップ「フォーラム型情報ミュージアムのシステム構築に向けて——オンライン協働環境作りのための理念と技術的側面の検討」国立民族学博物館・第4セミナー室（2016年2月11日）

共同研究

2015年度の応募・採択状況

課題1：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究

課題2：本館の所蔵する資料に関する研究

研究会の区分		2015年度				
研究代表者	課題区分	申請	採択	継続	計	
一般	館内	課題1	4	3	5	11
		課題2	1	1	2	
	客員	課題1	0	0	0	0
		課題2	0	0	0	
	公募	課題1	10	6	11	18
		課題2	2	0	1	
若手	課題1	1	0	3	4	
	課題2	1	1	0		
計		19	11	22	33	

共同研究課題一覧

○印は公募による実施課題、●印は若手による実施課題

研究課題	研究代表者	課題区分	研究年度
明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動——国立民族学博物館所蔵のアイヌ、ウイルト、ニヅフ資料の再検討	齋藤玲子	2	2012-2016
○ アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類学的研究——資源利用と物質文化の時空間比較	小野林太郎	1	2012-2016
○ 「統制」と公共性の人類学的研究——ミャンマーにおけるモノ・情報・コミュニティ	土佐桂子	1	2012-2016
映像民族誌のナラティブの革新	川瀬 慈	1	2013-2016
聖地の政治経済学——ユーラシア地域大国における比較研究	杉本良男	1	2013-2017
米国本土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究	伊藤敦規	2	2013-2017
○ 表象のポリティックス——グローバル世界における先住民／少数者を焦点に	窪田幸子	1	2013-2017
○ エージェンシーの定立と作用——コミュニケーションから構想する次世代人類学の展望	杉島敬志	1	2013-2017
○ 宗教人類学の再創造——滲出する宗教性と現代世界	長谷千代子	1	2013-2017
○ 東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ、国家、グローバル化	福岡まどか	1	2013-2017
○ 近代ヒスパニック世界における文書ネットワーク・システムの成立と展開	吉江貴文	1	2013-2017
● 宗教の開発実践と公共性に関する人類学的研究	石森大知	1	2013-2016
● 再分配を通じた集団の生成に関する比較民族史的研究——手続きと多層性に注目して	浜田明範	1	2013-2016
現代「手芸」文化に関する研究	上羽陽子	1	2014-2018
近世カトリックの世界宣教と文化順応	齋藤 晃	1	2014-2018

家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究——保育と介護の制度化／脱制度化を中心に	森 明子	1	2014-2018
○ 政治的分類——被支配者の視点からエスニシティ・人種を再考する	太田好信	1	2014-2018
○ 生活用品から見たライフスタイルの近代化とその国別差異の研究	鏡味治也	1	2014-2017
○ 呪術的实践=知の現代的位相——他の諸実践=知との関係性に着目して	川田牧人	1	2014-2018
○ 資源化される「歴史」——中国南部諸民族の分析から	長谷川 清	1	2014-2018
○ モノにみる近代日本の子どもの文化と社会の総合的研究——国立民族学博物館所蔵多田コレクションを中心に	是澤博昭	2	2014-2018
● 演じる人・モノ・身体——芸能研究とマテリアリティの人類学の交差点	吉田ゆか子	1	2014-2017
チベット仏教古派及びボン教の護符に関する記述研究	長野泰彦	2	2015-2019
グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究	松尾瑞穂	1	2015-2019
驚異と怪異——想像界の比較研究	山中由里子	1	2015-2019
応援の人類学——政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌	丹羽典生	1	2015-2019
○ 考古学の民族誌——考古学的知識の多様な形成・利用・変成過程の研究	ERTL, John	1	2015-2019
○ 宇宙開発に関する文化人類学からの接近	岡田浩樹	1	2015-2019
○ 放射線影響をめぐる「当事者性」に関する学際的研究	中原聖乃	1	2015-2019
○ 医療者向け医療人類学教育の検討——保健医療福祉専門職との協働	飯田淳子	1	2015-2019
○ 個-世界論——中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム	齋藤 剛	1	2015-2019
○ 確率的事象と不確実性の人類学——「リスク社会」化に抗する世界像の描出	市野澤潤平	1	2015-2019
● 高等教育機関を対象にした博物館資料の活用に関する研究	呉屋淳子	2	2015-2018

「明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動

——国立民族学博物館所蔵のアイヌ、ウイльта、ニヴフ資料の再検討」——

国立民族学博物館が所蔵する北海道、樺太、千島の民族資料のうち、第二次世界大戦終戦までに収集されたことが明らかなのは、アイヌが1000点以上、ウイльтаで280点以上、ニヴフで70点以上ある。これらは伝統的な特徴をよく残しており、素材や製作技法といった物質文化研究を進めるうえで重要であるとともに、現在では収集できない貴重なものが多数含まれている。ただ残念なことに、当時の調査・収集時の誤解・誤認や資料管理の限界、また、数度の管理替えによる情報の紛失、転記・入力時のミスなどにより、資料データの欠けているものや誤りが少なくない。しかし、これらの資料は収集者が明らかなのが大部分で、その足跡をたどることによって、情報を再検討し、修正・追加できる可能性が十分にある。本研究では、各民族の物質文化、言語等に関する専門家が共同研究を行うことによって、資料に適正な情報を付すとともに、あわせて明治から昭和前期までの人類学または民族学者と被調査者・資料提供者との関係など、資料が集められた当時の研究状況と社会的な背景を明らかにする。

研究代表者 齋藤玲子

班員（館内）佐々木史郎

（館外）大塚和義 小川正人 加藤 克 北原次郎太 木名瀬高嗣 小西雅徳 田村将人
丹菊逸治 津曲敏郎 手塚 薫

研究会

2015年11月7日

成果出版に関する打ち合わせ

齋藤玲子（国立民族学博物館）「出版物の概要と構成案について」

加藤 克（北海道大学）「東京大学人類学教室移管資料を対象とした『再検討』」

全 員 「論文・報告の概要について」

2015年11月8日

丹菊逸治（北海道大学）「ニヴフ関連資料の記載法と表記法をめぐるいくつかの問題」
津曲敏郎（北海道大学）「金田一編『日本国内書人種の言語』記載のウイльта語について」
全 員 「論文・報告の概要について」
討論および今後のスケジュール確認

成果

共同研究員各自がこれまでの成果を持ち寄り、成果刊行物に執筆予定の内容について報告し、討論をおこなった。とくに、2014年度におこなった東京大学所蔵の坪井正五郎関連資料から見えてきた1907年の樺太調査の経緯と収集された民族資料等の情報、および東京帝国大学理科大学時代の1884年に発行された“Catalogue of archaeological specimens with some of recent origin”に記載の資料のうち、民博に移管された資料と照合できたものが多数あったことは重要な成果であると確認された。

また、1938年に日本民族学会が派遣した北方文化調査隊として樺太で調査と資料収集にあたった宮本馨太郎が残した同学会附属民族学博物館の資料カードの情報が有用であることも再確認された。とくにウイльта語やニヴフ語で表された標本資料の現地名は言語学の視点からも興味深い情報であり、博物館資料の表記法について課題を提起するものとしても注目された。

「アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類学的研究——資源利用と物質文化の時空間比較」——

アフリカ大陸で誕生した現生人類は、約5万年前頃までにはアジアやオセアニアの島嶼海域に移住・拡散した。島嶼海域に進出した人類は、自然資源や加工生産物を交換するために海を渡る移動を繰り返し、その過程で広範囲に及ぶネットワークを形成してきた。アジア・オセアニアには、そうした海域ネットワークを生活基盤とする社会が各地にみられる。本研究の目的は、この海域ネットワーク社会の普遍性と地域性を、物質文化と資源利用の様式ならびにその分布に関する時空間の双方の面からの比較を通じて、人類史的な視点で検討するところにある。このうち時間面では、5万年程度の幅の考古学的時間と約100年程度の幅の民族誌的時間を、空間面では、日本を含む東アジア、東南アジア、オセアニアの海域を、それぞれ比較の準拠枠と、主な検討事項としては資源利用と物質文化をテーマに検討を進め、海域ネットワーク社会の普遍性と地域性を明らかにするのが狙いである。

研究代表者 小野林太郎

班員（館内） 飯田 卓 印東道子
（館外） 赤嶺 淳 秋道智彌 片桐千亜紀 島袋綾野 鈴木佑記 田中和彦 玉城 毅
長津一史 橋村 修 深田淳太郎 山形真理子 山極海嗣 山口 徹

研究会

2015年6月21日

小野林太郎（東海大学）・長津一史（東洋大学）「今年度研究会の方向性について」
秋道智彌（国立民族学博物館）「トビウオ漁から見た琉球の位置：アジア・太平洋の視点から」
赤嶺 淳（一橋大学）「ナマコ利用の多様化と可能性——マレーシアの事例から」

2015年10月15日

長沼さやか（静岡大学）「漁民の移動と定住：中国珠江デルタの水上居民からの考察」（特別講師）

2015年10月26日

小野林太郎（東海大学）・長津一史（東洋大学）「今回のテーマと課題」
飯田 卓（国立民族学博物館）「マダガスカル島の対大陸ネットワークと沿岸ネットワーク」
竹川大介（北九州市立大学）「メラネシアの海産資源をめぐるネットワークと資源利用」（特別講師）
山口 徹（慶應義塾大学）「プカプカ環礁の植民地期におけるネットワーク」

成果

本年度は計3回の研究会を開催し、研究メンバーおよび特別講師による発表に基づき、活発な議論・検討を行った。本年度における発表により、本研究メンバー全員が最低1回の研究発表を行い、各テーマに関する総合的な議論を深めた。これに対し特別講師による発表では、本研究メンバーだけでは検討に限界のある東アジア海域の大陸

沿岸域の事例（長沼）や、メラネシアのイルカ資源をめぐるネットワークの事例（竹川）に注目し、比較論的視点から活発な議論を行った。また最終年度のため、研究成果公表計画についても各研究会の際にメンバーでの検討を重ねた。

「『統制』と公共性の人類学的研究——ミャンマーにおけるモノ・情報・コミュニティ」

ミャンマー（ビルマ）は1962年ネーウィンの軍事クーデター以来、半世紀の間に3つの政治体制（社会主義、軍政、大統領制）と2つの経済体制（社会主義体制における統制経済、経済制裁下の市場経済）を経験したが、一貫して物の流れや人的移動、情報などを中心に厳しい統制が課せられてきた。本研究会で扱う「統制」とは比較的可視化されやすい国家政策に留まらず、宗教、ジェンダーといった多様な領域に及ぶ不可視のイデオロギーと支配装置、さらに、隣組的な相互監視システムや言論統制などを通じて身体化された統制をも含む。他方、それぞれのコミュニティ内で、例えばミャンマーであれば、僧院を核とする宗教ネットワークや在家組織、精霊信仰の霊媒や信者たち、各少数民族や国際・国内NGOなどの組織やその参加者、その他ジェンダーや「親しい（キン）」を媒介とする繋がりの中に、「統制」をすり抜け、オルタナティブなネットワークを作る戦略的实践が存在してきた。本研究会では、こうした実践に着目し、「統制」と公共性という二つの観点から、統制解除へと急激に移行しつつあるミャンマーを中心に、社会的再編成、コミュニティの公共性やその変容を明らかにすることを旨とする。

研究代表者 土佐桂子

班員（館内） 信田敏宏

（館外） 飯國有佳子 生駒美樹 伊藤まり子 伊野憲治 岡本正明 藏本龍介 斎藤紋子
高谷紀夫 田村克己 田村慶子 テッテツヌティ 松井生子

研究会

2015年8月3日

箱田 徹（大阪市立大学）「導きと対抗導きの世界 フーコー統治論からの権力論・公共性論」
フィールドから見たパブリック・プライベート・パブリシティ（全員発表）
総合討論

2016年2月7日

全員の草稿発表
コミュニティ・危機管理に関する検討（全員）
宗教に関する検討（全員）
民族に関する検討（全員）
総合討論

成果

この研究会の開催期間中に、ミャンマーは劇的に変化し、半世紀ぶりに文民政権が誕生することとなった。厳しい検閲制度が課せられてきたメディアにも、ここ数年で一定の言論の自由が確保されるようになった。他方で、携帯電話の普及とともにSNSを通じた情報流通が格段に増加した。情報流通の変化、意見表明媒体の拡大とともに、いわゆる公共性のありようもかなり変わってきたといえる。本年度は共同研究の最終年にあたっており、変化の方向性を十分に見据えつつ成果報告に結びつけることを目指して、二回の研究会を行った。初回は自己統治や権力論に関するフーコー研究者の報告を聴き、再度それぞれのフィールド地における事例をもとに、統制、統治、権力等に関して考察を深めた。また、全員討論を経て、パブリック、プライベート、パブリシティについて、個々の地域や事例をもとにローカルな概念の共通点、ずれなどを確認した。二回目は成果報告に向けて、各自が原稿の草案を準備し、コミュニティ・危機管理、宗教、民族という3つのクラスターに分け、統制と公共性に係わる議論を行った。

「映像民族誌のナラティブの革新」

近年、民族誌映画祭を中心とした国際的な研究交流が、メディアアートや映画界をも包摂しつつ、世界各地で盛んに展開し、人類学における新たな理論潮流が生み出されている。本研究の目的は、これらの国際的な研究動向を

踏まえ、人類学、映画、アートの実践が交差する場から、文化の記録と表象における表現の地平を理論的・実践的に開拓することである。本研究では、映像人類学の各学派の研究潮流の分析、アートや映画界における人類学的に採用可能な方法論の考察を行う。そして、共同研究のメンバーが実践する民族誌映画制作、音や写真のインスタレーション等の報告、議論を経て、映像民族誌の新たなナラティブを創造し、人類学および隣接する学問へその可能性を提言する。

研究代表者 川瀬 慈

班員 (館内) 伊藤 悟 春日 聡 小林直明 佐藤剛裕 田沼幸子 丹羽朋子 分藤大翼
村橋 勲 森田良成 柳沢英輔

研究会

2015年6月13日

成果出版に関する打ち合わせ

矢野原佑史 (国立民族学博物館) 「実験的民族誌映画 Fieldnote の上映」

分藤大翼 (信州大学) 「作品の構想発表」

村橋 勲 (大阪大学) 「難民村の生活——映像制作の構想発表」

川瀬 慈 (国立民族学博物館) 「イメージへの亡命——声とサウンドによるパフォーマンスの試み」

総合討論

2015年11月21日

成果出版に関する打ち合わせ

森田良成 (大阪大学) 『言葉で伝えることと映像で伝えること』

田沼幸子 (首都大学東京) 『マンチェスターの理想、バルセロナの現実——学んだことと実際』

田坂博子 (東京都写真美術館) 『恵比寿映像祭について』

総合討論

2016年2月28日

出版に関する打ち合わせ

藤井 光 (美術家) 「映像の試み『帝国の教育制度』」

丹羽朋子 (人間文化研究機構) 「映像アーカイブを現代社会にひらく——『20世紀の映像百科事典エンサイクロペディア・シネマトグラフィカを見る』連続上映会での実験から」

総合討論 (全員)

成果

メンバー各自がとりくむ映像民族誌やインスタレーションについて発表を積み重ね、各自の目的や問題意識に則した制作方法論について理論的・実践的な議論を行った。個別具体的な映像民族誌の制作と公開の実践を、それぞれの研究者の研究意義と照らし合わせて考察した。映像民族誌における議論は、視聴者の存在や役割を軽視する傾向にあった。そのような流れに対して、本共同研究では、映画の制作と公開をめぐる議論をとおして生まれる、研究者と調査対象の人々との関係性の変化、あるいは映画公開によって創出される社会との新たなつながり、について考察した。作品を、被写体や、それを視聴する人々との創発的な営みのプロセスにあると位置づけ、映像実践をともなう人類学研究の可能性について検討した。

日本文化人類学会機関誌『文化人類学』80巻1号に本共同研究メンバーを執筆陣とする特集「人類学と映像実践における新たな時代に向けて」を発表した。

「聖地の政治経済学——ユーラシア地域大国における比較研究」

本研究は、聖地の現代的意義について、その多様性と共通性を明らかにするための比較研究である。そのさい、聖性の定義に関しては基本的に社会学的・社会人類学的視点に立ち、比較の対象をインド、中国、ロシアに限定し、当該地域における聖地の現代的意義とその歴史的背景について比較検討しようとするものである。西欧近代世界において、宗教伝統は再定義され、それが自己意識化、実体化され、軌近のポスト・モダン状況のもとでさらに再々定義され、イデオロギーとして固定化、原理主義化される事態となっている。こうした現代的状況のなかで聖地は、実体化・イデオロギー化された「伝統宗教」の金城湯池であり、また遺産化・商品化された「消費宗教」の花園で

ある。本研究では、いわゆるユーラシア地域大国、ロシア、中国、インド、における聖地の政治経済学的研究を通じて、宗教の現代的意義を問い直すとともに、西欧主導の聖俗論、宗教論を根本的に再考することが主要な目的である。

研究代表者 杉本良男

班員（館内）河合洋尚 韓 敏 松尾瑞穂

（館外）川口幸大 後藤正憲 小林宏至 桜間 瑛 高橋沙奈美 前島訓子 望月哲男

研究会

2015年4月11日

杉本良男（国立民族学博物館）「廃墟の聖地化——南インド・タミルナードゥにおける宗教空間の再編」

全 員 「中間考察——聖／聖性・場所／空間・巡礼／観光」

全 員 今後の研究計画について

2015年6月13日

川口幸大（東北大学）「中華民族の聖地と我々の聖地——黄帝・炎帝陵から村開祖の墓まで」

柳沢 究（名城大学）「ヴァーラーナシー（インド）における融合寺院に関する研究」

八木祐子（宮城学院女子大学）コメント1（聖地ヴァーラーナシーについて）

高倉浩樹（東北大学）コメント2（総括的コメント）

全 員 「討論」

2015年11月29日

井上岳彦（北海道大学）「「仏教リバイバル」について考える：ポスト社会主義カルムイキアの事象から」

井田克征（金沢大学）「聖地と物語：現代インドにおけるマハーヌバーヴ派の事例から」

全 員 「来年度の活動計画について」

2016年2月29日

全 員 「これまでの研究の総括と、成果刊行にむけた今後の研究計画について」

成果

本年度は都合4回の研究会を実施した。第1回（4月）は、杉本の報告と、全員による中間考察として、これまでの報告と討論のなかで、整理しておくべき必要性があると指摘された基本概念について議論を行った。第2回（6月）は宮城学院女子大学キリスト教文化研究所「多民族社会における宗教と文化」研究グループ（代表・八木祐子教授）との共催による公開の研究会として実施した。同仙台の東北大学大学院生をふくめ25名ほどの参加者があり、公開、交流の実が上がったものと考えている。第3回（11月）は井上、井田両氏をを招いて、ロシアの仏教リバイバル、および現代インドの聖地についての報告と討論を実施した。第4回（2月）は悪天候により北大関係者が来られなかったため、当初の予定を変更し、残りの参加者全員により成果刊行にむけた総括と計画について議論した。本年度は、基本概念を整理して研究員相互の共通理解を深めるとともに、積極的にメンバー以外の若手研究者を招いて報告と討論を実施し、いっそう研究の幅を広げることができた。次年度は最終年度に当たるので、おもに成果公開に向けたそれぞれの経過報告と全体のとりまとめを行う予定である。

「米国本土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究」

近年のITおよび交通網の整備により、世界の「秘境」は急激に消滅しつつある。現在ではかつての「秘境」に暮らす人々は、研究者に直接問い合わせをすることが可能で、民族学系の博物館にその民族集団に関連する資料情報の提供を求めたり、熟覧や適切な管理を依頼することもある。その意味で、現在、民族学系の博物館や研究者は、対象として設定するユーザー（来館者・資料等の利用者や研究成果の読者）を、来館圏居住者や学界だけではなく、資料を製作したソースコミュニティの人々にも拡大していく必要性に迫られており、それを実施するための協働のあり方を模索することが緊急の課題となっている。本研究の目的は、「調査者・被調査者（米国先住民）との関係」、「知的財産管理」、「所蔵先機関と研究者との協働」を柱として、博物館資料をきっかけとするソースコミュニティの人々と研究者や所蔵先機関との新たな関係性構築のあり方を模索することにある。そのために、米国本土先住民資料を所蔵する日本国内のいくつかの民族学系の博物館を事例として、資料情報のソースコミュニティの人々との共有のための協働に関する思想を、社会学、博物館学、歴史学、社会心理学、文化人類学などを専門とする研究者と

所蔵先機関とで検討・考察する。

研究代表者 伊藤敦規

班員（館内）岸上伸啓

（館外）阿部珠理 大野あずさ 川浦佐知子 佐藤 円 谷本和子 玉山ともよ 野口久美子
水谷裕佳 宮里孝生 山崎幸治 山本真鳥

研究会

2015年10月25日

玉山ともよ（国立民族学博物館）「現地社会運動への参画という関わり方（仮題）」

伊藤敦規（国立民族学博物館）「ソースコミュニティとの協働資料熟覧——民博と北アリゾナ博物館の事例紹介」
全 員「ディスカッション」

2015年11月14日

伊藤敦規（国立民族学博物館）「米国先住民ホビによる民博所蔵民族誌資料熟覧の紹介」

伊藤敦規（国立民族学博物館）、ジェロ・ロマベンティマ、マール・ナモキ 「ソースコミュニティとの協働資料
熟覧」
全 員「ディスカッション」

2016年 2月11日

民族誌資料情報収集に向けた取り組みの総合的検討

2016年 2月12日

民族誌資料情報の共有化（データベース構築）に向けた取り組みの総合的検討

2016年 2月27日

南山大学人類学博物館、展示場と収蔵庫の実見

南山大学人類学博物館における資料の知的財産管理に関する検討

2016年 2月28日

共同研究の中間段階における総括

成果出版に向けた今後の研究計画

成果

2015年度には4回の研究会を開催した。第1回研究会（通算、第8回）では玉山が現地社会における社会運動に参加する形での調査活動のあり方について、自身の経験に基づいて発表した。主客の不可分性などの課題が提示された。伊藤はこれまでに行ってきた先住民と博物館とでの協働資料熟覧調査について日本と米国の事例を例証した。

第2回研究会（通算、第9回）では実際に博物館資料を介在したソースコミュニティと博物館との協働関係構築に向けた熟覧調査の紹介を行った。これまでに行ってきた内容を紹介するだけでなく、実際の熟覧の様子を共同研究員に解放して実見させた。直前に別予算で実施した野外民族博物館リトルワールドと天理大学附属天理参考館での熟覧経験と比較させながら、民博での熟覧調査、熟覧者の招聘と派遣の手続き、招聘・派遣先の機関の施設などについても比較検討した。

第3回研究会（通算、第10回）では、民博の国際ワークショップと本研究会を連動させて実施した。国際ワークショップ「フォーラム型情報ミュージアムのシステム構築に向けて——オンライン協働環境作りのための理念と技術的側面の検討」では、博物館とソースコミュニティとの協働を前提とした国際共同研究とデータベース構築の諸課題を検討する機会であったが、本研究会としては、民族誌資料情報収集に向けた取り組み、および民族誌資料情報の共有化（データベース構築）に向けた取り組みについて具体的に想定しながら議論に参加した。

第4回研究会（通算、第11回）では、南山大学人類学博物館の展示場と収蔵庫を実見する貴重な機会に恵まれた。ここは本研究会で取り上げているような米国本土先住民の民族誌資料はほとんど所蔵していないが、南米の先住民コミュニティのアーカイブ写真の取扱やニューギニアや二本といった地域の、来歴の異なる資料の取扱について知的財産権を含む具体的な方針を学んだ。また、共同研究の中間段階における総括と、成果出版に向けた今後の研究計画を確認した。

「表象のポリティックス——グローバル世界における先住民／少数者を焦点に」

本研究では、先住民／少数者集団が、彼らを包摂する主流社会において様々に表象されている場面に注目する。彼らが絵画や工芸品、布、衣装などを製作し、それらが市場にのり、時には国際的な注目をあつめる。こうしたモノによって表象されることで、少数者には経済的恩恵がもたらされ、地位の向上につながることもある一方で、彼らを本質化する圧力ともなり、また商品化によって表象が希薄化される場面もある。このような表象のポリティックスの違いは、少数者集団に対する各主流社会の対応と国際社会を背景にしているとともに、グローバリゼーション、ネオリベラルの動きなど多層的な社会的状況の絡み合いの中でおきている。この共同研究では、このような動態の現場に注目することによって、先住民／少数者の生のリアリティに迫り、主流社会と少数者の関係の諸相を具体的な形で明らかにすることをめざす。

研究代表者 窪田幸子

班員 (館内) 上羽陽子 齋藤玲子 竹沢尚一郎 野林厚志 吉田ゆか子
 (館外) 青木恵理子 池本幸生 大村敬一 川崎和也 新本万里子 隅 杏奈 田村うらら
 中谷文美 中村香子 名和克郎 深井晃子 松井 健 丸山淳子 宮脇千絵
 渡辺 文

研究会

2015年5月10日

渡辺 文 (立命館大学) 「レッドウエーブアートにおける個と集合」
 深井晃子 (京都服飾文化研究財団) 「ファッションにおける日本の表象」
 窪田幸子 (神戸大学) 「表象とは何か？」

2015年12月6日

中村香子 (京都大学) 「身体を巡る表象のダイナミズム」
 名和克郎 (東京大学) 「ランにおける伝統服を巡る実践と語りの変容」
 野林厚志 (国立民族学博物館) 「エスニシティを可視化する——台湾における民族認定と衣装の意匠」
 深井晃子 (京都服飾文化研究財団) 「主流社会による少数者表象、からめ捕られる少数者要素」
 松井 健 (総合地球環境学研究所) 「なぜ、どのようにして、工芸はグローバルイメージを表象できるのか？」

2016年1月30日

吉田ゆか子 (国立民族学博物館) 「民族舞踊からインドネシア諸島舞踊へ」
 新本万里子 (広島大学) 「アベラムになるまで」
 川崎和也 (神戸学院大学) 「誰がアートを作るのか？」
 渡辺 文 (立命館大学) 「フィジー、土産物売り場におけるアートの居場所」
 上羽陽子 (国立民族学博物館) 「民族を商品化する」

2016年1月31日

池本幸生 (東京大学) 「コーヒーから見るカクサシャカイノヒョウショウノポリティックス」
 田村うらら (金沢大学) 「絨毯の価値の語られ方の多面性」
 丸山淳子 (津田塾大学) 「ブッシュマン観光ロッジを歩きかう人々」
 窪田幸子 (神戸大学) 「先住民の美術、工芸品と作り手の立場」

2016年2月11日

宮脇千絵 (南山大学) 「門意匠の伝統へのまなざしとファッション」
 齋藤玲子 (国立民族学博物館) 「匿名か実名か、アイヌ工芸品の銘／記名をめぐる」
 青木恵理子 (龍谷大学) 「明治日本産業革命——モノ語りにこころする小さな炭鉱モノ語り」
 中谷文美 (岡山大学) 「文化表象のエコノミー、商品としての文化遺産」

成果

第3年度にあたる今年、4回の研究会を行った。一回目は積み残しの各氏の発表をいただき、今年の計画について共有した。その後、4つのテーマを設定し、ワークショップのかたちでテーマごとにある程度のまとまりをもつ研究会を開催した。こうして、「衣装という表象」「アートと工芸」「観光と表象」「伝統、遺産とポリティックス」という4つのテーマごとのまとまりが生まれ、表象のポリティックスという問題を、研究員がそれぞれの立場から

議論した。これによって新たな論点がみえてきたとともに、来年度のとりまとめのそれぞれの山が出来上がった。各研究員は、議論を踏まえ、来年度夏ごろまでに論文執筆をおこなうこととした。

「エージェンシーの定立と作用——コミュニケーションから構想する次世代人類学の展望」

人間が営む生活の諸局面は、特定の具体的な権威者を中心とするコミュニケーションとして成立しており、ここでは、規範や信念への随順やその異端的解釈の抑制が図られるとともに、生々しい実在感をもち、対他的に作用する非——人間存在を含むエージェンシーが定立され、作用する。現代世界において、精霊は呪医を権威者とするコミュニケーションでは人に病気をもたらすエージェンシーとして働くかもしれないが、近代医療関係者はそうした病因を否定するだろう。同様に、米国の銃規制運動において銃は「人を殺す」エージェンシーとされるが、全米ライフル協会はそうしたエージェンシーの定立に強く異議をとる。

本共同研究では、こうしたエージェンシーとコミュニケーションとの等根源性に留意しながら民族誌研究をおこなうなかで、エージェンシーの定立と作用について適切に語るための一群の概念を開発する。そうすることで、個別におこなわれる傾向にあったモノ、技術、身体、動物に関する近年の研究と、親族、交換、儀礼、信仰、医療、土地制度などに関わるこれまでの研究を架橋する、通地域的・通研究对象的であると同時に、民族誌的データを豊かに内包しうる次世代人類学の理論基盤を整備する。

研究代表者 杉島敬志

班員 (館内) 飯田 卓

(館外) 東賢太朗 小川さやか 片岡 樹 金子守恵 桑原牧子 里見龍樹 高田 明
津村文彦 中村 潔 馬場 淳 森田敦郎

研究会

2015年5月9日

杉島敬志 (京都大学) 「インドネシア・中部フローレスにおける妖術者の「心」の様態と妖術霊の定立と作用
総合討論

2015年11月29日

杉島敬志 (京都大学) 「インドネシア・中部フローレスにおける妖術者をめぐるエージェンシー及び遠隔コミュニケーションとエージェンシーの定立に関する考察」
共同研究成果報告論集の構成と、出版社の選定をふくむ出版計画の具体化に関する議論

2016年1月10日

中村 潔 (新潟大学) 「起源の土地と土地の主」
高田 明 (京都大学) 「養育者——子ども間相互行為にみる複ゲーム状況とエージェンシー」
飯田 卓 (国立民族学博物館) 「マダガスカル南西部の邪術と祖霊、憑依霊をめぐるエージェンシーの定立」
小川さやか (立命館大学) 「研究成果報告：エージェンシーの定立と作用に関わるコミュニケーション」
総合討論

2016年1月30日

金子守恵 (京都大学) 「研究成果報告：エージェンシーの定立と作用に関わるコミュニケーション」
津村文彦 (福井県立大学) 「ピット・サムデーと食物アレルギー：東北タイの経産婦における食禁忌——」
馬場 淳 (和光大学) 「パプアニューギニアにおけるエージェンシーと人格」
里見龍樹 (一橋大学) 「「海に住まうこと」のアレンジメント：ソロモン諸島マライタ島の「海の民」におけるエージェンシーの境界」
片岡 樹 (京都大学) 「一神教徒の民族誌はいかにして可能か」
総合討論

成果

研究代表者が本務校からサバティカルを取得して海外出張をおこなったため、出張前の5月に1回、帰国後に3回の研究会を開催した。研究代表者は、共同研究が目的とする基本的考えにもとづき、具体的内容のある研究の成果を発表し、共同研究構成員間での議論を活発化することに努めた。また、本共同研究の成果報告書の出版について話し合い、大まかな方向性を策定した。そのうえで、2016年1月10日(日)と2016年1月30日(土)に共同研究構成

員の大半が参加して本年度の研究進捗状況を報告し、その報告内容について議論をおこなった。あわせて、来年度の研究計画について意見交換をおこなった。また、2016年1月30日開催の本年度の最終回の研究会には、本共同研究に関心をおもいただいた出版社の編集者にご参加いただき、本共同研究の大まかな方向性を把握していただくことにも努めた。

「宗教人類学の再創造——滲出する宗教性と現代世界」

合理化を推進する近代主義の影響のもと、これまで多くの地域において、人々は「宗教」を政治・社会制度から排除しようとしてきた。しかし近年、宗教原理主義や公共宗教論の盛行、宗教伝統の復興や再評価などに見られるとおり、いったん隔離したはずの「宗教」がわれわれの社会へと滲み出し、新たな姿を見せつつある。その場合の「宗教」はかつての伝統的な姿のままとは限らず、環境思想のような新たな倫理・道徳の底流に見え隠れしたり、観光資源として人目を驚かせたりしている。

このように、伝統宗教のみならず、従来の「宗教」イメージとは異なりながらどこか宗教性を感じさせる新たな現象をも視野に取り込み、現代世界の「宗教」状況をよりよく理解することが、本研究の目的である。また、その研究実践を通じて、個々の宗教的世界観の研究に特化した感のある日本の「宗教人類学」を、上記のようなグローバルな潮流に対応したものへと鍛えなおしたい。

研究代表者 長谷千代子

班員（館内）藤本透子

（館外）岡本亮輔 加藤敦典 門田岳久 川口幸大 川田牧人 神原ゆうこ 國弘暁子
内藤順子 西村 明 藤野陽平 別所裕介 溝口大助 宮本万里 矢野秀武

研究会

2015年5月16日

藤野陽平（北海道大学）「戦後社会における台湾語教会の民主化運動——言語・族群・キリスト教」
成果報告に向けての論文内容の説明（長谷、門田、川田、國弘、矢野、岡本、西村、藤野）

2015年5月17日

成果報告に向けての論文内容の説明（藤本、川口、別所、神原、内藤）

2015年6月20日

神原ゆうこ（北九州市立大学）「Social Engagement and Morality in Secular Civil Society: Social activists in the post-socialist Slovak countryside」

加藤敦典（東京大学）「Alternative Dispute Resolution With and Without Religion」

國弘暁子（群馬県立女子大学）「The Etiquette of dāna, unreciprocal gift giving, at the temple of Hindu Goddess」

藏本龍介（南山大学）「Morality beyond Morality: A case study of Theravāda Buddhist monks in Myanmar」

岡部真由美（中京大学）「The “Development” led by a Buddhist Monk and the Reconstruction of Religious Practices in the Thai-Burma Border Area of Northern Thailand: A Preliminary Analysis of the Revival of the “Chula Kathin” Ceremony」

川口幸大（東北大学）「Can Confucianism be the Civil Religion in China?: an analysis of political, academic and commoner’s discourses」

長谷千代子（九州大学）「New Buddhism for Chinese Local City Dwellers」

別所裕介（広島大学）「From ‘Ethnic Culture’ to ‘Ecological Culture’: New-reformed concept of ‘Primitive Religion’ in Contemporary Tibet」

2015年9月26日

内藤順子（早稲田大学）「＜悪者たち＞の聖者について」

IUAES・IAHR 参加報告、科研応募・成果論集についての話し合い

2016年1月10日

門田岳久（立教大学）「観光の中の宗教性——沖縄南部の聖域巡礼者にみるパワー・俗信・スピリチュアリティ」

岡本亮輔（北海道大学）「観光の中の宗教性——写真の中の聖地観光」

成果

今年度は成果論集の具体的な構想を練りながら4回の研究会を開催した。その成果の一部は国際宗教学宗教史会議 (IAHR) や国際人類学・民族学科学連合 (IUAES) などの国際大会で発表することができた。これまでの話し合いを通して、成果論集の方向性が徐々に固まりつつある。具体的には、①日本に於ける宗教研究のあり方の再検討、②宗教／世俗に関する社会的制度がどう変わってもわれわれにとって大切な問題であり続ける霊・死・生命などを現代世界においてどう考えるかについての探究、③既成の宗教イメージから脱しようとする実践や運動と、逆に、④新たな宗教になろうとするかのような実践や運動についての研究、⑤既成の宗教組織や制度などがポスト世俗主義的な状況のなかでどう変容しつつあるかについての研究などが、各研究員によって進行中である。いずれも、宗教と世俗の社会・文化的境界の変化に着目し、宗教と世俗を分けようとする観念そのものを問い直す研究となりそうである。

「東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ、国家、グローバル化」

この共同研究は、東南アジアのポピュラーカルチャーを対象とする。研究の目的は、グローバル化する現代社会における文化表現や身体表象の検討を通して、人々の複合的で流動的なアイデンティティのあり方を考察することである。対象地域の東南アジアは、その多くが20世紀の半ば以降に植民地支配からの独立を果たした国民国家であり、多様な民族文化を擁する国家としてのアイデンティティが常に模索されてきた。一方でポストコロニアル時代の国民国家は民族や宗教の違い、地域間の格差、社会階級やジェンダーの格差などの様々な差異を内包している。人やモノや情報が越境するグローバル化の状況において多くの文化的表現は既存の文化的境界を越えて流通し読み替えられている。この研究会では現代東南アジア社会における音楽、舞踊、映画、文学、ファッションなどの各分野におけるポピュラーカルチャー産業や、出版物、電子媒体などを含む各種メディアを研究対象として取り上げ、文化的表現の生産と消費の場における人々の実践を通して現代東南アジア社会におけるアイデンティティ形成の複合的で流動的なプロセスを考察する。

研究代表者 福岡まどか

班員 (館内) 寺田吉孝 福岡正太
(館外) 井上さゆり 小池 誠 竹下 愛 津村文彦 馬場雄司 平松秀樹 丸橋 基
山本博之 竹村嘉晃

研究会

2015年7月11日

福岡まどか (大阪大学) 「アイデンティティと身体表象を考える：インドネシアにおける異性装の事例から」
ウィンダ・プラティウィ (桃山学院大学) 「インドネシアの若者におけるコスプレ文化の誕生」
福岡正太 (国立民族学博物館) 「ファッションデザイナー——インドネシア女性の生き方のモデルとして」
総合討論

2015年10月24日

岡光信子 (中央大学) 「インド映画の変容と東南アジアにおけるインド映画の受容の一例」
山下博司 (東北大学) 「インドの文学世界と現代東南アジア——受容・継承・交流をめぐるいくつかの事例に寄せて」
総合討論

2016年1月9日

福岡正太 (国立民族学博物館) 「スダ音楽の「モダン」の始まり——ラジオと伝統音楽」
平松秀樹 (大阪大学) 「タイのポピュラーカルチャー再考」
総合討論

2016年2月6日

福岡まどか (大阪大学) 「成果発表に向けて 序論：東南アジアのポピュラーカルチャー 構想発表(1)」
鈴木 勉 (国際交流基金) 「シネマラヤの10年～映画を通じた自画像の再構築」
総合討論

2016年2月7日

各メンバーによる執筆論文の構想発表(1)

盛田 茂（立教大学）「映画をとしてみるシンガポールの現代社会——『シンガポールの光と影——この国の映画監督たち』紹介」

総合討論

成果

2015年は4回の研究会を開催し、東南アジアの各地域における事例の検討を通して議論を深め、成果発表についての検討を行った。研究会のメンバーに5人の特別講師を加えた延べ10名の発表者からは、インドネシア、タイ、フィリピン、シンガポール、インドの諸地域における多様な事例が提示された。対象とされた事例は映画、音楽、舞踊、ファッション、身体表象、各種メディアの流通などの多岐にわたった。これらの事例研究の検討と議論を通して、コスプレやイスラムファッションの流行と人々のライフスタイルとの関連、メディアを通じた文化の通時的変容、映画を通じた東南アジアの人々の自画像の提示、などの諸テーマが浮かび上がってきたと考えられる。一方で地域横断的テーマとしては東南アジアにおけるインド文化特にインド映画の影響について、東南アジアにおける日本イメージの変遷についても考察を行った。これらの事例と問題設定を通して今後の成果発表の方針についても議論を行った。成果論文集序論の内容検討と各メンバーの執筆論文の構想発表会を行った。

「近代ヒスパニック世界における文書ネットワーク・システムの成立と展開」

本研究は、15世紀末以降、スペインが世界規模で拡張した帝国統治のメカニズムについて、行政・司法・財政・宗教・軍事の諸分野を交差して領域横断的に張り巡らされた文書ネットワーク・システムの展開に焦点を当てながら解明を目指すものである。近代初期、アジアからアメリカに至る広大な領域を支配下に治めたスペインの統治原理は、文書主義の優越というイデオロギーに支えられており、帝国内の統治機構においては、マドリード中枢から植民地最末端の先住民までをカバーする広域的な文書ネットワークが張り巡らされていた。その網の目に沿って、植民地経営の実務を支えるヒトやモノ、情報の流れが構造化され、領域の隅々にまで拡張されることで、近代ヨーロッパ史上、類をみない規模の世界帝国を支えた統治機構の礎が整備されていったのである。本研究では、スペインおよびラテンアメリカ、アジア各地の文書館における実地調査を通して史料分析の研鑽を積み、文化人類学、歴史人類学、識字・リテラシー研究、史料論、エスノヒストリー、文書管理論、アーカイブズ学などの方法論に精通したエキスパートたちの知見を結集することにより、スペイン帝国の礎となった文書ネットワークの成り立ちと植民地社会における展開について総合的に究明を試みるものである。

研究代表者 吉江貴文

班員（館内）齋藤 晃

（館外）足立 孝 網野徹哉 井上幸孝 小原 正 坂本 宏 清水有子 菅谷成子
武田和久 中村雄祐 伏見岳志 溝田のぞみ 安村直己 横山和加子

研究会

2015年5月16日

足立 孝（広島大学）「カルチュレールの生成・機能分化・時間——テンプル／聖ヨハネ騎士団エンコミエンダ・カルチュレールを中心に」

共同研究員全員・報告内容についての質疑応答・討論

坂本 宏（中央大学）「異端審問とスペイン帝国」

共同研究員全員・報告内容についての質疑応答・討論

共同研究員全員・今年度の研究活動について

2015年10月3日

伏見岳志（慶應義塾大学）「植民地期メキシコ商人の帳簿作成とその利用」

共同研究員全員・報告内容についての質疑応答・討論

井上幸孝（専修大学）「植民地時代メキシコ中央高原の先住民村落における権原証書の作成と使用」

共同研究員全員・報告内容についての質疑応答・討論

共同研究員全員・今年度後半の研究活動について

2015年12月5日

齋藤 晃（国立民族学博物館）「イエズス会ミッションにおける洗礼と洗礼簿——南米アマゾン低地モホス地方

の事例」

共同研究員全員・報告内容についての質疑応答・討論

武田和久（早稲田大学）「イエズス会の文書管理システムとグローバル・ネットワーク——スペイン語圏におけるアトランティック・インテレクチュアル・ヒストリーに向けての試論」

共同研究員全員・報告内容についての質疑応答・討論

Guillermo Wilde（国立民族学博物館）「REGLAMENTANDO LA VIDA COTIDIANA EN LAS MISIONES FRONTERIZAS — LIBROS DE PRECEPTOS EN EL PARAGUAY JESUITICO」

共同研究員全員・報告内容についての質疑応答・討論

共同研究員全員・次回研究会及び今後の研究活動について

2016年1月30日

清水有子（明治学院大学）「スペイン帝国の文書ネットワーク・システムとフェリペ2世の「東アジア」政策」

共同研究員全員・報告内容についての質疑応答・討論

菅谷成子（愛媛大学）「『マニラ公正証書原簿』からみる19世紀転換期前後のスペイン領マニラ社会の諸相」

共同研究員全員・報告内容についての質疑応答・討論

共同研究員全員・来年度の研究会について

成果

2015年度は4回の共同研究会を開催し、文書ネットワーク・システムの解明に向け、全体的な議論に深まりが見られたいっぽうで、いくつかの検討課題も浮かび上がった。具体的に、スペイン帝国の統一的支配原理と異端審問制度を支えた文書管理・運用との関係性を論じた坂本報告、イエズス会士のグローバル情報ネットワークの実相を分析した武田報告、フィリピン総督府とスペイン本国を結ぶ遠隔対話型ネットワークの機能を明らかにした清水報告をめぐる議論では、帝国内の文書流通メカニズムを包括的に把握する上で、本研究会の掲げる領域横断的な比較アプローチがどこまで有効性をもつかが俎上に載せられた。一方、エンコミエンダ・カルチュレールに対する機能分化論的な理解の可能性を提起した足立報告、イエズス会ミッション洗礼簿の分析をもとに地理空間と文書空間における集住化の二重プロセスを論じた齋藤報告、メキシコ商人の商業帳簿における現実と文書の乖離を浮き彫りにした伏見報告では、文書理解をめぐる認識論的な問題（表象と出来事、物質と抽象、文書主義 etc.）について改めて検討しなおす必要性も確認された。

「宗教の開発実践と公共性に関する人類学的研究」

20世紀後半以降、世界各地で宗教復興が顕在化すると同時に、公共領域における宗教の影響力が増大している。その背景には、新自由主義経済の浸透による国家財政の緊縮化とそれともなう社会・福祉サービスの低下がみられるなか、宗教（宗教者や宗教集団）が、独自のネットワークに基づき、そして多くの場合、地域社会・援助供与国・国際NGOなどと連携しながら、社会開発に積極的に参画するというグローバルな流れが指摘できる。

そこで本研究では、宗教の開発実践が顕著にみられるアジアとオセアニアをおもな舞台として、以下の2点を目的とする。第1に、宗教による経済開発、医療と公衆衛生、教育などの領域における活動を民族誌的な事例として収集し、そこに反映される宗教固有の理念や規範およびネットワークの性質を明らかにする。第2に、このような現象が社会全体にかかわる諸問題を主題化し、公共性およびその変容を喚起していることを明らかにする。この2点を明らかにすることで、本研究は、ポスト世俗化の宗教論を超える視点を提示することを目指す。

研究代表者 石森大知

班員（館内）丹羽典生

（館外）岡部真由美 岡本亮輔 小河久志 門田岳久 倉田 誠 藏本龍介 小西賢吾
白波瀬達也 野上恵美 舟橋健太

研究会

2015年5月23日

舟橋健太（龍谷大学）「インドの改宗信徒の実践にみる「社会性」

田中鉄也（国立民族学博物館）「現代インドの公益信託によるヒンドゥー寺院経営——ラーニー・サティール寺院を事例に」

全 員 「総合討論」

2015年7月25日

岡部真由美（中京大学）「出家者からみた世俗との境界面——現代タイ社会における上座仏教僧の『開発』の事例から」

藏本龍介（南山大学）「ミャンマーにおける社会参加仏教／社会不参加仏教——出家者の活動に注目して」

全 員 「総合討論」

2015年11月14日

野上恵美（神戸大学）「日本におけるベトナム系移住者とカトリック教会の役割」

門田岳久（立教大学）「地域開発と〈宗教的なもの〉の発見——沖縄本島南部エリアの聖域化をめぐる」

全 員 「研究成果とりまとめに向けて」

2016年1月23日

小河久志（常葉大学）「宗教団体の支援活動が生み出す新たな関係性——タイ南部インド洋津波被災地の事例から」

小西賢吾（金沢星稜大学）「僧侶の教育をめぐる「世俗」と「公共性」の位相——中国四川省のボン教徒を事例に」

全 員 「総合討論」

2016年1月24日

全 員 「研究成果とりまとめに関する打ち合わせ」

成果

2015年度は、本研究テーマに関する地域的特性の考察をおもな目的とし、4回の共同研究会を開催した。1回目の研究会では、南インドの事例から、社会性や公益性などの概念を足掛かりに、おもに宗教の社会参加について検討をおこなった。2回目の研究会では、東南アジアの上座仏教社会の事例をとおして、宗教者のカリスマ性、宗教と世俗の関係などについて考察した。続く3回目は、日本の事例を扱い、観光開発および多文化共存というテーマとの関連性を視野に入れ、そこにみられる宗教の扱われ方や公共性などについて考察をおこなった。4回目の研究会では、アジアの宗教的なマイノリティの事例から、国家・宗教・開発の関係性を踏まえた宗教の役割や公共性について検討した。以上の4回の研究会の終了後、各自のフィールドデータに基づき、政教関係と宗教の動向、宗教が関与する開発実践の特徴、西洋起源の言説の内面化などをめぐって総合的な討論をおこない、研究成果とりまとめに向けての方針を確認した。

「再分配を通じた集団の生成に関する比較民族誌的研究——手続きと多層性に注目して」

本共同研究では、再分配が集団を生成している点に注目することで、集団と再分配の関係の多様性を明らかにしていく。ポランニーは、再分配を〈富や労働を中心に集めたうえで配り直す〉経済活動の様式として定式化し、その中に儀礼や祝祭、租税、家政が含まれるとした。そこでは、社会の存在が前提とされ、いかに再分配が社会統合に役立つかという構造機能主義的な枠組みが強調されている。それに対し本研究では、社会の存在を自明視するのではなく、他ならぬ再分配によって集団が立ち現われている点に注目する。思想史家のエヴァルドがフランスの社会保険を例に示したように再分配はそれに参加する者に連帯感を喚起することで集団意識を醸成しうるし、また、再分配への参加は集団の境界を引く際の重要な留意点にもなるからである。本共同研究では、この視点から世界各地の事例を比較し、再分配の具体的な手続きと集団の特性の関係について検討していく。

研究代表者 浜田明範

班員（館内）伊東未来 加賀谷真梨 河野正治 久保忠行 里見龍樹 高橋絵里香 高橋 慶介
田口陽子 友松夕香 西垣 有

研究会

2015年4月4日

今後の方向性と日程の確認

高橋絵里香（千葉大学）「在宅介護の施設化／施設介護の在宅化——フィンランドの高齢者福祉にみる再分配の

論理

西垣 有（関西大学）「ポランニー再考——ポスト社会主義の再分配論に向けて」

加賀谷真梨（国立民族学博物館）「日本型福祉制度の陥穽——沖縄の高齢者地域福祉を事例に」

2015年4月5日

久保忠行（大妻女子大学）「レイシズムとしての難民問題と「再分配の手続き」

高橋慶介（敬愛大学）「所得の再分配とスティグマ——ブラジルにおける「ボウサ・ファミリア」の受給をめぐる」

吉田ゆか子（国立民族学博物館）「奉仕を滑り込ませるつながり——バリ島慣習村における祭祀と労働」

2015年11月7日

成果公開に向けての打ち合わせ

2015年11月8日

成果公開に向けての打ち合わせ

成果

通算3年目となる2015年度は、2回の共同研究を実施し、1回の分科会を組織した。前年度に引き続き、共同研究全体の問題意識の深化と共有を測りながら、各メンバーが世界各地から持ち寄った事例を子細に検討し、再分配実践の多様性を確認するとともに、人類学的な再分配研究の可能性がどこにあるのかを探った。初回（通算第四回）となる4月4日～5日の研究会では、西垣、加賀谷、久保、高橋（絵）、高橋（慶）の5名のメンバーに特別講師の吉田ゆか子を合わせた6名による発表を行った。また、5月30日・31日に行われた日本文化人類学会第49回研究大会において分科会「再分配研究の再始動：行為から集団の生成を考える」を組織し、本研究会のメンバー6名（浜田、西垣、河野、友松、高橋（慶）、高橋（絵））による発表を行った。本年二回目（通算第五回）となる11月7日～8日の研究会では、メンバーが執筆した9本の原稿を持ち寄り、成果報告に向けての議論を行った他、出版予定の論文集のタイトルや構成について議論した。

「現代『手芸』文化に関する研究」

本研究は日本の手芸に相当する余暇的・趣味的仕事とその造形物の現代的展開を明らかにする。手芸とは、主に女性を担い手とする家庭内での商業化されていない趣味的な制作を意味する概念として明治期に形成された。そのため手芸の領域は、美的に評価された美術や利潤を生みだす工芸に比べて二重に周辺化されてきたといえる。しかし現在、世界各地で従来の日本の手芸概念ではとらえられない余暇的・趣味的仕事が多様な展開をみせている。それらは男性も担い手に含み。アート、フェアトレード商品、エスニック雑貨などとして美術や市場の領域にも進出している。また、趣味を通じた人的ネットワークの形成や、それらの災害後におけるケアとしての機能などが注目を集めている。こうした従来の手芸概念ではとらえきれない新たな領域を「手芸」として捉え返し、その現代的展開を民族誌的に分析し、新たな「手芸」概念の創出を目指すものである。

研究代表者 上羽陽子

班員（館内） 齋藤玲子 南 真木人

（館外） 蘆田裕史 五十嵐理奈 金谷美和 木田拓也 坂田博美 新本万里子 杉本星子

中谷文美 野田涼美 平芳裕子 ひろいのおこ 宮脇千絵 村松美賀子 山崎明子

研究会

2015年4月25日

上羽陽子（国立民族学博物館）「前回までの研究会の論点の整理」

村松美賀子（京都造形芸術大学）「生活工芸と手芸のあいだ——手しごと、手づくりの今」

齋藤玲子（国立民族学博物館）「アイヌの織りと縫い——その担い手と継承のあり方について」

中谷文美（岡山大学）「＜主婦＞と＜職人＞の間——「手芸とは何か」をめぐる問い」

出席者全員 「今後の研究会の進め方と打ち合わせ」

2015年7月18日

上羽陽子（国立民族学博物館）「前回までの研究会の論点の整理」

ひろいのおこ（京都市立芸術大学）「糸と布 その柔らかい造形教育の現状」

野田涼美（京都造形芸術大学）「立場が定まらない私の制作について」
上羽陽子（国立民族学博物館）「刺繍は手芸か工芸か？——手仕事をめぐる他者の視点」
出席者全員 「今後の研究会の進め方と打ち合わせ」

2015年12月5日

上羽陽子（国立民族学博物館）「前回までの研究会の論点の整理」
新本万里子（広島大学）「母から女へ—パプアニューギニア・アベラムにおける網袋の揚げ方の変化から」
宮脇千絵（南山大学）「中国雲南省モン女性が刺繍をすること」
平芳裕子（神戸大学）「二つの針仕事——刺繍か裁縫か女性か」
出席者全員 「今後の研究会の進め方と打ち合わせ」

2016年1月9日

東京国立近代美術館工芸館 「1920～2010年代所蔵工芸品に見る未来へつづく美生活展」解説および見学
木田拓也（東京国立近代美術館）「近代日本における「工芸」と工芸館」
蘆田裕史（京都精華大学）「近現代美術におけるファッションの意味」

2016年1月10日

東京国立近代美術館 「ようこそ日本へ：1920年-30年のツーリズムとデザイン」解説および見学
南 真木人（国立民族学博物館）「カースト社会の職人——手工芸、美術と手芸的なもの」
金谷美和（国立民族学博物館）「インドのhandicraft（手工芸）：ナショナリズム、制度、他者」

成果

これまでの具体的な事例をもとにした発表によって、狭い手芸概念の枠組みを超えた、現代の余暇的・趣味的仕事を捉える上での3つの重要な視点が導きだされた。1つ目は、手芸的なものが生まれる社会や空間というものがある存在すると同時に、それらが機能する空間や社会があるということである。2つ目は、つくり手が誰であるか、そしてそのつくり手のアイデンティティの問題である。手芸的手仕事への評価は、造形物自体への評価以上に、つくり手のジェンダーや社会的属性によって、評価が異なるということである。そしてこの問題の背景には、手芸に関する批評の不在や、家庭内から発信することのできるブログやインターネット販売といったメディアの変化も関係していることが明らかとなった。3つ目は、手芸的技術の問題である。手芸的技術の特徴は、技術教授が比較的容易であり、基礎的手作業によってつくりあげることができるものが多い。このような手作業が、造形教育においてどのようにとらえられてきたのか注目する必要がある。そして手芸的手仕事かどのような文脈の接合によって、現代アート作品へ転換するのかについても視点を広げて議論をする必要性がみえてきた。

今後は、このような論点を加味し、シンポジウム形式によるさらなる議論の深化を試み、既存の家政学的研究の分野を超えた、包括的なアプローチを可能にする基礎的概念の創出を目指したいと考えている。

「近世カトリックの世界宣教と文化順応」

本研究は、16～18世紀のアジアとアメリカにおけるカトリック教会の宣教、とりわけ「適応」と呼ばれる政策に焦点を当て、ローカルな事例の比較とヨーロッパの世界観・人間観の検討を通じて、その歴史的意義を明らかにする。適応とは、宣教師が現地の規範や慣習を学ぶことで地元社会に溶け込み、現地人の改宗を促す政策である。言語、衣食住、礼儀作法、法律、学問など、現地文化の幅広い側面が対象となる。事例としては、ヴァリニャーノの日本宣教方針やリッチの中国古典研究など、アジアのイエズス会の政策が有名である。特に中国での政策は「典礼論争」というカトリック教会を二分する論争を引き起こした。

近世カトリックの宣教師の適応はしばしば今日の文化相対主義の先駆けとみなされるが、この評価は正しいのだろうか。両者の共通点と相違点はなんだろうか。今日の相対主義的文化概念が近世カトリックの世界宣教に負うものがあるとするれば、それはなにか。これらの問いに答えるため、本研究は、宣教師の適応をローカルなコンテクストに位置づけ、通文化的実践としてのその特徴を探る。同時に、宣教師が適応に与えた理論的根拠を世界の諸文化の多様性についてのヨーロッパの思索の流れに位置づけ、その思想史的意義を解明する。

研究代表者 齋藤 晃

班員（館内） 網野徹哉 伊川健二 井川義次 王寺賢太 岡田裕成 折井善果 小谷訓子
鈴木広光 中砂明德 真下裕之 松森奈津子 Guillermo Wilde

研究会

2015年6月21日

鈴木広光 (奈良女子大学) 「Paul A. Rule 著『K'ung-tzu or Confucius?: The Jesuit Interpretation of Confucianism』について」

井川義次 (筑波大学) 「Ines G. Županov著「Le repli du religieux: les missionnaires jésuites du 17e siècle entre la théologie chrétienne et une éthique païene」について」

中砂明徳 (京都大学) 「Anthony Pagden 著『The Fall of Natural Man: The American Indian and the Origins of Comparative Ethnology』について」

2015年7月5日

新居洋子 (東京大学) 「在華イエズス会士における適応政策の変遷とその背景」

岡美穂子 (東京大学) 「外海地方出津の聖画からみるキリシタン信仰」

2015年9月6日

真下裕之 (神戸大学) 「Jacques Gernet 著『Chine et christianisme: la première confrontation』について」

Guillermo Wilde (国立民族学博物館) 「Nicolas Standaert 著『L' «autre » dans la mission: leçon à partir de la Chine』について」

岡田裕成 (大阪大学) 「Joan-Pau Rubiés 著「¿Diálogo religioso, mediación cultural o cálculo maquiavélico?: una nueva mirada al método jesuita en Oriente, 1580-1640」について」

2015年12月23日

齋藤 晃 (国立民族学博物館) 「Jesús López Gay 著『La liturgia en la misión del Japón del siglo XVI』について」

岡美穂子 (東京大学) 「高瀬弘一郎著「キリシタン布教における“適応”」について」

網野徹哉 (東京大学) 「浅見雅一著『キリシタン時代の偶像崇拜』について」

2016年2月24日

小谷訓子 (大阪芸術大学) 「Louise M. Burkhart 著『The Slippery Earth: Nahua-Christian Moral Dialogue in Sixteenth-Century Mexico』について」

王寺賢太 (京都大学) 「Gilles Havard 著「Le rire des jésuites: une archéologie du mimétisme dans la rencontre franco-amérindienne (XVIIe-XVIIIe siècle)」について」

齋藤 晃 (国立民族学博物館) 「合評会の総括」

成果

本年度は主として先行研究のレビューをおこなった。日本、中国、インド、アメリカの4つの地域を対象に、宣教師の異文化適応に関する重要な文献を選別し、メンバー全員で合評した。合評の主目的は先行研究の動向を把握し、その達成度を評価することだが、それと同時に、メンバーに専門以外の地域について学んでもらうことも重視した。メンバー各人がひとつの文献を担当し、研究会では全体討論に先だつてその内容を紹介したが、担当者の専門地域が文献の対象地域と重ならないよう配慮がなされた。昨年度に合評した文献ひとつを含めて、合計12の文献をレビューしたが、期待どおりの成果を上げることができた。一連の合評会を通じて、それぞれの地域で展開された適応の特色、そして地域を越えた共通点が浮き彫りになった。また、先行研究が抱える問題も明確になり、それらを克服するための方向性もみえてきた。

本年度はまた、特別講師を招聘した研究会を1回、開催した。特別講師には、本研究のメンバーだけでは十分論じることができないテーマに詳しい研究者がふたり選ばれた。研究会ではたいへん有意義な議論ができたため、ふたりの講師には来年度から正式なメンバーとして本研究に参加してもらうことにした。

「家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究——保育と介護の制度化／脱制度化を中心に」

子供の保育や老人・病人の介護などのケアと呼ばれるサービスは、その一部を家族の外部で、家族外の担い手によって行なうことが可能であり、制度化もされている。このサービスを公的な支援として行うのが福祉であるが、今日、福祉国家制度の限界が明らかになっている。ケアはどのように実現されるのか、そのあり方があらためて問い直されている。こうした状況をふまえ、本研究は、保育や介護をめぐるケアの制度化／脱制度化の様相を、個別のローカルな状況のもとでとらえ、比較検討するものである。その分析を通して、人間社会は、社会と家族のインターフェースをどのように編成してきたのか、それは今後どうありうるのか展望する。これまでの人類学研究を批

判的に検討する視点から、人類学、社会学、歴史学の分野を横断する議論を展開し、西欧近代の福祉国家システムを、人類学研究として批判的に検討していく。

研究代表者 森 明子

班員 (館内) 浜田明範

(館外) 天田城介 岩佐光広 岡部真由美 加賀谷真梨 加藤敦典 木村周平 工藤由美
 沢山美果子 高田 実 高橋絵里香 土屋 敦 内藤直樹 中野智世 西 真如
 速水洋子 モハーチゲルゲイ

研究会

2015年6月6日

中野智世 (成城大学) 「ケアの制度化と宗教——ドイツ福祉国家におけるカリタスの思想と実践から」

浜田明範 (国立民族学博物館) 「なぜ世帯という単位は機能しなかったのか——家族を要請しない社会を考える」

討論 全員

2015年6月7日

高田 実 (甲南大学) 「『生の歴史学』を求めて——ケア論からの問いかけを考える」

土屋 敦 (徳島大学) 「子どもの社会的養護と「社会的なもの」論の再考」

研究打ち合わせ 全員

2015年10月3日

モハーチゲルゲイ (大阪大学) 「実験としてのケア——西ハンガリーの治験施設支援機関の事例から」

岩佐光広 (高知大学) 「独居老人とケア——ラオス低地農村部の事例から」

討論 全員

2015年10月4日

天田城介 (中央大学) 「現代日本における高齢者ケアをめぐる家族の変容」

内藤直樹 (徳島大学) 「ケアされることからの自由：東アフリカの開発・援助対象社会における家族の再編」

研究打ち合わせ 全員

2015年12月19日

廣瀬淳一 (高知大学) 「高知における男女共同参画の現状」

全 員 「男女共同参画と地域社会」

全 員 「家族と職場を媒介するモノ」

2015年12月20日

全 員 「共同研究の中間段階における総括」

全 員 「今後の研究計画」

2016年1月9日

木村周平 (筑波大学) 「津波・家・国家——三陸漁村の「復興」について」

加藤敦典 (東京大学) 「ベトナムの村落地域における高齢者ケアの制度化に向けた動き——家族・国家・市場・共同体」

討論 全員

2016年1月10日

高橋絵里香 (千葉大学) 「ネオリベラルな辺境——フィンランドの地域福祉改革にみる親族介護の浮上」

工藤由美 (亀田医療大学) 「先住民組織の二つの顔と民族医療」

研究打ち合わせ 全員

成果

これまでの議論を通して、問題接近の三つの方向性が明らかになった。第一は、ケアから社会構造や社会システムの変化をとらえていく方向で、岩佐 (ラオス)、天田 (日本)、加藤 (ベトナム) らの議論が、高齢化のすすむ地方の研究において追及した。第二は、特定のケア・アクターに焦点をあてる方向で、国家や家族、先住民アソシエーション等が、何をなし、何をなしていないか問い直す。浜田 (ガーナの家族)、内藤 (アフリカの難民キャンプ)、工藤 (チリの都市先住民)、木村 (三陸津波の復興)、土屋 (子供の社会的擁護) らの議論が追及した。第三は、ケアという視点から、福祉国家システムの編成や再編成の過程を問い直そうとする方向で、中野 (ドイツ)、高田 (イ

ギリス)は近代福祉国家の形成期を、高橋(フィンランド)、モハーチ(ハンガリー)は現代の福祉のあり方をとりあげて議論した。高知大学における研究集会では、地方の保育・介護の現状と課題について、現地の研究者をまじえて議論した。

「政治的分類——被支配者の視点からエスニシティと人種を再考する」

21世紀になり、エスニシティ(文化的実践による社会的分類)や人種(肌の色による社会的分類)が構造化された社会に住み不利益を受けている人々は、カラーブラインド主義や逆差別というリベラリズムの変奏が世界規模で支持を得ている中で、不利益の是正を求める根拠すら失われかねない状況に直面している。本共同研究は、歴史的・民族誌的資料に基づいて、被支配者側からの政治的抵抗の基礎となる分類の編成を解明し、リベラル民主主義の陥穽を批判的に乗り越える契機とする研究視座の確立を目指す。より具体的には、これまでコロニアリズムの歴史において不可視だった支配者側のエスニシティや人種(たとえば、アイヌ民族のいう「シャモ」、沖縄の人々が発する「ナイチャー(ヤマトンチュ)」、カナカ・マオリが用いる「ハオレ」、グアテマラ・マヤ人が口にする「カシュラン」)を可視化する視点として政治的分類という考え方を提示する。

研究代表者 太田好信

班員(館内) 関 雄二 竹沢尚一郎 寺田吉孝
(館外) 青木恵理子 池田光穂 石垣 直 川橋範子 慶田勝彦 辻 康夫 深山直子
細川弘明 松田素二 山崎幸治 山本真鳥 横田耕一

研究会

2015年4月25日

事務連絡

山崎幸治(北海道大学)「日本におけるアイヌによる自己・他者分類」

討論(質疑応答)

横田耕一(九州大学)「『集団(先住民・被差別集団など)』と法」

討論(質疑と応答)

2015年4月26日

総合討論(前日の発表に関する質疑と応答)

2015年6月20日

石垣 直(沖縄国際大学)「『交錯する『植民地経験』——台湾原住民・ブヌンと『日本』との衝突・接触・邂逅」

討論(質疑応答)

細川弘明(京都精華大学)「『真の所有者』の政治文化学——『表層の支配者』に対するアボリジニーのまなざし」

討論(質疑応答)

2015年6月21日

総合討論(前日の発表に関する質疑と応答)

2015年10月31日

事務連絡

池田光穂(大阪大学)「インディオ・メスティソ・ラサ:ラテンアメリカにおける人種的カテゴリー再考」

討論(質疑応答)

山本真鳥(法政大学)「パパラギをめぐる:サモア人にとっての白人とは?」

討論(質疑応答)

2015年11月1日

総合討論(前日の発表に関する質疑と応答)

2016年1月30日

事務連絡

川橋範子(名古屋工業大学)「白いフェミニズムに抗って——(外産の)『日本人』女性宗教研究者がフェミニスト民族誌を書く困難とは」

討論(質疑と応答)

慶田勝彦(熊本大学)「ムスング(白人)という分類——ケニアのTVドラマ作者アシナ・キビビと憑依霊とし

ての〈白人〉の視点から」

討論（質疑と応答）

2016年1月31日

総合討論（前日の発表に関する質疑と応答）

成果

本年度は、二つの異なった方向性をもった発表があった。まず、被支配者から見た支配者の表象についての研究発表として、サモア人から見た白人の表象、ケニアでの憑依霊儀礼に出現する白人、白人との法廷闘争におけるアポリジナルの視線、アイヌによる自己と他者との分類に関する発表群があげられる。また、客観的視点からラテンアメリカでのエスニシティに関する分類、植民地下台湾の先住民の分類についての発表もあった。次に、以上とは異なった方向性をもつものとして、先住民や被差別集団に関する法規定をテーマにした発表、フェミニズムにおいて白人女性が女性全般を代表することへの異議申し立てについての報告があった。これまでの発表における二つの方向性から、次年度では強調すべき点が明確になった。それは、被支配者側により支配する側が民族や人種として集団化され名指されるとき、現在、どのような理論的立場からそれらの名指しを評価し、考察するかという研究者自身の分析カテゴリーへの反省によって開かれる視点がいまだに存在することである。

「生活用品から見たライフスタイルの近代化とその国別差異の研究」

本研究は、世界各地の衣食住にかかわる生活必需品の調査を通じて、その変化が伝統的生活様式から近代的生活様式への変化にいかに関連し、またその近代的生活様式が世界的な共通性を示しつつ、なお国ごとの差異をどのような面で保持しているかを検証し、近代化の一般性と国ごとの個性およびその要因を考察することを目的とする。国家制度や生業経済の近代化は、住民生活のレベルでは生活様式の変化として経験される。生活様式の近代化は、衣類や台所用品、また家具や部屋の間取りの刷新と連動している。そうした生活用品の変化という物質文化研究を切り口に、生活様式が近代化に伴っていかに変化したかをあぶりだそうとするのが本研究の狙いである。生活の近代化には世界規模での画一性が認められる一方、衣食住の伝統慣行に由来する国ごとの差異も予測され、近代化の過程に文化的差異が関与していることを示唆している。本研究ではそうした「近代化」の一般理論についても物質文化の観点から検討を加える。

研究代表者 鏡味治也

班員（館内）宇田川妙子 笹原亮二 関 雄二 野林厚志 浜田明範
（館外）阿良田麻里子 金子正徳 田村うらら 中谷純江 西本陽一 古谷嘉章 松村恵里

研究会

2015年5月9日

関 雄二（国立民族学博物館）「ペルーでの生活用品試行調査」
浜田明範（国立民族学博物館）「アフリカでの生活用品試行調査」
出席者全員：生活用品資料収集上の問題点の検討

2015年11月14日

カノックワン・ソムシリヴァランクール（金沢大学）「タイでの生活用品試行調査」
松村恵里（金沢大学）「インドでの生活用品試行調査」
田村うらら（金沢大学）「トルコでの生活用品試行調査」

2015年12月12日

宇田川妙子（国立民族学博物館）「イタリアでの生活用品試行調査」
中谷純江（鹿児島大学）「北インドでの生活用品試行調査」
出席者全員：生活用品資料収集上の問題点の検討

成果

本年度は参加各員のそれぞれの調査地での試行的なデータ収集の報告と、それを踏まえての生活用品リストや生活様態質問表の問題点指摘を行った。報告地域は南米、西アフリカ、東南アジア、インド、近東、南ヨーロッパにまたがり、それぞれの地域の特徴とともに汎世界的な共通性をうかがわせる生活用品の具体例が示された。とりわ

けそれぞれの地域の人びとのこだわりを示す用品が千差万別である点が興味深い。具体例の提示とともに、用品リストよりも生活様態問表の方が聞き取りの際により有効であり、期待する答えを引き出しやすいこと、またこうした用品調査はフィールドを知る第一歩としての手段としても有効であることを確認した。さらにヨーロッパの事例から、先行したインドネシアでの「伝統から近代への変化」という調査枠組みについて疑義が出され、用品の変化が示すものが何かについて問題提起され、今後の検討課題とすることにした。

「呪術的实践=知の現代的位相——他の諸実践=知との関係性に着目して」

現代世界を構成するさまざまな実践=知（本研究では、感覚を含む行為と知識・信念の双方にわたる概念として、便宜的に「実践=知」という語を用いる）のなかで、呪術的实践=知はいかなる位置をしめ、またそれ以外の諸実践=知といかなる関係性をもつのか。本研究では、呪術的实践=知とそれ以外の諸実践=知（すなわち科学、宗教、病院医療、学校教育、メディア表象など）との関係性を明らかにすることによって、現代世界における呪術の個性（特殊性）と普遍性（他の諸実践=知との共通性）をうきぼりにすることをめざす。

本研究は、先立つ民博共同研究「知識と行為の相互関係からみる呪術的諸実践」（2007～2009年度、代表：白川千尋）とその成果論集『呪術の人類学』（2012年、白川・川田編、人文書院）をふまえて、その基本的枠組みであった「言葉／行為」を、宗教・世界観や制度との関わり、また世界とのインターフェースとしての感覚などの観点を組み込むことによって、「信じる／知る／行なう／感じる」の各理論的次元へ継承的に発展させる。それを通じて呪術論の観点から、現代世界における実践論や知識論を刷新することをこころざす。

研究代表者 川田牧人

班員（館内） 飯田 卓 藤本透子 松尾瑞穂 浜田明範
（館外） 飯田淳子 梅屋 潔 片岡 樹 黒川正剛 近藤英俊 島蘭洋介 白川千尋
田中正隆 中川 敏 中村 潔

研究会

2015年6月28日

梅屋 潔（神戸大学）「『災因論』『物語論』そして『アブダクション』——ウガンダ・パドラ民族誌の予備的考察」
中川 敏（大阪大学）「引用と呪術」
全体討論、次回以降の研究計画

2015年10月18日

浜田明範（国立民族学博物館）「妖術による媒介——ガーナ南部における王権闘争をめぐる」
黒川正剛（太成学院大学）「西欧近世の魔女信仰における呪術的实践=知の諸相」
全体討論、次回以降の研究計画

2015年12月26日

関 一敏（九州大学）「呪術と日常」
川田牧人（成城大学）「中間地点での論点整理と、成果報告の構想」
全体討論：次年度計画ほか

成果

本年度は3回の研究会において、①現代世界の諸実践=知の環境における呪術的諸実践の位置づけ、②知識や観念に偏らない当事者性、という二つの眼目にせまる議論を重ねた。①に関しては、現代的環境における論理・認識としての呪術的諸実践=知の性格づけに関する検討がなされた。たとえば昨年度の「偶然性の必然化」という作用と対をなす形でのアブダクション的論理や、引用論として呪術を捉える議論などがそれにあたる。いっぽう②に関しては、呪術の社会的実践としての側面、ならびに感覚や感性の社会史と接合しうる方法論的整理などがなされ、「行なう」、ならびに「感じる」の側面が中心的に検討された。これらの議論は、近年の呪術論で論じられるような、合理／非合理の二分法を脱した地点にある直感力や創造性、幻視性、仮想性などをともなった人間の生活能力に対して光をあてることになる。と同時に、個別性をおびた具体的存在としての「個」が、いかに呪術的实践=知にかかわるかという視座をひらくことによって、呪術世界そのものを描出する可能性についても検討が加えられた。

「資源化される『歴史』——中国南部諸民族の分析から」

「歴史」を表象、叙述、再編成し資源化する現象は人類社会では普遍的に見られる。近年、中国のインパクトが強まり、日本や世界に多大な影響を及ぼしており、中国に関する関心が高まり、その研究が緊急の課題になっている。また、中国では「中華民族」の一体性が政治的に強調される傾向が顕著である。さまざまな「歴史」の細片をハイブリッドな形で縫合して構築し、それを実利に結びつくものとして「資源化」しがちな傾向が見られる。「歴史」を「資源化」する主体は、各級政府、研究者、知識人、マスメディア、一般民等、複数あり、それらが互いに対立、交渉、妥協しあいながら、資源化の潮流を作り出している。同時に、「歴史」は「資源化」される際に、実用価値的な側面だけでなく、様々な認識主体が自分たちの正当性とアイデンティティの維持を担保しようとして構築される側面をも有する。本研究では、いかなる「歴史」が多様な主体によって、実利の獲得やアイデンティティの維持のため、どのように「資源化」されているのか、エスノ・ローカルな政治社会空間を舞台として批判的・分析的に明らかにする。

研究代表者 長谷川清

班員 (館内) 榎永真佐夫 河合洋尚 韓 敏 塚田誠之
(館外) 稲村 務 上野稔弘 兼重 努 瀬川昌久 曾 士才 孫 潔 高山陽子
長谷千代子 長沼さやか 野本 敬 松岡正子 吉野 晃

研究会

2015年度は3回の共同研究会を開催し、2014年度に引き続き、(1)記録・記憶、(2)神話・伝承、(3)史跡・景観、(4)アイデンティティの問題視角から、比較検討を行った。各回の研究報告は、以下のとおりである。

2015年7月4日

長谷千代子(九州大学)「歴史の資源化と利用目的：雲南省徳宏州の『果占壁(コーチャンピ)王国』論をめぐって」

曾 士 才(法政大学)「伝統儀礼の観光資源化と地元住民の意識——ミャオ族の鼓社節を事例に」

2015年10月31日

松岡正子(愛知大学)「蘇る？青蔵高原東部の古砦——再生産される記憶」

楊 海 英(静岡大学)「チンギス・ハーンは誰の英雄？——「中華民族の文化資源」と化すモンゴルの歴史と文化」

2016年1月9日

兼重 努(滋賀医科大学)「民族の歴史を書く——侗族簡史から侗族通史へ」

河合洋尚(国立民族学博物館)「客家地域における歴史の資源化と景観形成——寧化石壁を中心として」

成果

上述の6つの事例報告(タイ族、ミャオ族、チャン族、モンゴル族、トン族、客家)の比較検討を通じて、個別性をもつ諸集団の集成的、歴史的記憶が現在どのように表象され、活用/運用されているのか、属する文脈が変化する中でいかなる読み替えや再解釈が起きているのか、集団のアイデンティティの維持や主張とどのように接合されているか等について、比較研究に必要な枠組みと今後検討すべき課題が浮かび上がってきた。あわせて、エスノ・ローカルな文脈における「歴史」の資源化が市場経済化などの影響を受けて複雑な力関係を内包している点、「記憶」の媒体は非文字のテキストも含めて動的で可塑的である点が具体例によって示され、「歴史」の資源化が国家というナショナルな境界を有する特定の全体社会を基盤としつつも、その外部社会も含めた文脈や状況、関係性の中で進行していることが明らかになった。この共同研究の進展にとって有益な論点を共有することができたと言える。

「モノにみる近代日本の子どもの文化と社会の総合的研究——国立民族学博物館所蔵多田コレクションを中心に」

国立民族学博物館に所蔵される多田コレクション(通称「時代玩具」)は、江戸時代から戦後にかけての玩具を中心とした子どもに関わる様々なモノから構成される、総数5万数千点に及ぶ膨大な資料群である。玩具を初めとした子どもに関する多種多様なモノの数々は、それぞれの時代の子どもの対する人々や社会の意識を克明に映し出している。しかし、近代以降、それらは消費を前提として商品化されたこともあって、遺存は少なく実態は明らかではない。多田コレクションは、そうした子どもに関する品々が網羅的に収集・保存されている希有な例として価値

が高い。

本研究は、児童学・美術史・玩具学・歴史学・民俗学・文化地理学・保存科学といった様々な専門分野の研究者が一堂に会し、コレクションの資料に対して多角的・総合的に検討し、分析を加えることで、コレクションの全体像を正確に把握することを試みる。それと共に、従来漠然としたイメージでしか理解されてこなかった近代日本の子どもの文化や社会の実態を、モノを資料として活用することで具体的かつ精緻に解明する。そして、その成果に基づき、近代以降の子ども観に代わる時代に即した新たな子ども観の見通しを提示し、展示会の開催を通じて広く社会に問うことを目的とする。

研究代表者 是澤博昭

班員 (館内) 笹原亮二 日高真吾
(館外) 稲葉千容 内田幸彦 香川雅信 亀川泰照 小山みずえ 是澤優子 神野由紀
滝口正哉 濱田琢司 森下みさ子 山田慎也

研究会

2015年5月16日

日高真吾(国立民族学博物館)「民博(子供生活文化に関連する所蔵資料)の現段階の整理作業の現状について」
目録の熟覧

2015年5月17日

目録の熟覧と内容等に関する質疑応答
研究会成果報告に関連する特別展の開催等に関する検討

2015年10月17日

濱田琢司(南山大学)「コレクションと創造——民芸運動周辺における収集から」
資料の熟覧と質疑応答

2015年10月18日

香川雅信(兵庫県立歴史博物館)「兵庫県立歴史博物館蔵『入江コレクション』について」
資料の熟覧と研究会成果報告に関連する検討

2015年11月28日

田中宏和(田中本家12代当主)「田中本家博物館の概要」
神野由紀(関東学院大学)「田中本家博物館の子供用品」
資料の熟覧と質疑応答

2015年11月29日

山田慎也(国立歴史民俗博物館)「節供行事の変容——雛祭りのイベント化を中心として」
細井雄次郎(長野市立博物館)「長野市内の小正月行事と子どものかかわり」

2016年2月10日

今年度の研究会の総括と今後の研究計画について
資料の熟覧と質疑応答

2016年2月11日

資料の熟覧と質疑応答

成果

民博資料の現段階における整理状況の共有化をはかり、収集行為そのものの歴史的な意味に関する研究会を開催した。さらに民博資料の目録の熟覧で全体像を把握し、各共同研究員の専門分野と研究テーマに従い実物資料の熟覧に入ること、調査に大きな進展がみられるとともに、本資料の意義と問題点を把握することができた。

その結果、近代日本の子どもの文化や社会の実態を展示に反映するための方向性が絞られてきたが、民博資料だけでは十分に補いきれないジャンルがあることも判明した。そこで長野県須坂市の田中本家博物館の実地調査および周辺地域の子どもの文化の把握、兵庫県立歴史博物館所蔵入江コレクションの概要報告等、各地の類似のコレクションとの比較検討と相互補完の可能性を模索した。

これによりいわゆるモノ(玩具・衣服・文具など)を中心に子どもの生活文化を概観する展示会の開催に向けた調査研究の基盤が形成された。

「演じる人・モノ・身体——芸能研究とマテリアリティの人類学の交差点」

1980年代以降の人類学は、モノが人間に使われたり、意味や価値を付与される側面だけでなく、モノの側からの人間への働きかけや、モノと人の相互作用によって出来事が生成されるプロセスに着目している。また、そこに物質性がいかに関わるのかという問いも重要性を帯びている。本研究は、こうした「マテリアリティの人類学」の関心を芸能研究に差し入れ、新たな芸能研究の視座を探求する。この芸能にはいわゆる「民俗芸能」からコンテンポラリーまでを含む。また本研究の関心は、身体や上演を取り囲む環境にも向けられる。本研究の第一の目的は、芸能を人とモノの織りなす営みと捉え直し、表現や伝承にモノがどのように関与するのかを考察する事である。

芸能に特徴的な、人とモノ（例えば仮面や楽器や他者の身体）が「一つになる」相互浸透的な在り方や、モノに触発され想像力や創造性が刺激されるプロセスにも注目する。動きや音や物語の中で展開する人とモノの関係性の特性を考察し、人類学を進展させることが本研究の第二の目的である。

研究代表者 吉田ゆか子

班員（館内）八木百合子

（館外）佐本英規 大門 碧 田中みわ子 辻本香子 丹羽朋子 増野亜子 松嶋 健
柳沢英輔 山口未花子 竹村嘉晃

研究会

2015年10月10日

吉田ゆか子（国立民族学博物館） 前回のまとめ、事務連絡 前回欠席者の自己紹介など

佐本英規（筑波大学）「竹（アウ）から楽器（アウ）へ。楽器（アウ）から音（アウ）へ——ソロモン諸島アレアレの竹製パンパイプス・アウにおける物質性の諸相」

大門 碧（京都大学）「コントロールできないものが魅せる音楽エンターテイメント——ウガンダの首都カンパラの『カリオキ』から」

2016年1月16日

吉田ゆか子（国立民族学博物館） 前回のまとめ、事務連絡

増野亜子（東京藝術大学）「音声・身体・モノ バリの歌芝居アルジャと影絵芝居ワヤン・クリットの比較から」

飯田玲子（京都大学）「間身体的な性愛から都市的なエロスへ——メディアの発展とラーワニーの変化」

2016年1月17日

柳沢英輔（同志社大学）「フィールド録音の実践を通して考える人・モノ・自然の関係性」

竹村嘉晃（人間文化研究機構）「神霊と人をつなぐ『モノ』——インド・ケーララ州のテイヤム祭祀と実践者の生活世界」

全員 今後の予定など

成果

計3回の研究会を開催し、特別講師の飯田玲子さん（京都大学）を含む6人が研究発表を行った。初回の2人の発表は、いずれもモノの「制御できなさ」が芸能の表現に影響している点に着目するものであった。伸縮するために音律が一定でない竹パイプや、操作が煩雑なPCから出力される予測されなかった楽曲は、それぞれ独特のチューニング観や、即興的なパフォーマンスを生じている。

連続開催された2回目と3回目では、衣装や人形、上演の映像記録、録音作品、エオリアン・ハーブ、演者の写真やポスターなどのモノがかかわる芸能の諸現象について議論された。加えて、役柄の固定的なイメージ、録音物、音、音をつくる風、といった、モノではないが、ある種の「モノ的な様相を帯びた」存在に関心が集まるようになった。これらは、モノのすぐ傍にあって、モノと共に、芸能の表現、伝承、そして拡散に作用する。この点については来年度も引き続き議論を重ねてゆく予定である。

「チベット仏教古派及びボン教の護符に関する記述研究」

1979年に国立民族学博物館は「チベット仏画コレクション」を購入した。その内容は実は仏画ではなく、千点を超すチベット仏教古派及びボン教の護符とそれを刷るための版木である。チベット仏教とボン教は独自の教義・哲学・論理体系を作り上げ、東洋人の思惟方法を語る上で主要な柱の一つになっている一方で、民間信仰をも貪欲に

受け入れ、独特の「行」を発展させてきた。チベットの精神文化基層においては、超越的な原理と世俗的な経済原理とが絡み合っており、その二つを有機的に結びつけるための仕掛けとして「呪力観ないし呪物」が働いていると思われる。仏教やボン教の大蔵経論部の一定のポジションが「呪法」や「脱呪法」に割かれているのはそのことと密接な関連がある。護符はそこに機能する呪物の身近なモノの一つである。

我々は、チベットに広く行われている護符に注目し、一般の人々の目線に立って、それらの内容・意味・用途の記述、文献学的裏付け、護符の加持・聖化（パワーの付与）に関する儀礼、その経済的仕組み、チベット人でない人々を含む民衆の間での現代的意味などを様々の角度から調査研究し、護符というモノを通じてチベットの宗教実践の有り様と宗教文化基層の一端を明らかにすることを目標としているが、本共同研究ではその第一歩として民博が蔵する護符の図像とそこに書かれるマントラを含む文を記述・解析することを試みたい。

研究代表者 長野泰彦

班員（館内）立川武蔵 三尾 稔
（館外）大川謙作 大羽恵美 小西賢吾 小松和彦 武内紹人 津曲真一 那須真裕美
別所裕介 三宅伸一郎 村上大輔 森 雅秀 脇嶋孝彦

研究会

- ①2015年秋から2016年3月まで、本館の「チベット仏画コレクション」を図像学と機能の観点からカテゴリ別に整理し、N. Douglas: Tibetan Tantric charms and amulets との異同を検証した。
- ②このため、図像解析、文の解説、文献の裏付けの3班が、2015年10月、2016年1月及び2月に、会場はいずれも本館で、小人数で記述作業を行った。

2015年10月10日

護符の同定・記述作業

2015年10月11日

護符の同定・記述作業

2016年1月9日

護符の同定・記述作業

2016年1月10日

護符の同定・記述作業

2016年2月18日

護符・白描図像の記述作業

2016年2月19日

護符・白描図像の記述作業

成果

- ①護符及び白描による尊像図がチベット宗教のどの宗派に関わるものであるかを検討し、用途とともにカテゴリ化を図った。
- ②N. Douglas: Tibetan Tantric charms and amulets との異同を検証した。
- ③本館で既に公開されている標本資料情報カードの記述を検証し、記述の問題点を抽出した。

「グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究」

人類学においてサブスタンス（身体構成物質）に関する研究は、主に親族研究のなかで行われてきた。特に、生殖の観念の文化的多様性に関する民俗生殖理論や、生物学的生殖に限定されない人の関係性についての議論は、自然／文化、生物学的／社会的次元の二元論を前提とする親族（研究）を批判的に乗り越えようとするものである。ところが、今日、サブスタンスは、科学技術や医学の発展、グローバルな経済市場やトランスナショナルな移動の増加という現象の最前線で、資源として取引され、流通されるようになっており、従来の親族研究の射程を超えた新たな重要性を帯びるに至っている。遺伝子やゲノムといった新たなサブスタンスが、個や家族、集団のアイデンティティ形成や社会化のあり方に影響を及ぼすさまは、医療人類学を中心に生社会性（biosociality）という点から議論されている。

本研究の目的は、オセアニア、アジア、ヨーロッパにおけるサブスタンスの社会的布置に関する比較研究を通し

て、グローバル化時代のサブスタンスをめぐる社会動態の包括的な理解をはかるとともに、親族研究と医療人類学で二極化されているサブスタンス研究を架橋するアプローチを提示することである。

研究代表者 松尾瑞穂

班員 (館内) 宇田川妙子

(館外) 澤田佳世 島藺洋介 白川千尋 新ヶ江章友 田所聖志 深田淳太郎 洪 賢秀
松岡悦子 松嶋 健 山崎浩平

研究会

2015年11月7日

松尾瑞穂 (国立民族学博物館) 「研究会の目的と今後の研究計画」

松尾瑞穂 (国立民族学博物館) 「サブスタンス研究の動向」

全員「討論」

2016年1月30日

島藺洋介 (大阪大学) 「文献解説 D. Schneider (1968) American Kinship」

新ヶ江章友 (大阪市立大学) 「文献解説 A. Shimizu (1991) “On the Notion of Kinship”」

深田淳太郎 (三重大学) 「文献解説 清水昭俊 (1989) 「血」の神秘」

成果

初年度にあたる2015年度は、2回の研究会を開催し、サブスタンスに関する比較研究という本共同研究のテーマと課題について、メンバー全員の共通理解を深める作業を行った。研究代表者の松尾による研究動向のまとめの発表に続き、本テーマと関連する各メンバーの研究関心、本研究会における役割について意見交換を行った。第2回目の研究会では、親族研究におけるサブスタンスをキーワードとし、同分野の基本重要文献の解説を行った。研究会前に全員が事前に文献を読解したうえで、島藺、新ヶ江、深田の3名による文献解説発表を行った。2回の研究会を通して、サブスタンスという研究領域とその射程について、メンバー同士で活発かつ濃密な議論がなされ、2年目以降につながる大変有益な内容となった。

「驚異と怪異——想像界の比較研究」

ツヴェタン・トドロフが『幻想文学論序説』(1970)で定義したように、「驚異」marvelousや「怪異」uncannyは、自然界には存在しえない現象を描いた幻想文学、いわゆるファンタジーの部類に入るとみなされる。近代的な理性の発展とともに、科学的に証明のできない「超常現象」や「未確認生物」はオカルトの範疇に閉じ込められてきた。しかし近世以前、ヨーロッパや中東においては、犬頭人、一角獣といった不可思議ではあるがこの世のどこかに実際に存在するかもしれない「驚異」は、空想として否定されるべきではない自然誌の知識の一部として語られた。また、東アジアにおいては、実際に体験された奇怪な現象や異様な物体を説明しようとする心の動きが、「怪異」を生み出した。

本研究会では「驚異」と「怪異」をキーワードに、異境・異界をめぐる人間の心理と想像力の働き、言説と視覚表象物の関係、心象地理の変遷などを比較検討する。その成果は、当館における特別展示のかたちで公開することを予定している。

研究代表者 山中由里子

班員 (館内) 菅瀬晶子 吉田憲司

(館外) 榎村寛之 大沼由布 香川雅信 金沢百枝 黒川正剛 小林一枝 小松和彦
小宮正安 佐々木聡 寺田鮎美 林 則仁 松浦史子 松田隆美 安井眞奈美

研究会

2016年1月11日

山中由里子 (国立民族学博物館) 趣旨説明

黒川正剛 (太成学院大学) 「驚異研究から見た怪異——『妖怪学の基礎知識』と『怪異学入門』に基づく問題提起」

全員・全体討論

2016年2月7日

榎村寛之（三重県立斎宮歴史博物館）「怪異学から見た驚異——『〈驚異〉の文化史——中東とヨーロッパを中心に』に基づく問題提起」

香川雅信（兵庫県立歴史博物館）「妖怪研究と驚異研究の接点を探る」

全員・全体討論

成果

初年度である2015年度は、驚異研究と怪異研究のそれぞれの分野における基礎文献といえる研究書を指定し、それらを事前にメンバー全員が読み、怪異については驚異側から、驚異に関しては怪異側の研究者から接点や疑問点を提示し、討論を行った。テーマ書籍としたのは、小松和彦著『妖怪学の基礎知識』（角川選書、2011年）と東アジア怪異学会編『怪異学入門』（岩田書院、2012年）、および山中由里子編『〈驚異〉の文化史——中東とヨーロッパを中心に』（名古屋大学出版会、2015年）である。

基礎的な語彙、頻出するモチーフ、歴史的な枠組み、研究史などを確認し、これから具体的なテーマについて議論してゆくための基盤を築いた。特定の文化特有の用語を、別の文化の現象を語る際に無批判に使うことや、鳥瞰的な比較研究が陥りやすい一般論化・単純化の危険性を十分に認識し、一次資料やフィールドデータの緻密な分析に基づいた研究報告を重視し、実証的な比較を行う必要性を全員で確認した。

「応援の人類学——政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌」

本研究は、応援という切り口から、人類学的研究領域の拡大を図り、人間文化の特質の一端を解き明かすことを目的としている。実践的な関心とも関係する開発援助から福祉やケアサービスなど「支援」に関する研究や、アニメなど現代風俗のファン文化に関する研究は、人類学のみならずさまざまな学問分野において近年数多くなされている。本共同研究会では、こうした個別研究を横断的に架橋して、政治やスポーツにおける応援まで含めたい。人間にとっての利他性の特質にも迫りたい。応援（support）という行為一般を対象とするが、さしあたり政治・スポーツ・ファン文化の下位領域に分けて焦点を当て、民族誌的データをもとに比較分析を行う。

研究代表者 丹羽典生

班員（館内） 笹原亮二 三尾 稔
（館外） 岩谷洋史 梅屋 潔 小河久志 風間計博 亀井好恵 木村裕樹 熊田陽子
瀬戸邦弘 高橋豪仁 高野宏康 立川陽仁 椿原敦子 難波功士 前川真裕子
山田 亨 吉田佳世

研究会

2015年10月24日

丹羽典生（国立民族学博物館）「野次・喝采から応援へ：応援の人類学的研究に向けた試論」

全 員 「各自の研究紹介及び今後の予定の検討」

2016年1月30日

丹羽典生（国立民族学博物館）「応援文化という領域と特性——日本の大学応援団の変化から考える」

岩谷洋史（神戸大学）「選択されるパフォーマンス——大学応援団における身体的動作を通じての考察」

成果

研究会を2回開催した。初回は研究代表者の丹羽典生が研究会の趣旨を説明した。また目指される研究枠組みについて、各参加メンバーと方向確認・意見交換を図った。「応援」という言葉で意図する研究対象の領域の幅を検討し、組織化、ジェンダーの偏り、文化表象とアイデンティティなど研究会全体として見ていきたい項目について、議論を行った。第2回目は、応援を比較文化として論じることの意義を、申請者が2014年にAnthropology of Japan in Japanで組織したパネルに基づいて、日本の大学応援団を事例に報告した。応援という現象を見るときに個人と組織という軸で見る必要があること、アイデンティティ表象と関わる側面に注目していきたいなど、以上の活動を通じて翌年以降の研究会の土台作りを行った。

「考古学の民族誌——考古学的知識の多様な形成・利用・変成過程の研究」

考古学は一般に過去についての科学的な研究と捉えられている。しかし同時に、考古学的知識や出土品が、時に観光資源として利用され、国家・民族をめぐる政治と結びつくように、現代を形作る実践的な学問でもある。この「科学としての考古学」と「社会实践としての考古学」の間の緊張関係をめぐって、考古学者も、植民地主義やナショナリズムの歴史との関わり等、考古学の倫理について内省的な検討を始めているが、それらはまだ考古学内部にとどまっている。本共同研究では、考古学的知識が作られ、消費される、その多様なあり方を検証することによって、考古学がどのように社会関係や人々の世界観を形成し、変化させ、新たな景観をも作り出しているのかについての広範な理解を目指す。

そのために、次の3つの視点から複数フィールドにおける考古学的実践の民族誌・歴史的研究を行う。

(1) 考古学的知識・技術習得のプロセスは、どのように個人のもの見方、コミュニケーション、行為に影響を与えているのか。(2) 発掘現場やラボで、出土品などのモノはどのように考古学的データに変換されるのか。(3) 考古学は遺跡観光、国家・民族の歴史の修正、社会運動にどのような影響を与えているのか。

研究代表者 ジョン・アートル (ERTL, John)

班員 (館内) 関 雄二 寺村裕史 野林厚志 ピーター J. マシウス
(館外) 石村 智 市川 彰 岡村勝行 サウセド・セガミ・ダニエル・ダンテ 渋谷綾子
寺田鮎美 中村 大 松田 陽 溝口孝司 村野正景 山藤正敏 吉田泰幸
米田 穰

研究会

2015年10月17日

ジョン・アートル (金沢大学) 「共同研究の概要」

メンバー自己紹介

松田 陽 (東京大学) 「自著解題：『実験パブリックアーケオロジ（第1・2章）』」

2015年10月18日

吉田泰幸 (金沢大学) 「縄文と社会運動」

読書会 「Bruno Latour 科学論の实在——パンドラの希望 第2・3章」司会：石村 智・山藤正敏

今後の予定について打ち合わせ

2016年2月13日

ジョン・アートル (金沢大学)・石村 智 (東京文化財研究所)

浅川滋男 (公立鳥取環境大学) 「建築遺構の復元に関する諸問題」

安芸早穂子 (復元画家) 「復元絵画について」

石村 智 (東京文化財研究所) 「修復とオーセンティシティ：カンボジアの事例」

2016年2月14日

ジョン・アートル (金沢大学) Prehistoric Building Reconstructions in Japan.

寺田鮎美 (東京大学) 「博物館と複製メディア」

総合討論 (今後の予定について打ち合わせを含む)

成果

共同研究会第一回は、「考古学の民族誌」が目指すべき方向、方法論、立ち上げの背景について、メンバー間の共通理解を形成することが目的であった。代表者であるアートルの趣旨説明、松田による本共同研究に関連する自著の一部解題、吉田による「考古学の民族誌」ケーススタディの紹介、理論的基盤形成に欠かせない重要文献の石村・山藤による解題、以上4つの内容で構成され、それぞれの内容に関する議論も活発に行われた。

共同研究会第二回は、「考古学における復元と表象」と題し、2名のゲストスピーカー (浅川滋男・鳥取環境大学、安芸早穂子・復元画家) による発表と、3名 (石村・寺田・アートル) による研究発表、および復元とオーセンティシティに関する2本の文献の解題 (司会：石村) によって構成され、考古学の復元におけるオーセンティシティの問題や、それに係る社会的状況についての分析および議論をおこなった。

本研究の目的は、宇宙開発を対象にした人類学的研究の可能性を探り「先端科学技術」の人類学という新しいテーマに接近するための方法論的検討をおこなうことにある。20世紀後半から宇宙開発に関わる科学技術の進展、宇宙空間の利用が本格化し、宇宙は単に科学技術の研究対象に留まるだけでなく、国際的に展開する政治的かつ経済的な背景やローカルな社会文化的な基盤や生活文化とも密接に関わる問題領域となりつつある。本プロジェクトは、(1) 想定される宇宙に関する具体的なトピック（宇宙産業、ツーリズム、人間の身体的かつ認知的変容など）に対する従来の概念の有効性や方法論を検討する。(2) は、科研費によるJAXAとの共同調査プロジェクトと併行して行われ、宇宙開発技術者に対するインタビュー調査データの検討・解釈作業を進める。本研究は最終的に近代科学技術の検討を射程に入れた「宇宙人類学」という総合的な主題を設定した研究領域の確立を目指す。

研究代表者 岡田浩樹

班員（館内）上羽陽子 飯田 卓
（館外）磯部洋明 岩谷洋史 岩田陽子 大村敬一 川村清志 木村大治 佐藤知久
篠原正典

研究会

2015年12月26日

岡田浩樹（神戸大学）「宇宙開発の文化人類学的研究の可能性」

質疑応答

参加者全員 「各自の研究の紹介および今後の予定の検討」

2015年12月27日

佐藤知久（京都文教大学）「Japan space exploration oral history project (JSE project) について」

大関恭彦（JAXA）「日本の宇宙開発に関する専門的知識の提供」

全 員 「宇宙開発に関わる資料の検討」

2016年2月20日

研究成果物編集会議、および今後の活動の打ち合わせ（参加者全員）

2016年2月21日

岸本統久（JAXA）「衛星ナビゲーションについて」

後藤 明（南山大学）「人類学と天文学：スカイロア／スカイスケープ人類学の系譜と可能性」

全体討論

成果

第一回研究会では、宇宙開発に関する人類学的研究の可能性と課題について、共同研究会に先立つ日本文化人類学会研究課題懇談会「宇宙人類学研究会」の活動について報告、参加者による検討と議論を行った。議論を通し、今後の研究会については、1. 日本の有人宇宙開発に関わったスピーカーを招聘、参加者による議論を行う事、2. 宇宙開発の現在の状況と文化人類学の接点を探るために様々な分野の研究者を招聘することを決定した。翌日はJAXAの大関恭彦氏による日本の宇宙開発の歴史と現状についての発表、これに対する議論を行った。第二回研究会では、JAXAの岸本明氏による衛星ナビゲーションシステムの現状についての報告、後藤明氏の天文人類学についての報告について討議した。第一回、第二回の議論を通し、(1) 宇宙開発が人類学者の様々なフィールドに影響を与えつつあることの共通理解、(2) 宇宙開発が直面する諸課題あるいは今後の課題について、これまでの人類学的知識が寄与しうる可能性の確認、(3) 人類学の「伝統的手法」インタビュー調査（オーラルヒストリー）、フィールドワークの有効性と科学技術人類学への展開の可能性が明らかになった。

核実験や原発事故による放射線影響を受けた社会については、人体や自然環境への影響に関する自然科学分野の研究、加害責任を明らかにする歴史学研究、放射線影響の基準を決定する政策学的研究、社会的影響を明らかにする社会学および人類学的研究などが蓄積されてきた。

しかしながら実際には、遺伝的疾患や食料に対する不安を訴える当事者の発言は「感情論」として切り捨てられ

る傾向にある。これまでの放射線影響に関する研究により、その不確実性が科学的に明らかにされてきたにも関わらず、実社会における被害対応や予防では、放射線影響の不確実性を生きる「生活者の視点」からの被害の理解は十分ではない。

そこで、本共同研究では、被害者の「当事者」としての「生きること」や「生活」の視点からの被害観の解明を目的とする。これまで個別に研究してきた人類学を中心として、医学、政治学、歴史学の学問分野と連携し、米国、マーシャル諸島、日本、太平洋を調査対象としたこれまで個別に行われてきた研究を統合・深化させる。

研究代表者 中原聖乃

班員 (館内) 林 勲男

(館外) 市田真理 猪瀬浩平 岡村幸宣 越智郁乃 間間 元 桑原牧子 小杉 世
島 明美 関 礼子 西 佳代 三田 貴

研究会

2015年10月24日

全員 自己紹介および研究概要発表

林 勲男 (国立民族学博物館)・中原聖乃 (中京大学) 研究会内容および趣旨説明

全員 成果発表に関する意見交換

2016年2月6日

中原聖乃 (中京大学) 「文化人類学が放射能汚染問題に果たす役割は何か？」

市田真理 (東京都立第五福竜丸展示館) 「第五福竜丸展示館の活動を通じた交流」

間間 元 (生協きたはま診療所) 「ビキニ核実験被害の医学的考察——これまでの問題整理」

2016年2月7日

西 佳代 (広島大学) 「グアムにおける放射能被害の実態」

談話会打ち合わせ、準備

談話会 「放射能汚染に立ち向かう——測定と生活の場から」(文化人類学学会課題研究懇談会災害の人類学との共催)

話題提供1 中原聖乃 (中京大学) 「マーシャル諸島核実験被害地のいま」

話題提供2 島 明美 (ふくみラボ) 「福島の生活と市民測定」

講演 青山道夫 (福島大学) 「海洋の人工放射能汚染の歴史——核実験および原子力発電所事故」

成果

今年度は2回の研究会を開催できた。

1回目の研究会は、問題意識の共有、研究会の進め方、成果発信について議論した。当初は、「当事者」を、直接的に被害をうけ、かつ生活している人を、「被害者」と定義していたが、討論により、自身も気づかない被ばくや放射能汚染との間接的な関わりをも明らかにするという、広い意味での「当事者性」について明らかにすることを確認した。また成果発信については論文集を軸として若者向けの放射線影響を考える冊子なども考慮し、広く社会に成果を還元することを確認した。また、メンバーのそれぞれが初対面であったことから、自己紹介に多くの時間を割いた。メンバーそれぞれの放射線影響研究や活動について、メンバー相互に確認できた。

また2回目は1日目の研究会、2日目のシンポジウムとも公開で行った。とりわけ2日目は25名の一般参加者とともに活発な議論が展開され、問題意識を社会と共有することができた。

「医療者向け医療人類学教育の検討——保健医療福祉専門職との協働」

少子高齢化、医療の高度・専門分化、患者の権利意識の変化等に伴い、保健医療福祉の現場では、医療者とクライアントあるいは多職種の間でのコミュニケーション不全の問題等、医療福祉系の個別の学問では対応しきれない複雑な課題が生まれている。これらの課題に日々直面する保健医療福祉専門職(以下、「医療者」)にとって、事象をその社会的文化的文脈の中で理解する視点、他者理解や自己相対化の視点を提供する医療人類学の知見の有用性は高く、医療者教育の現場でもその潜在的需要がある。また、医学教育では国際的な教育の質保証のため、今後5年程度の間には全国80大学が認証評価を受審するという動きがあり、その評価基準のなかで医療人類学も言及されている。こうしたなか、現代の日本の医療者を対象とした医療人類学教育のあり方を検討することは喫緊の課題であ

る。そこで本共同研究では、複数の職種の医療者との協働により、医療者を対象とした医療人類学教育のあり方を検討し、その教材を開発することを目的とする。

研究代表者 飯田淳子

班員 (館内) 鈴木七美 浜田明範 松尾瑞穂
(館外) 伊藤泰信 梅田夕奈 大谷かがり 工藤由美 辻内琢也 照山絢子 錦織 宏
濱 雄亮 星野 晋 堀口佐知子 吉田尚史

研究会

2015年11月7日

飯田淳子 (川崎医療福祉大学) 「趣旨説明」

星野 晋 (山口大学) 「医学校で教えてくれなかったこと」

濱 雄亮 (慶應義塾大学) 「医療人類学教育の実践報告——単科大学医学部における事例を中心に」

参加者全員 総合討論

2015年11月8日

飯田淳子 (川崎医療福祉大学) 「家庭医の症例検討会への参加を通じた協働の試み」

参加者全員 今後に向けて

2016年1月24日

工藤由美 (亀田医療大学) 「類似性の向こう側——看護学部／学科における文化人類学教育の経験から」

大谷かがり (中部大学) 「看護学 (師) は人類学を通して何をみたいのか」

参加者全員・総合討論

成果

初年度は医学生・医師・看護学生に対する (医療) 人類学教育の現状を検討した。「暮らしの現場のケア」の領域が拡大しつつあるなか、医療者にとってますます重要性を増していく社会科学的アプローチを習得するには、高学年次から卒後に社会・文化的課題を含む事例やシナリオを用いた学習を繰り返す必要があることが指摘された。共同研究会ではメンバーが行っているそのための具体的な実践例が報告され、人類学の概念からではなく、医療現場の事例から出発し、それらを人類学的視点や思考と接続させることの重要性が強調された。他方、人類学と一見親和性の高い看護などの領域でも、類似の言葉を使いながら別のことを指すなど、人類学との接続点を見出しにくいことも多い。しかし人類学者は医療者の前提や目的、立場を十分に理解し、また、医療者に伝わる言葉で自らの営みや考え方について説明を行い、対話を通じて協働していくことが重要である。

「個—世界論——中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム」

中東は、古来より多様な人々が民族、宗教、言語の違いを超えて離合集散と交渉を繰り返してきた巨大な交流圏の一つである。この圏域では人名、地名、出来事で満たされたりフラと呼ばれる旅行記が精力的に産出されてきたが、固有名への強い関心は日常生活・会話の中でも広く見受けられ、人々の生活を基礎づける重要な関心の持ち方であると想定される。このような関心の広がりや、中東を基点として広がる世界において、生身の個人という存在と移動という経験、未知なる人・場・情報との遭遇こそが、世界を形成・構想するうえでの根幹と見なされてきたことを示唆する。

本研究は、中東を一つの基点として活躍する具体的個人に焦点を定めて、彼らの人・場・情報との出会い・交渉・関係の形成はいかにして実現されているのか、超地域的な人・物・知の交流とミクロな生活の場の形成とがどのように関連しているのかを探求することを通じて、個人が織りなす世界の特質を解明しようとするものである。

研究代表者 齋藤 剛

班員 (館内) 西尾哲夫
(館外) 宇野昌樹 大坪玲子 奥野克己 小田淳一 荻谷康太 佐藤健太郎 椿原敦子
鳥山純子 堀内正樹 水野信男 嶺崎寛子

研究会

2015年10月17日

齋藤 剛（神戸大学）「個－世界論——問題提起Ⅰ」

2015年10月18日

西尾哲夫（国立民族学博物館）「アラブ世界の言語社会的位相と個人空間の再世界化」

2016年1月23日

齋藤 剛（神戸大学）「個－世界論——問題提起Ⅱ」

大坪玲子（東京大学）「カートを通して見える世界」

2016年1月24日

椿原敦子（国立民族学博物館）「ふたつの「個人主義」？——テヘランとロサンゼルスから考える」

成果

共同研究の初年度（2015年10月～2016年3月）は、研究班で共有すべき問題意識、論点、方向性を確認することに務めるのと同時に（齋藤Ⅰ、西尾発表）、イスラーム世界、民衆イスラーム論、イスラーム経済論、個人主義などの既存の分析枠組み、理論、概念の問題点を具体的な事例報告を通じて明らかにした（西尾、齋藤Ⅱ）、大坪、椿原発表）。

西尾の議論は、日本における近年のイスラーム理解の問題点を手がかりとして、アラブ世界、イスラーム世界の捉え方が西洋諸社会、日本社会、当事者たるムスリムたちの間で曖昧であることを、言語社会的位相から多角的に照射するものであった。

イエメンにおけるカート研究を進めて来た大坪は、自身の研究を踏まえて、日本国内における「イスラーム経済論」の問題点を明らかにした。イスラーム経済論は、キリスト教、仏教をはじめとするイスラーム以外の宗教における商業、経済の捉え方を通覧し、商業に肯定的な宗教としてイスラームを捉える視点を打ち出したものである。大坪は、イスラーム経済論が依拠する文献、原典の再検討を通じて、イスラーム経済論が資料の恣意的な解釈に基づいて成り立っていることを明らかにした。

椿原は、イラン本国およびロサンゼルス在住イラン人のコミュニケーション、社会関係形成プロセスの検証などを通じて、ペルシャ語において個人主義を意味する「イェクターギャリー」という民俗語彙の意味内容と、個と組織（化）をめぐるイラン人の理解の特質を明らかにした。

この他にも、共同研究会における議論を踏まえて、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「現代中東地域研究」のキックオフ・国際シンポジウムとして、「中東における「民衆文化」の編成と「民衆」概念の再検討」を2016年2月27日に、国立民族学博物館で開催した。同シンポジウムには、共同研究班から、齋藤、大坪、鳥山、椿原、西尾が発表者として参加したほか、嶺崎、水野がコメンテーターを、堀内、奥野、宇野が司会をそれぞれ担当し、共同研究の国際発信として基幹プロジェクトに全面協力した。

「確率的事象と不確実性の人類学——『リスク社会』化に抗する世界像の描出」

不確実な未来に人間がどう向き合うのかは、伝統社会を対象に、近代的・科学的な形式知では説明がつかない様々な生活実践を扱ってきた人類学において、重要な関心領域を形成してきた。一方で、社会学で台頭してきた「リスク社会」の議論は、学問分野の枠を超えて、人類学にも大きな影響力を与えている。近年の人類学では、「リスク社会」論をもとに、確率的事象を数量的に捉えて管理の対象とする「リスク」と、リスク計算による管理が困難な「不確実性」とを区別し、今日の社会・経済・政治的諸制度が後者の領域をも制御しようとする営為を、新たな考察対象としている。

しかし、上記の二分法的な不確実性の理解は、確率的事象の二面性を把握し切れていないと、本研究は考える。すなわち、集合的・統計的には計算可能で制御の対象とし得るが、一回限りの生起においては根源的な制御不可能性が露わになる。本研究はその両面に目を向けて、リスク管理の技術に依拠した諸制度の設計や人間の取扱いと、個人の認識や実践との間に生じる深刻なずれを、考察の主題にする。その上で、人類学的「不確実性」研究の考察視角を拡張することにより、既存の「リスク社会」論の俎上に載らない「リスク社会」の姿を描き出す。

研究代表者 市野澤潤平

班員（館内）飯田 卓

（館外）東賢太郎 阿由葉大生 碓 陽子 井口 暁 磯野真穂 牛山美穂 近藤英俊

土井清美 松田素二 吉直佳奈子 渡邊日日

研究会

2015年11月14日

市野澤潤平（宮城学院女子大学）「研究会の趣旨説明」
碓 陽子（金沢大学）「人類学におけるリスクと不確実性にかんする理論的サーベイ」
土井清美（青山学院女子短期大学）、吉直佳奈子（東京大学）「書評および理論的検討『リスクの人類学：不確実な世界を生きる』世界思想社、2014年」

2015年11月15日

全 員 「各自の研究紹介及び研究会の理論的方向性の検討」

2016年2月6日

近藤英俊（関西外国語大学）「偶然と必然のあいだを生きる：苦境に関する一考察」
市野澤潤平（宮城学院女子大学）「ワイルドライフ・ツーリズムの賭博性」

2016年2月7日

井口 暁（京都大学）「社会学におけるリスクと不確実性にかんする理論的サーベイ」
全 員 「各自の研究紹介及び研究会の理論的方向性の検討」

成果

2015年度は、2回の研究会を開催した。第1回目は、個々の研究者の関心領域を共有し、議論の共通基盤を作ることに費やした。具体的には、一人15分程度の個人発表と、申請代表者市野澤潤平と碓陽子による「リスクと不確実性の人類学」についての研究レビュー発表を行った。また、本研究会が過去の民博共同研究「リスクと不確実性、および未来についての人類学的研究」（代表：東賢太郎）の土台のもとに企画されていることから、同共同研究の成果出版である『リスクの人類学：不確実な世界を生きる』（2014年、世界思想社）の批判的レビューを行い（土井清美および吉直佳奈子）、新たな課題と今後の見通しを整理した。

第2回目は、不確実性に向けた視野を出来るだけ拡大し、論点を模索するという意図のもと、異なる角度から「偶然」を論じる二つの事例発表を行った（市野澤潤平および近藤英俊）。同時に、社会学者の井口暁が、社会学における不確実性とリスク関連理論の議論を整理し、人類学と社会学における議論との違いや類似点、議論が足りない領域などを検討した。

「高等教育機関を対象にした博物館資料の活用に関する研究」

近年、日本の高等教育機関では、大学教員の教育能力の向上が推進されており、個々の大学で大学教育の改革（Faculty Development、以下、FD）が行われている。特に、大学教員を対象としたワークショップでは、学生主体の学びの開発が重視されていることから、学習教材の一つとしてモノ資料が見直されつつある。しかしながら、大学教員による博物館の利用は、展示見学にとどまっており、モノ資料による思考のあり方を検討するまでには至っていない。

そこで、本共同研究では、大学教員が博物館という「場」に足を運ぶ機会を提供し、モノ資料に触れ、それを活用した教育実践を、博物館関係者を交えて議論し、高等教育機関と博物館の連携による、より創造的な教育の可能性について検討を試みる。このような取り組みを通して、モノ資料を用いたFDの発展的貢献を図るとともに、大学と博物館とのアクセス回路の構築および高等教育機関における博物館資料の積極的な活用を目的としている。

研究代表者 呉屋淳子

班員（館内）金田純平 河合洋尚 末森 薫 吉岡 乾
（館外）稲澤 努 黒田賢治 五月女賢司 坂本 昇 時任準平 如法寺慶大 横山佐紀
吉田早悠里

研究会

2015年11月21日

呉屋淳子（山形大学）「共同研究会の趣旨説明」
全員 研究員メンバー自己紹介

全員 各会の発表者の調整

2015年11月22日

呉屋淳子（山形大学）「高等教育機関における博物館資料の活用——みんぱっくの活用例」

稲澤 努（尚絅学院大学）「フィールドワーク演習の講義における博物館資料の活用——みんぱっくの使用方を学ぶ」

展示場の解説（中国・朝鮮半島・沖縄）河合洋尚、呉屋淳子（南アジア）吉岡乾（ビデオテーク）金田純平

成果

初年度は、1回の研究会を2日間に分けて開催した。まず、代表者である呉屋がプロジェクトの趣旨説明および問題提起を行い、メンバーのおおまかな役割と研究会の進め方について説明した。とくに、本研究会は「博物館と高等教育機関」の接合を議論の中心に据えていることから、専門分野が異なるメンバーで構成されている。そのため、各メンバーの興味関心を考慮したプロジェクトの進め方を示し、成果公開の方法についてメンバー間で意見交換を行った。次に、メンバー2名による博物館資料を活用した実践事例の報告を行った。報告もとに議論したあと、今後は、各自のプロジェクトの発展にむけた建設な議論を行うためにも、博物館と高等教育機関の連携の意義を明確に示し、よりインタラクティブな学びの可能性を探求する試みをメンバー間で連携して本研究を進めていくことを話し合った。

人間文化研究総合推進事業

「驚異と怪異の表象——比較研究の試み」(Images of the marvelous and uncanny: a comparative study) ——

代表者：山中由里子

目的

本連携研究は、申請者が代表を務めた共同研究「驚異譚にみる文化交流の諸相——中東・ヨーロッパを中心に」と国際日本文化研究センターの小松和彦教授が率いてきた共同研究「怪異・妖怪文化の伝統と創造——研究のさらなる飛躍に向けて」の成果を対照させ、未知なるものをめぐる思考様式の地域性や時代性を浮かびあがらせ、伝承やイメージの東西伝播を明らかにしようとするものである。機構連携展示としての特別展の開催を成果の一つとすることを視野に入れつつ、特に驚異・怪異の表象物（挿絵・絵画、民族資料、珍品・からくり、博物標本など）に焦点をあてる。

中東とヨーロッパという一神教世界における驚異にある程度の共通性があるとしたら、中国の『山海経』あるいは『日本霊異記』のような「怪異譚」とは、またどう違うのか、といった問題に取り組む。

研究の成果

1) 研究成果の概要

報告者が代表を務めた科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究」（2010-2014）と、共同研究「驚異譚にみる文化交流の諸相——中東・ヨーロッパを中心に」（2010.10-2014.3）を連携させて行った調査・報告・討論の成果を、『<驚異>の文化史——中東とヨーロッパを中心に』（名古屋大学出版会、2015年）として編集し刊行した。本書の序章や終章において、本連携研究の枠組みにおいて開催した研究フォーラムでの議論を反映させ、驚異と怪異の比較研究の可能性について考察した。

本書は、比較文学、比較文明学、東西文化交流史、妖怪・怪異学など、様々な分野の研究者から注目を浴び、横山泰子「小人島はどこにあるのか」『文学』（2015年11・12月号）など、怪異研究者の論文において引用されている。12月18日付『週刊読書人』の2015年回顧欄、さらに12月27日付の朝日新聞の「今年の3点」の欄でとりあげられ、社会的にもインパクトを与えている。

2) 著作物名

山中由里子（編）『<驚異>の文化史——中東とヨーロッパを中心に』名古屋大学出版会、2015、528頁

3) 論文名

山中由里子「驚異を媒介する旅人」東アジア怪異学会編『怪異を媒介するもの』（アジア遊学）勉誠出版、2015、pp.287-292

山中由里子 「想像の地理と周縁の民族——女人族伝承の東西伝播」山中由里子編、『《驚異》の文化史——中東とヨーロッパを中心に』名古屋大学出版会、2015、pp.256-273

4) 研究会・シンポジウム等

- 2015年9月15日 Yuriko Yamanaka, “Alexander and the Wonders of the World in Ṭūsī’s ‘Ajā’ib al-makhlūqāt,” エルミターージュ美術館、サンクト・ペテルブルグ
- 2015年11月1日 山中由里子「比較怪物命名学——驚異と怪異の名づけと形象化」国際シンポジウム「東の妖怪・西のモンスター」学習院女子大学
- 2016年1月24日 山中由里子「〈驚異〉としての古代——アジャーイブ文学におけるアレクサンドロス」ワークショップ「中世イスラーム世界から見た古代」筑波大学東京キャンパス
- 2016年2月13日 山中由里子「海賊商品としての人魚のミイラ」シンポジウム「海賊・山賊・馬賊・愚連隊：無法者 outlaw の社会史にむけて」国際日本文化研究センター

5) データベース等の公開

ウェブサイト「驚異怪異」をみんなく HP において公開する。

<https://www.r.minpaku.ac.jp/ajaba/index.html>

本機構連携研究開始以前からすでに日文研で立ち上げられているものとして、「怪異妖怪伝承データベース」が挙げられる。<http://www.nichibun.ac.jp/YoukaiDB/>

人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」

人間文化研究機構は、わが国にとって学術的、社会的に重要な意義を有する地域の文化、社会を総合的に理解、解明するため、関係大学・機関と協力して2006年度から「地域研究推進事業」を開始した。本事業は、機構が関係大学・機関と研究拠点を共同設置し、拠点間のネットワークを構築して研究を推進する方式の研究事業である。2006年度から「イスラーム地域研究」事業、2007年度からは「現代中国地域研究」が始められているが、これに加え2010年度より「現代インド地域研究」事業が開始された。

「現代インド地域研究」事業においては、京都大学を中心拠点とし、これに東京大学、広島大学、東京外国語大学、龍谷大学、および国立民族学博物館の5拠点が加わってネットワーク型の研究推進が図られている。

以下では「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点の2015年度の事業概要を記載する。

【拠点の整備】

① 拠点運営会議の実施

毎月1回の頻度で拠点運営会議を開催し、拠点の事業推進のための企画立案やその推進にあたった。

また、拠点の研究成果公開の一環として実施した国立民族学博物館南アジア展示場の新構築後の社会連携事業の企画や運営に関しても意見交換を行った。

② 国際的共同研究の基盤整備と推進

2010年度にエジンバラ大学南アジア研究センターと締結した研究交流のための覚書に基づき、同センターと協力してRoutledge社から刊行する予定の叢書の編集作業を行った。国立民族学博物館拠点はこの事業の交渉窓口としての役割を果たし、2015年度は英文論文集を2冊刊行した。

また、今後も国際的な共同研究を推進するため、上記研究センターとの研究交流の覚書を2015年5月に更に5年間を目途として更新した。さらに、新しい交流協定を締結するための交渉をデリー大学社会学部との間で進める一方、今期のプロジェクトで構想している国際南アジア研究センター・コンソーシアムの構築に関して研究者をオランダ、スウェーデン、タイ、ベトナム、韓国などに派遣して、各地の南アジア研究センターに関する情報収集を行い、派遣先の南アジア研究者と意見交換を行った。

③ 拠点ホームページの運用と整備

拠点独自のホームページを運用して拠点の研究活動に関する情報発信を継続した。特に2015年4月に発生したネパール大地震後には、このホームページをポータルサイトとして震災復旧・復興に関わる団体や震災後の社会状況に関するレポートや研究情報のリンクページを作り、情報提供を行った。

一方、英語ページの改善を行い、英語での情報発信にも努めた。

④ インド研究アーカイブ資料の整備

1970年代からインド各地の祭礼や民俗芸能、絵画等に関する写真撮影を行ってきた写真家沖守弘氏の写真資料と写真取材に関連する文書資料を一括して受け入れデジタル保存し、広く研究用に公開するためのデータベースを作成する作業を行った。この作業は2013年度より継続してきたが、今年度中にデジタル化と情報整理を終え、データベースの設計も行って、2016年3月にとりあえず国立民族学博物館の館内用データベースとして公開を行った。今後更に情報内容の点検を行い、2016年度中に一般公開し、さらに英語での検索や情報提供も行えるよう改良を加える計画である。

【拠点の活動と成果】

(1) 拠点全体としての活動

① 現代インド地域研究全体国際シンポジウム

日時：2015年12月19日(土) 9:00~19:50

2015年12月20日(日) 9:30~15:30

場所：国立民族学博物館 2階第5セミナー室

題目：第7回INDAS全体国際シンポジウム “Structural Transformation in Globalizing South Asia: Comprehensive Area Studies for Sustainable, Inclusive, and Peaceful Development”

プログラム：

DAY 1 - December 19 (Sat.)

9:30-10:00 Registration

10:00-10:15 Opening Addresses

Narifumi Tachimoto (President, National Institutes for the Humanities)

Koichi Fujita (Convener, INDAS)

Session 1 10:25- Sustainable Development

Chair: Koichi Fujita (Kyoto University)

10:30-10:50 K. Palanisami (International Water Management Institute, India)

“Climate Change and Rice Yields: Analysis of the Impact and Adaptation Strategies in 13 Major Rice Growing States of India”

10:50-11:10 Daizo Sugimoto (Meijo University)

“Impact of Groundwater Depletion on Punjab Agriculture”

11:10-11:30 Atsushi Fukumi (University of Hyogo)

“Power-Sector Reform in India: Current Status and Issues”

11:30-11:45 Tea Break

11:45-12:05 Takahiro Sato (Kyoto University)

“Livelihood Transformability in Villages with Poor Water Resources in India: The Case of Tamil Nadu”

12:05-12:25 Kazuya Wada (University of Nagasaki)

“Demographic Change and Women’s Status in India”

12:25-13:05 Comments

Ramesh Chand (National Institution for Transforming India, NITI Aayog, Government of India)

Kaoru Sugihara (National Graduate Institute for Policy Studies)

Kohei Wakimura (Osaka City University)

13:05-13:30 General Discussion

13:30-14:30 Lunch

Session 2 14:30- Inclusive Development

Chair: Hidenori Okahashi (Hiroshima University)

14:30-15:00 Kazuo Tomozawa (Hiroshima University)

“Has the Indian Automobile Industry Achieved ‘Inclusive Development’ of Employment?: Focusing on Contract-Based Workers in the State of Haryana”

- 15:00-15:30 R. B. Singh (University of Delhi, India)
 “Sustainable, Inclusive and Peaceful Urban Development through Smart Cities in India: Challenges and Vision”
- 15:30-15:45 Tea Break
- 15:45-16:15 Maya Suzuki (Tokyo University of Foreign Studies)
 “Exclusivity Rather than Inclusion: Dalit Assertion in Contemporary Urban India”
- 16:15-16:45 Janaki Nair (Jawaharlal Nehru University, India)
 “The Real ‘Brain Drain’: Schools and the Experience of Democracy in Contemporary India”
- 16:45-17:00 Tea Break
- 17:00-17:20 Comments
 Etsuro Ishigami (Fukuoka University)
 Toshie Awaya (Tokyo University of Foreign Studies)
- 17:20-18:00 General Discussion
- 18:20-19:50 Reception at the Minpaku Restaurant
- DAY 2 – December 20 (Sun.)
- 9:30-10:00 Registration
- Session 3 10:00- Peaceful Development
 Chair: Minoru Mio (National Museum of Ethnology)
- 10:00-10:30 Akihiko Akamatsu (Kyoto University)
 “Doxography and Perspectivism in Pre-Modern India: How is it possible to be neutral?”
- 10:30-11:00 Anna Bigelow (North Carolina State University, USA)
 “Pious Pluralism: The Culture of Multireligious Shrines in India”
- 11:00-11:15 Tea Break
- 11:15-11:45 Raheel Dhattiwala (University of South Australia, Australia)
 “Next-Door Strangers: Explaining ‘Neighbourliness’ between Hindus and Muslims in a Conflict Setting”
- 11:45-12:15 Takenori Horimoto (The Open University of Japan)
 “India’s Thucydides Trap?”
- 12:15-12:30 Tea Break
- 12:30-12:50 Comments
 Katsuyuki Ida (Kanazawa University)
 Kazuya Nakamizo (Kyoto University)
- 12:50-13:30 General Discussion
- 13:30-14:30 Lunch
- 14:30-15:30 Concluding Discussion
 Chair: Minoru Mio (National Museum of Ethnology)

概要：第2期の現代インド地域研究プロジェクトのキックオフ・シンポジウムを副中心拠点として主催した。第2期プロジェクトの冒頭にあたる本シンポジウムでは、プロジェクト全体のテーマをシンポジウムじたいのテーマとして掲げ、3つのサブテーマ、すなわち南アジアの持続的・包括的・平和的發展の3点を焦点としたパネルを設定した。パネルごとに国内・国外の研究者を招聘して（国外のうちK. Palanisami教授とAnna Bigelow教授はスカイプによる参加）、その現状と今後追究すべき課題について発表と討論を行い、最後の全体討論でプロジェクト全体として考えるべき問題点やプロジェクトの方向性に関して意見交換を行った。両日ともに70名を超える参加者があり、皮切りに相応しい討論が行われた。

この成果は2016年度中に英文論文集として出版する一方、今後サブテーマごとに毎年開催される国際シンポジウムの企画や討論にも生かしてゆく計画である。

② 研究公演「時を超える南インドの踊り」

日時：2015年11月22日 13:30~16:00

場所：国立民族学博物館講堂

出演：ナルタキ・ナタラージ、K. パールッタサーラティ、カクシク・チャンバケーサン、M. ダナムジャヤン、

シャクティ・バスカル

解説：寺田吉孝（国立民族学博物館先端人類科学研究部・教授）

概要：本研究公演は、南インドのヒンドゥー寺院で行われた奉納舞踊を起源とし、1930年代に舞台芸術として生まれ変わった舞踊ジャンルであるバラタナーティヤムに焦点をあてたものである。バラタナーティヤムの誕生には、カラクシェトラとよばれる音楽・舞踊学校が中心的な役割をはたしたことからこの学校で考案されたスタイルが舞踊界の主流となったが、この変化のなかで寺院舞踊の伝統を引き継ぐ舞踊家たちは活躍の場を失っていった。本公演では、現在でも寺院舞踊のスタイルを伝える舞踊家ナルタキ・ナタラージの演技を通じて、インド舞踊文化の多様性を紹介した。

(2) 研究グループの活動

拠点研究会を合計3回開催した。今年度は、国立民族学博物館拠点が独自に出版を計画している、拠点の成果報告論文集の出版をめざして拠点の構成員や拠点の研究分担者・協力者がこのプロジェクトにおいて行った各自の研究成果を発表した。

各回の研究会の発表者と題目は下記の通り。

① 国立民族学博物館拠点第1回合同研究会

日時：2015年7月11日（土）15：00～17：00

2015年7月12日（日）11：00～16：00

場所：国立民族学博物館2階第6セミナー室（11日）、同第5セミナー室（12日）

プログラム：

書評①：小西公大（東京学芸大学教育学部・准教授）

書評②：橋 健一（立命館大学産業社会学部・非常勤講師）

② 国立民族学博物館拠点第2回合同研究会

日時：2015年11月23日（月）10：00～13：00

場所：国立民族学博物館2階・第3セミナー室

プログラム：

報告1：大谷紀美子（相愛学園学園長）“Stylistic differences in Bharatanatyam, a classical dance form of India”

報告2：竹村嘉晃（人間文化研究機構・地域研究推進センター研究員）“Evolution of Bharatanatyam and multiculturalism in Singapore”

③ 国立民族学博物館拠点第3回合同研究会

日時：2016年2月13日（土）14：00～18：20

場所：国立民族学博物館2階第7セミナー室

報告：杉本良男（現代インド地域研究国立民族学博物館拠点副代表、国立民族学博物館民族文化研究部・教授）

「南インドの農村の三十年」

コメンテーター：八木祐子（宮城学院女子大学・教授）

高桑史子（首都大学東京・名誉教授）

脇村孝平（大阪市立大学・教授）

【海外調査】

拠点の研究メンバーをのべ15回インド、ベトナム、タイ、インドネシア、シンガポール、ネパール、バングラデシュ、アメリカ、カナダ、イギリス、フランス、オランダ、スウェーデン等に派遣し、海外現地調査や学会等での研究成果発表や意見交換にあたらせた。派遣先やテーマの詳細は下記の通り。

① インドネシアにおけるヒンドゥー教的実践の展開の調査

出張期間：2015年7月18日～2015年7月26日

出張先（インドネシア）：メダン、スラバヤ

出張者：山下博司（東北大学大学院国際文化研究科・教授）

② インドにおける大衆的ヒンドゥー教の動態に関する調査

出張期間：2015年8月18日～2015年8月27日

出張先（インド）：ウダイプル

- 出張者：三尾 稔（国立民族学博物館研究戦略センター・准教授）
- ③ インド音楽・舞踊のグローバリゼーションの調査
出張期間：2015年9月5日～2015年9月15日
出張先（オランダ、フランス）：アムステルダム、パリ
出張者：田森雅一（東京大学大学院総合文化研究科・学術研究員）
- ④ 研究発表及び意見交換
出張期間：2015年10月15日～2015年10月24日
出張先（シンガポール）：シンガポール
出張者：竹村嘉晃（人間文化研究機構地域研究推進センター・研究員）
- ⑤ 国際南アジア研究センター・コンソーシアム構築に向けた機関訪問
出張期間：2015年10月18日～2015年10月25日
出張先（オランダ、スウェーデン）：ライデン、ルンド
出張者：三尾 稔（国立民族学博物館研究戦略センター・准教授）
- ⑥ 国際南アジア研究センター・コンソーシアム構築に向けた機関訪問
出張期間：2016年1月6日～2016年1月13日
出張先（ベトナム、タイ）：ハノイ、バンコク
出張者：井坂理穂（東京大学教養学部・准教授）
- ⑦ 出身地の異なる在米ゾロアスター教徒の比較調査
出張期間：2016年1月8日～2016年1月18日
出張先（アメリカ）：ロサンゼルス
出張者：香月法子（中央大学政策文化総合研究所・準研究員）
- ⑧ ヒンドゥー教聖地の歴史の変容に関する文献調査
出張期間：2016年1月14日～2016年1月21日
出張先（イギリス）：ロンドン
出張者：松尾瑞穂（国立民族学博物館先端人類科学研究部・准教授）
- ⑨ ネパールにおけるインド系宗教団体の宗教実践の展開に関する調査
出張期間：2016年1月22日～2016年1月24日
出張先（ネパール）：カトマンドゥ
出張者：三尾 稔（国立民族学博物館研究戦略センター・准教授）
- ⑩ カナダにおけるバンジャープ系移民の調査
出張期間：2016年1月31日～2016年2月7日
出張先（カナダ）：トロント市郊外ミッシサウガ
出張者：東 聖子（早稲田大学人間科学学術院・助教）
- ⑪ タイにおけるバングラデシュ系移民の調査
出張期間：2016年2月14日～2016年2月29日
出張先（タイ、バングラデシュ）：バンコク、チッタゴン
出張者：高田峰夫（広島修道大学人文学部・教授）
- ⑫ インドにおける日本製タイルの受容のプロセスに関する調査
出張期間：2016年2月15日～2016年2月28日
出張先（インド）：デリー、ムンバイ、グジャラート州ワーンカーネールおよびモールビー
出張者：豊山亜希（人間文化研究機構地域研究推進センター・研究員）
- ⑬ 研究発表及び意見交換
出張期間：2016年2月23日～2016年2月28日
出張先（インド）：デリー
出張者：三尾 稔（国立民族学博物館研究戦略センター・准教授）
- ⑭ インドにおける宗教と国家の関係の特徴と変遷に関する文献調査
出張期間：2016年3月7日～2016年3月22日
出張先（イギリス）：ロンドン
出張者：田中鉄也（日本学術振興会・特別研究員 PD）

- ⑮ 国際南アジア研究センター・コンソーシアム構築に向けた機関訪問
出張期間：2016年3月9日～2016年3月12日
出張先（韓国）：ソウル
出張者：三尾 稔（国立民族学博物館研究戦略センター・准教授）

【研究資料の整備】

1970年代からインド各地の祭礼や民俗芸能、絵画等に関する写真撮影を行ってきた写真家沖守弘氏の写真資料と写真取材に関連する文書資料を一括して受け入れデジタル保存し、広く研究用に公開するためのデータベースを作成する作業を行った。この作業は2013年度より継続してきたが、今年度中にデジタル化と情報整理を終え、データベースの設計も行って、2016年3月にとりあえず国立民族学博物館の館内用データベースとして公開を行った。今後更に情報内容の点検を行い、2016年度中に一般公開し、さらに英語での検索や情報提供も行えるよう改良を加える計画である。

日本関連在外資料調査研究

「ロシアと北欧における日本関連アジア資料の調査研究」

代表者：佐々木史郎

目的

ロシアは18世紀から20世紀にかけて、領土拡大に伴い組織的に標本資料と情報を収集してきた。それらの資料は、きわめて良質で歴史的な価値を有する民族誌資料として、処分されずに保存されてきた。しかし、一部は展示公開されているものの、全容はまだ明らかではない。当時ロシアの影響下にあった北欧（バルト諸国を含む）各地にも、部分的な概要しか判明していない日本の美術工芸資料や、民族学・生物学関連の標本資料が種々存在している。

日本を含むシベリアから中国までの東アジア全域に関する各種の標本資料、映像記録、民族誌などについて、ロシアをはじめとする各国の関係諸機関と連携をはかり、資料の所在関係を明確化し、重要かつ貴重な資料については、各国の研究機関と連携した共同研究により、保存状況を含めて調査分析を進める。

コレクションを所蔵する関係諸機関と組織的に協定を締結し、国際的な協業により貴重資料を中心に所在関係を明らかにすることが目的である。その結果、世界的に有意義な研究インフラストラクチャーの整備が進む。このことは、日本研究のみならず、東アジア研究全体に対して日本が貢献し、イニシアティブを示すことに他ならない。

成果

- 1) ロシア、サンクトペテルブルクの人類学民族学博物館所蔵の長崎商館員オーベルメール・フィッセル収集資料に関する解説文と論文を英語とロシア語で作成した。
- 2) 人類学民族学博物館所蔵のオーベルメール・フィッセル資料の図録を完成させた。
- 3) フィンランド、エストニア、デンマークの民具類を中心とした日本資料を所蔵する博物館のリストを英訳することで、本館と各博物館との間でのデータの共有を促進し、双方が資料情報により容易にアクセスできるようになった。それにより、その情報には日本側が調査することで付加されたものも含まれており、博物館資料の情報の充実も図られている。

研究成果公開プログラムによる館のシンポジウム、研究フォーラム、国際研究集会への派遣

●館のシンポジウム

「How Biomedicines Shape Life, Sociality and Landscape in Africa.」

2015年9月25日～9月27日 国立民族学博物館

代表者：浜田明範、松尾瑞穂

本シンポジウムの開催によって期待される成果は、以下の2点である。

まず、アフリカ地域において、比較的新しく導入された生物医療が人びとの生活の前提の一部をどのように構成し、彼らの生活をどのように改変しているのかを問うことは、医療人類学の枠を超えて、グローバル化の進む現代におけるアフリカ地域の現状を理解するためのひとつの方法を打ち出すものとなりうる。

次に、グローバルヘルスは、本来的に脱領域的な分野であり、医学や疫学、看護学、生命科学といった理科系の分野に加え、医療人類学者が開発的・応用的な視野をもって参与している領域でもある。そのようなグローバルヘルスについての国際シンポジウムを開催することで、今後、日本において人類学と上記の諸科学との対話と連携を進めていくための一助とすることができる。

実施状況

近年、英語圏を中心にアフリカ地域の人びとの生活に生物医療がどのような影響を与えているのかを問う研究が増加している。特に2000年代後半以降は研究量が著しく増加しており、2008年から2015年までの間に少なくとも6冊の英語の論文集が出版されている。

本シンポジウムでは、この分野を世界的に主導しているオスロ大学のウェンゼル・ガイスラー教授とルース・プリンス准教授を招聘し、また、日本国内で活動する10名のアフリカ研究者と合わせて12本の研究発表を行った。本シンポジウムには、これに、6名の文化人類学者・医療人類学者をコメンテーターや司会として招聘することで、活発な議論を行った。

成果

日本で活動する多くの研究者にアフリカ地域を対象とする医療人類学の最先端の研究に直に触れる機会を提供するとともに、日本の医療人類学者による成果を世界的に発信する足がかりを築くことができた。また、シンポジウムの発表者8名のうち3名が30代であることや、当初予定していなかった大学院生向けのワークショップを25日に実施することによって、特に若手の研究者の育成に資するものとなった。

本シンポジウムの研究成果は、英語による論文集の出版（本館のSES）を予定している。また、本シンポジウムの内容は、日本文化人類学会課題研究懇談会「医療人類学教育の検討」のwebページに掲載する予定である。

公開シンポジウム「ユニバーサル・ミュージアム論の新展開——展示・教育から観光・まちづくりまで」
2015年11月28日～11月29日 国立民族学博物館
代表者：廣瀬浩二郎

本シンポジウムの目的は、2012～2014年度に行なった共同研究「触文化に関する人類学的研究」の成果を一般に公開することである。共同研究プロジェクトでは、「ユニバーサル・ミュージアム＝視覚に依存する従来の博物館、さらには現代社会のあり方を問い直す壮大な実験装置」と定義している。そのようなユニバーサル・ミュージアムを具体化するために、「触文化」に注目してきた。

シンポジウム1日目は、各地の美術館・博物館で試みられている展示、教育プログラムの事例を報告する。これまで、触察による鑑賞は主に三次元の立体物を対象としてきたが、本シンポジウムでは視覚障害者が二次元の絵画作品を触学・触楽するさまざまな手法を提示し、ユニバーサル・ミュージアム論の深化を検証したい。

2日目は、博物館の枠にこだわらず、自由な発想で企画される触発型ワークショップの諸相、および五感を駆使して「誰もが楽しめる」観光・まちづくりをめざす先進的な取り組みを紹介する。ユニバーサル・ミュージアム研究により鍛えられた触文化概念を他分野に応用し、その普遍性を明らかにするのが2日目の課題である。

触文化理論の各方面への伸展は、「感覚の多様性」が尊重されるミュージアムの未来像、障害／健常という二分法を乗り越える新たな人間観の提案につながるだろう。

実施状況

本シンポジウムでは手話通訳を導入した。取り上げるテーマの学術的・社会的意義を踏まえ、質の高い手話通訳士の派遣に向けて、業者と交渉を重ねた。専門的な手話通訳を確保するためには、英語通訳などの場合と同様に、相応の費用を必要とした。なお、本シンポジウムには発表者・一般参加者として、複数の視覚障害者・聴覚障害者が来場した。

成果

本シンポジウムは、共同研究「触文化に関する人類学的研究」の成果を公開する事を目的として実施した。2日間に渡って研究者、学芸員、アーティストなどが集い、「深める」と「伸ばす」をキーワードとして、ユニバーサル・ミュージアム（誰もが楽しめる博物館）の可能性について、多角的に考えた。1日目は、各地の美術館・博物

館で試みられている展示、教育プログラムの事例を報告した。単なる視覚障害者支援にとどまらず、ミュージアムそのもの、ひいては社会を改変していく触文化の実践的研究を推進するのが、1日目の発表者を貫く基本スタンスといえる。これまで、触察による鑑賞は主に三次元の立体物を対象としてきたが、本シンポジウムでは視覚障害者が二次元の絵画作品を触学・触楽するさまざまな手法を提示し、ユニバーサル・ミュージアム論の深化を確認・検証した。2日目は、博物館の枠にこだわらず、自由な発想で企画される触発型ワークショップの諸相、および五感を駆使して「誰もが楽しめる」観光・まちづくりをめざす先進的な取り組みを紹介した。触文化・“手学問”概念を他分野に応用して、その普遍性を明らかにするのが2日目の狙いだった。本シンポジウムを通じて、触文化・“手学問”理論の各方面への伸展は、「感覚の多様性」が尊重されるミュージアムの未来像、障害／健常という二分法を乗り越える新たな人間観の提案につながることを確信した。その手応えを参加者が共有できたのは有意義だった。

●国際研究集会への派遣

「国際学会での研究発表：2nd Kashmir International Conference on Linguistics」

2015年5月1日～5月7日 Azad Jammu and Kashmir 大学（パキスタン）

吉岡 乾

2015年5月4日～5日にパキスタンのAzad Jammu and Kashmir 大学（Azad Jammu and Kashmir 州 Muzaffarabad）で開催される2nd Kashmir International Conference on Linguisticsで研究発表をする。

今回で2回目のこの大会は、パキスタンで開催される数少ない言語学関係の学会であり、南アジアの、特にパキスタンの、言語を研究している者にとっては、人脈を広げる絶好の機会でもある。申請者の発表テーマは“On the Copulae of Languages in Northern Pakistan”。本発表は、申請者がこれまでに現地調査を行って来た8言語（カティ語、カラーシャ語、コワール語、シナー語、ドマーキ語、ブルシャスキー語フンザ方言、ナゲル方言、ヤスイン方言）を対照し、それぞれの言語でのコピュラ（be動詞）の体系の特徴を調べ、地域特徴や系統特徴を明らかにすることを目的としている。

実施状況

パキスタンのAzad Jammu and Kashmir 大学（Azad Jammu and Kashmir 州 Muzaffarabad 市）で開催されたThe 2nd Kashmir International Conference on Linguisticsで研究発表をした。発表テーマは“北パキスタン諸言語のコピュラについて（On the Copulae of Languages in Northern Pakistan）”。申請者がこれまでに現地調査を行って来た8言語（カティ語、カラーシャ語、コワール語、シナー語、ブルシャスキー語フンザ方言、ナゲル方言、ヤスイン方言）を対照し、それぞれの言語でのコピュラ（be動詞）の体系の特徴を調べ、地域的な特徴や系統特徴を明らかにすることを目的とした発表である。

発表では結論として、次の2点を示唆した。i) カラーシャ語・コワール語に地域特徴として、日本語の「いる」／「ある」のような、有生性に関するコピュラ語幹の使い分けがある。ii) コワール語・シナー語・ドマーキ語に見られる否定形における文法範疇の中和は、基層言語、或いは傍層言語としてのブルシャスキー語からの影響によるものであろうと考えられる。

海外からの参加者が、査証の発行事情もあって多くはなかった大会であったが、申請者の発表に関しては、ほとんどの海外参加者が聴きにきていた。質疑応答では特に、カラコルムとヒンドークシとを結んだ地域の言語の共通特徴を研究しているスウェーデンのHenrik Liljgren氏や、インド側カシミール人でカシミール語研究の大家であるOmkar N. Koul氏から貴重なコメントも得られた。氏らや、ウルドゥー語研究の大家であるTariq Rahman氏といった研究者との親睦を深められたことも、大会への参加が非常に有意義であった点の1つである。

成果

成果は論文（日本語）の形にして公開する。

論文はPDF形式で出版される予定の記述言語学研究会（京都大学）の論集へと投稿し、採用が決定した。

国際民族学・民俗学会（SIEF）2015年研究大会

「Utopias, Realities, Heritages: Ethnographies for the 21st century」での論文発表

2015年6月20日～6月26日 ザグレブ大学（クロアチア）

太田心平

SIEFは、欧州地域を中心とする民族学および民俗学の統合的で国際的な学会組織である。2年に1度開催されるその研究大会には、世界各国からこの分野の研究者が多数参加する。申請者が公刊しようとしている論文をその場で発表することで、この論文の質を高める有益なコメントがえられることと期待できる。

また、今回の研究大会は自身の研究全般に深く関わるテーマでおこなわれるため、申請者が参加すれば、今後の研究に役立つ多くの学術的知見と人的ネットワークをえることが出来ることも期待できる。

そして、発表の成果を公刊するための打ち合わせをおこなうことで、申請者の論文をよりスムーズに公刊するメディアが確保できるものと期待できる。

実施状況

ザグレブ大学で開催された国際民族学・民俗学会（SIEF）の2015年研究大会「Utopias, Realities, Heritages: Ethnographies for the 21st century」に参加し、特にパネルセッション「Imagineries of migration: expectations and places」(Mig002)で、論文「The Utopist Genealogy of South Korean Immigrants in New York in 21st Century」を発表した。

この発表は、自身が2010年以降におこなってきた研究の成果報告であり、公刊しようとしている論文をその内容とする。研究大会では、発表に対して多くのコメントが寄せられた。これをもとに論文をリライトし、その結果をもって、同じパネルの参加者とともに、発表の成果を公刊するための打ち合わせをおこなうことが出来た。

また、このパネルの総合討論においても、申請者の発表がパネル全体を整理し、各論文を結びつける鍵としてあつかわれたため、パネル全体に対しても寄与できた。

成果

外部の英文国際学術誌に論文として投稿する予定である。

「東南アジア考古学ヨーロッパ学会第15回国際会議

「東南アジアにおける動植物の初期の歴史への学際的アプローチ」での研究発表

2015年7月4日～7月13日 Université Paris Ouest Nanterre la Défense (フランス)

ピーター・マシウス

東南アジア考古学ヨーロッパ学会（EASAA）への提案において、パネルの主催者は、①東南アジアにおける動植物の初期の歴史に関するデータ集積及び②新しい地域統合を開発する必要性を強調した（データには家畜化・栽培化の中心地、拡散、農業システム、土地利用などが含まれる）。このパネルのため、サトイモに関する論文の寄稿を依頼されたことから、ベトナム北部で行った野外共同調査と標本の収集について『ベトナム北部における *Colocasia esculenta* (サトイモ) とその野生近縁種の同所性 (Sympatry of *Colocasia* (taro) and its wild relatives in northern Vietnam)』と題する論文を発表する。論文はすでにアクセプト済みである。この調査結果報告は、地域における考古学的調査とも密接に関係し、東南アジア本土におけるサトイモの栽培種の起源と拡散を理解するうえで重要な役割を果たすことが期待できる。第15回国際会議は、7月6日～7月10日に行われるため、7月5日に会場下見及び同じパネルの発表者と打合せを行う。なお、7月11日は関係研究者と研究打合せを行うため、研修とする。

実施状況

7月6日から10日、Université Paris Ouest, Nanterre la Defense (パリ) で開催された東南アジア考古学ヨーロッパ学会第15回国際会議に参加し、9日に『ベトナム北部における *Colocasia esculenta* (サトイモ) とその野生近縁種の同所性 (Sympatry of *Colocasia* (taro) and its wild relatives in northern Vietnam)』と題する論文を発表した。この論文は、かつて指導教員であった Ibrar Ahmad 博士 (Quaid-i-Azam University, パキスタン) と東南アジアの共同研究者との共著である。会議開催中には、インド、フランス、オーストラリア、ニュージーランド、イギリスなどから参加していた多くの研究者と会い、東南アジアの先史時代に関するさまざまな地域での最先端の研究を知ることができた。とくに、インドの考古学のセッションで知り合った Nagaland University の研究スタッ

フとは、将来的な共同野外調査の可能性について話し合うことができた。

成果

今回発表した論文は、学術誌（Springerにより出版されている『The Journal Genetic Resources and Crop Evolution』など）で近く出版する予定である。

「国際研究集会 the 7th International Conference of the European Research Network On Philanthropy への派遣」——
2015年7月8日～7月12日 ESSEC Business School, Cergy Campus（フランス）
出口正之

The 7th International Conference of the European Research Network On Philanthropy (ERNOP) での研究発表論文 “Policy change making the biggest Corporate Philanthropy in Japan” がアクセプトされ、発表する。ERNOP は President: Theo Schuyt- VU University Amsterdam（オランダ）、Georg von Schnurbein- University of Basel（バーゼル大学）、Martha Rey Garcia- University of A Coruna（スペイン）など欧州の一流大学が理事を務める、フィランソロピー研究の開放・会費型研究連合である。日本からは申請者1人が論文発表をアクセプトされている。下記の論文発表による学術的貢献のほか、本館が今後「フォーラム型情報ミュージアムの構築」等を展開していくにあたって、国際的な開放・会費型研究連合に本館研究者が学術的に参加・発表していくことは大きな意義がある。

実施状況

European Research Network On Philanthropy (ERNOP) はヨーロッパの大学のフィランソロピー研究所のネットワーク組織で、学会と同様の大会を今回行った。120名程度の小規模の研究集会であったが、申請者は、政策人類学的観点から、今般の公益法人制度改革及び税制改革によって、日本の一企業の税引き前利益の40%相当額142億円が東日本大震災後の復興のための寄附として使用されたこと。また、この142億円の寄附が、全て税制上、非課税とされたことを報告。この間の、公益認定等委員会委員長、Yホールディングス社長、Y福祉財団理事長の役割を明らかにした。聴衆からは、①大陸法の伝統をひく日本に慣習法の英国制度が入り込んだことへの反応、②欧米では決して見られない事例に対する驚き、③shareholder philanthropy 研究からの研究上の意義の指摘等があった。従来日本のフィランソロピー研究が米国を中心に見ていた反省から、今回の発表に至ったが、公益認定制度という欧州（イギリス）発の制度を日本に導入したことによる研究上の領域が広がっていることが明らかになった。

成果

「政策」そのものが「フィールド」であるという、Cris Shore と Susan Write の「政策人類学」の方法論を採用し、2011年に公益財団法人ヤマト福祉財団がとった東日本大震災後の被災地支援プログラムを公益法人制度改革との関連から論じる論文を発表予定。同財団は制度改革前であれば、厚生労働省所管の福祉財団であったことから、漁港の再興支援などは行うことができなかった。ところが、新制度後の政府の呼びかけに呼応し、宅急便1個につき10円の寄附をヤマトホールディングスが決定、寄附を受けた同財団が新プログラムを作り上げ実行した。その際の政府や株主などステークホルダーの動きに着目した論文を発表予定。このことは「現代文明に焦点を当てる」という本館第三期中期目標に盛られた方針に沿うばかりではなく、政策人類学の新たな地平を拓くことになる。

「Screening of two Minpaku-produced films and research presentation
at the 43rd World Conference of the Interracial Council for Traditional Music (ICTM)」——
2015年7月13日～7月24日 カザフ国立芸術大学（カザフスタン）
寺田吉孝

2015年7月にカザフスタン共和国の首都アスタナ市で開催される国際伝統音楽評議会の第43回国際大会に参加し、民博製作映画の上映と研究発表を行う。同評議会は世界最大規模の音楽・芸能学会であり、隔年で世界大会を開催している。今大会では約400件の研究発表が予定されており、申請者は民博で制作した映像番組2本（Sounds of Bliss, Echoes of Victory: A Kalingas Wedding in the Northern Philippines および Music in the Life of Balbalasang: A Village in the Northern Philippines）の上映と、その制作・利用に関する発表を行う。また、申請者は、同学会の理事を務めており、大会前後に開かれる理事会に合わせて出席する。さらに、2014年より、民族音

楽学における映像音響メディアの活用に関する研究グループを同学会内に設立する機運が高まっており、申請者を含む5名の研究者が共同で設立の提案を行った。この研究グループの設立は同学会の理事会によりすでに承認されており、本大会の期間中に第1回会合が予定されている。申請者はこの会合にも発起人の一人として参加し、映像音響資料の活用に関心のある多数の研究者と意見交換、交流を深める予定である。

実施状況

2015年7月16～22日にカザフスタン共和国の首都アスタナ市で開催された国際伝統音楽評議会の第43回世界会議に参加し、民博制作映画の上映と討論を行った。同評議会は世界最大規模の音楽芸能学会であり、隔年で世界会議を開催している。今大会の参加者は約600名で、約400件の研究発表が行われた。報告者は、民博で制作したフィリピン音楽に関する映像番組2本(Sounds of Bliss, Echoes of Victory: A Kalinga Wedding in the Northern Philippines および Music in the Life of Balbalasang: A Village in the Northern Philippines) を上映し、番組における文字情報(ナレーション、字幕)の位置づけ・役割に関して問題提起を行った。その後の討論では、現地とのラポール、現地上映会での反応などについて活発な質疑応答があった。また、民族音楽学における映像音響メディアの活用を議論する研究グループ(Study Group on Audiovisual Ethnomusicology)を同学会内に設立することが正式に承認されたことを受け、世界会議の開催期間中に第一回の総会が開催された。報告者も発起人の一人として参加し、グループの運営や研究方針、シンポジウム開催の日程などについての議論に参加した。会期中、映像音響資料の活用に関心のある多数の研究者と意見交換、交流を深めることができたのは大きな収穫だった。また、報告者は同学会の理事を務めており、大会前後に3日間開かれた理事会(7月14-15日と23日)にも合わせて出席した。

成果

今回の上映会・発表は、2014年度にフィリピンで開いた上映会(計6回)における質疑応答に基づいている。これに今回の発表時の議論を加味したエッセイを学会誌 Yearbook for Traditional Music に投稿する予定である。今回の発表の目的の一つは、解説ブックレットの形態、内容に関して具体的な映像番組に沿って議論することである。これまでの上映会におけるフィードバックを参考にしながらブックレットの目的・効果についてさらに検討を加え、2016年度に試作を行いたい。

「第11回国際狩猟採集社会会議での研究報告」

2015年9月5日～9月13日 ウィーン大学(オーストリア)

池谷和信

国際狩猟採集社会会議(CHAGS)は、世界の狩猟採集民研究者が一堂に集まる会議である。そこでは世界最先端の研究が報告されると同時に、最新の調査内容などの情報交換が行なわれる。このため、申請者がこの会議で研究報告することによって、世界のなかでの自分の研究の位置を確認することができる。

今回の第11回目の会議では、申請者は「現在のカラハリ狩猟採集民の研究と活動」というセッションでの報告を予定している。このセッションは、この分野の世界的な第一人者リチャード・リー教授ほかによって組織されており、欧米、アフリカ、日本などの研究者による報告が予定されている。申請者は、狩猟採集民と定住化という基本テーマをめぐって調査事例のみならず理論的枠組みを提示する予定である。

以上のように、世界の研究のなかで自らの研究を深めること、世界のなかで日本からの国際競争力の高さを示すことに意義があると考えている。

実施状況

この会議は、9月7日～11日の5日間にわたって研究発表が行われるが、過去と現在の世界の狩猟採集民を対象にして文化人類学のみならず考古学や言語学などの研究も予定されている。とりわけアフリカに焦点を当てると、遺伝学や考古学の研究によって新たな研究の展開が予測される。申請者は、この会議への参加によって、狩猟採集民に関する世界の研究がどの方向に進んでいるのか、どのような研究が行われていないのかなどを知ることによって、今後の研究の戦略を立てることができる。

またこの会議では、この分野に関して世界のセンターの一つであると思われる民博において、近年に刊行されたSES(Senri Ethnological Studies)を宣伝する絶好の機会にもなるであろう。民博は、すでに1998年に第8回の会議を開催しており、10冊近いSESの論集によって、この分野の研究者にとってはよく知られている。最近の民博ではどのような研究を国際的に発信しているのか、ニューズレターや英文HPなどによっても民博の国際的な研究広報

としての成果を期待することができる。

成果

今回の第11回目の会議では、「現在のカラハリ狩猟採集民の研究と活動」というセッションでの報告を行った。このセッションは、この分野の世界的な第一人者リチャード・リー教授ほかによって組織されており、欧米、アフリカ、日本などの研究者による報告がなされた。過去20年間におけるある村の社会変容を報告したが、その村が先住民運動の研究者に近年注目されている点、村の事例は従来のカラハリモデルに当てはまらないことなどから、新たな理論的枠組みを提示できるものと確信することができた。

以上のように、世界の研究のなかで自らの研究を深めること、世界のなかで日本からの国際競争力の高さを示すことができたと考えている。

「第8回ヨーロッパ・イラン学会 (Societas Iranologica Europaea) 大会での研究発表」

2015年9月13日～9月21日 サンクト・ペテルスブルグ (ロシア)

山中由里子

ヨーロッパ・イラン学会大会は4年ごとに開催されるイラン学の国際的な学術会議で、ヨーロッパのみならず、イラン、北米、日本からも最先端の研究を発表するために歴史・文学・人類学・美術など様々な分野の研究者が一堂に会す重要な会議である。8回目となる今回は、サンクト・ペテルスブルグ (ロシア) にて9月15日から9月19日まで開催される。14日については、会場下見及び発表打合せを行う。

ムハンマド・トゥースイーの『被造物の驚異』という12世紀のペルシア語百科全書に含まれる、アレクサンドロスに関する驚異譚について (“Alexander and the Wonders of the World in Ṭūsī’s ‘Ajā’ib al-makhlūqāt”) 発表する。世界中から集まった専門家と学術交流を行い、現在行っている驚異譚の研究との連携の可能性を探る。

実施状況

ヨーロッパ・イラン学会大会は4年ごとに開催されるイラン学の国際的な学術会議で、ヨーロッパのみならず、イラン、北米、日本からも最先端の研究を発表するために歴史・文学・人類学・美術など様々な分野の研究者が一堂に会す重要な会議である。初日の文学のセッションにおいて、ムハンマド・トゥースイーの『被造物の驚異』という12世紀のペルシア語百科全書に含まれる、アレクサンドロスに関する驚異譚について (“Alexander and the Wonders of the World in Ṭūsī’s ‘Ajā’ib al-makhlūqāt”) 発表した。発表後も、活発に質問があり、評価が得られたという手ごたえがあった。

エルミタージュ美術館では、イブン・バトゥータという14世紀のアラブの大旅行家の展覧会が開催されており、ロシア科学アカデミーの東洋写本研究所や国立図書館においても、ペルシア写本の展示が学会に合わせて開催されていた。これらの展示と、さらにクンストカメラ (ピョートル大帝人類学・民族学博物館) などへの研修エクスカージョンも企画されており、今後の研究にとって重要なコレクションを訪れる貴重な機会でもあった。

成果

今回の発表内容は、国際ジャーナルへの英文論文として寄稿する予定である。

これまで行ってきた驚異譚に関する研究の成果を、同じ専門性を共有する海外の研究者たちに公開することによって、共同の出版プロジェクトや、招へい事業に今後発展することが期待される。ロシアの研究者との連携は、これまでほとんど行ってこなかったもので、ネットワークをさらに広げることができる。

館長リーダーシップ経費による事業・調査

「イメージの力」展の巡回展用図録作成

2014年、民博創設40周年特別展として国立新美術館と民博で開催した「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」の巡回展が、郡山市立美術館 (福島県) で2015年6月27日～8月23日まで開催されたが、それに際し同美術館から、展示図録の買取分50冊、委託販売分450冊の計500部の作成の希望が出された。「イメージの力」展の図録は国立新美術館と民博での買い取り分・販売分として計850部を作成したが、既に保存用の部数を除いて残部はなく、今後の展示での配布・販売に当てることは不可能な状態であった。同展については、今後、さらに、2016年度以降、香川県立ミュージアムほかへの巡回も想定されていた。また、同図録は日英併記で、民博のコ

レクションのカタログとしての性格も有しており、とくに海外からの来訪者や海外の研究者からの配布の希望も強い。このため、今後の巡回展での買上・配布用ならびに本館における配布用として、同展図録2000部の追加作成を行った。

これによって、同展のメッセージと民博のコレクションの意義が各開催地においてさらに深く認識される機会を得た。また、民博のコレクションの概要とその特徴を今後も継続的に海外に発信していくことが可能となった。

みんなく映画会「インド映画特集」

本企画は、南アジア展示場の新構築に関連させて現代インドの文化や社会の多元性や多様性、またその変化のありさまを表現する映画4本を連続上映するものであった。4本の映画はインド文化の多様性を表すようにそれぞれ異なった言語で製作されており、このこと自体もインド文化の複雑さを反映している。多数の参加者に対し、映画の前後のレクチャーや上映時の解説シートなどを通じて専門的研究者が背景解説を行い、インドに関する理解を深めて貰うことができた。またこの機会に南アジアの新展示にも多数の観覧者が訪れ、新構築の広報としても大いに成果があがった。参加者数:入場者数合計1,493名、ミニレクチャー458名

なお、各回の詳細は以下の通り。

「ファンダリー」: 7月20日(月・祝)	入場者数 443名、ミニレクチャー 143名
「カーンチワラム サリーを織る人」: 7月25日(土)	入場者数 327名、ミニレクチャー 59名
「Mr. & Mrs. アイヤル」 8月2日(日)	入場者数 275名、ミニレクチャー 75名
「DDLJ 勇者は花嫁を奪う」: 8月8日(土)	入場者数 448名、ミニレクチャー 181名

各回とも 13:30開映。 8月8日のみ 13:00開映。

研究公演「ネパールのネワール仏教舞踊チャルヤー」

関連ワークショップ「ネワール仏教舞踊チャルヤーへのいざない」

ネパールのカトマンズ盆地に暮らしてきたネワール人。その仏教僧侶カーストであるヴァジュラチャルヤは、修行のひとつとしてチャルヤーという舞踊を伝えてきた。動くヨーガともいわれるチャルヤーは、自己と宇宙(コスモス)を体感し、仏や神々に近づく手段であるが、見る者にはまるで動く仏像のように映る優美な舞である。

2015年4月18日(土)及び19日(日)、第5セミナー室において、新南アジア展示公開記念イベント「躍動する南アジア——春から秋のみんなくフォーラム2015」の一環として、研究公演「ネパールのネワール仏教舞踊チャルヤー」(19日)及び関連ワークショップ「ネワール仏教舞踊チャルヤーへのいざない」(18日)を開催した。

ワークショップには40名が参加し、舞踊の神パドマナティイスワールへの儀礼後、出演者のプラジョワール・ラトナ・ヴァジュラチャルヤ氏によるチャルヤーの模範公演(演目アヴァロキテ・ロケスワール〈観世音菩薩〉)が披露された。その後岡本有子氏が加わり、参加者と一緒にチャルヤーの動き、ムドラ(手印)を学ぶワークショップがおこなわれた。

19日の研究公演は、吉田憲司副館長の挨拶ではじまり、プラジョワール氏による開始儀礼とチャルヤーの導入公演(演目 ヴァジュラ・サトワ〈金剛薩埵〉)の後、南真木人、立川武蔵本館名誉教授、岡本有子氏による講演がおこなわれた。休憩をはさみ、プラジョワール氏と岡本有子氏によるチャルヤーの公演を約一時間じっくりと鑑賞してもらった。公演は6演目から構成された。最後に行の終了を告げるジャフン・バホの儀礼をして終了した。参加者は120名で、ネワール研究の第一人者である石井溥先生(東京外大名誉教授)など研究者が東京や熊本から駆けつけてくれるなど、チャルヤーを鑑賞する機会の希少性が再認識させられた。

立川先生による解説、演目を詳述した配布資料、会場後ろに展示したプラジョワール氏の兄ガウタマ氏が描いたマンダラや神仏の絵画(標本資料)により、みんなくがネワール仏教研究のセンターとして資料を収集してきたこと、その一環として本研究公演があることを印象づけられた。また、南アジア新展示場のこけら落し的な意義と新展示の広報の目的も達成できた。寄せられた感想は概ね好評で、ネワール仏教研究の発展とその日本における紹介に寄与するという所期の目的を果たせた。

企画展「岩に刻まれた古代美術:アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリヤン」開幕式典の開催

企画展『岩に刻まれた古代美術:アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリヤン』の開会式典を実施した。日時は2015年5月21日(木)13:30で、場所は1階エントランスホールと企画展示場入り口であった。内容は、館長あいさつ、来賓あいさつ(在大阪ロシア連邦総領事、シカチ・アリヤン村村長、シカチ・アリヤン村学校教員)、実行委員長による趣旨説明に続き、シカチ・アリヤン村から招待した学校の生徒たちによる伝統歌謡と伝統舞踊のパフォーマンスを披露し、最後に企画展示会場入り口でテブカットを行うというもので、一般来館者の観覧も可能とし

たことにより、企画展の広報に寄与し、村の現状と文化活動の実態を直接来館者にアピールできた。それはまた、本館の展示方針である「フォーラムとしての展示」と「同じ時代を生きる人々の展示」の実現に大きく貢献することにもなる。

モンゴル秋祭り「モンゴル・ナマリン・バイル」

モンゴル国はこれまで東京でモンゴル春祭りを実施し、2013年より、在大阪総領事が元モンゴル国文部副大臣であったことから、総領事の肝いりで、大阪でもモンゴル秋祭りを開催することとなり、会場として現代モンゴルの研究中心である本館に白羽の矢が立てられた。本館において実行委員会を組織したうえで、関西在住のモンゴル国および中国内モンゴルなどの留学生が集めるとともに、民間活動としてモンゴルとの交流を行っている諸NPO団体も積極的に企画参加し、一般来場者に広くよびかけておこなわれた。一昨年度の成果と反省をふまえて、2014年度も本館で実施することになっていたが、あいにくの台風のため中止を余儀なくされた。ただし、ビデオ撮影は実施し、現在、館内で視聴できるプログラムとして提供されている（邦訳入り）。またこのとき寄贈された資料は、中央アジア・北アジア展示新構築に用いられる。2015年度は改めて在大阪領事館より実施したい旨の申し出があり、10月31日に以下のとおり予定し実施した。

1) 講堂にて、開会式、現代モンゴルを代表する公演、2) エントランスにて、本館所蔵のゲルを立てて象徴展示とする、3) 講堂地下にて、NPO 諸団体の告知活動。

メイン会場である講堂では、公演と解説から成る所定のプログラムをおこなった。超満員の来観者をえて、モンゴルの文化についてより深く知ることが出来たというコメントをはじめ、想定していた以上の好評をえることが出来た。

エントランスホールでは、モンゴルと関わりのある日本の各種団体が、来館者へ活動報告するとともに、たがいに交流する場を設けた。こちらも、各ブースに列が出来るとの反響があった。また、講堂地下ではモンゴル伝統衣装の試着体験など、体験・交流型のイベントを開催した。家族連れで異文化体験が出来ると、来場者が楽しんでいた。

計画どおりに遂行できなかったのは、エントランスホールにおけるゲルの象徴展示である。これは、組み立てを担当することになっていた在日本国モンゴル大使館の事情により中止されたものであるが、その代わりにエントランスホールをより多くのモンゴル関係団体に使用してもらった。結果的には象徴展示によって期待されていた以上の評判をえることが出来たものと思われる。

新東南アジア展示フォーラムの開催

本企画は、「ゆったり東南アジア」と銘打った東南アジア展示新構築に関連するフォーラム事業のうち、①研究公演「息づく仮面——バリ島の仮面舞踊劇トペンと音楽」および関連ワークショップ「仮面を生かす踊り」、②講演・ワークショップシリーズ「東南アジアの仮面と人形」、③映画会シリーズ「映画で知る東南アジア」を実施するために企画されたものである。①では、バリ舞踊家を招聘し、演者が仮面に生命を与える様子や日本人舞踊家を交えた実際の舞踊の公演および研究者による解説を行なった。②では、それぞれの地域の芸能に詳しい専門家・研究者を招き、講演およびワークショップを実施した。③では、現代東南アジア社会を鮮やかに映し出す注目作を上映し、研究者による解説を加えた。これら芸能や映画に関連したイベントを通じて、芸能や映画作品に関する理解を深める機会を提供するとともに、東南アジアの文化や社会についての幅広い情報提供を行なうことができた。参加者の合計は1,270名であり、新構築の広報にも貢献した。

研究公演「時空を超える南インドの踊り——至宝ナルタキ・ナタラージ」の開催

南インドのヒンドゥー寺院で行われた奉納舞踊を起源とするバラタナーティヤムは、インドを代表する古典舞踊ジャンルの一つとして、インド国内はもとより、世界各地の南アジア系移民コミュニティでも盛んに実践されている。本公演では、現在最も注目を集めている舞踊家の一人であるナルタキ・ナタラージと伴奏を行う楽団を招聘し、11月22日に研究公演（講堂）、同23日にワークショップ（第5セミナー室）を行った。バラタナーティヤムは、数種類の楽曲ジャンル（ジャティスワラム、ヴァルナム、ティッラーナなど）を伴奏にして踊られ、公演ではそれらを一定の順序で演奏していく方式がとられる。本公演もこの方式に従って進行した。ナタラージはタミル語楽曲の舞踊を得意としており、これらの演目を中心にしてプログラムが構成された。

今回の公演の参加者は計434名で、会場はほぼ満席となり大盛況であった。館長挨拶、南インド舞踊の概要解説と前奏の器楽曲の後、舞踊曲6演目が披露された。日本では稀にしか見ることの出来ない、高レベルの演奏が繰り広げられ、特に中心曲となった「ヴァルナム」は、上演に40分を要する大曲であり、観客に強い印象をのこした。MC

と配布プログラムによる演目紹介が、観客の鑑賞の一助となったことは公演後のアンケート結果にも表れており、インド舞踊の歴史や多様性を紹介するという当初の目的を達成できた。また、本公演は南アジア展示新構築の関連イベントとして企画され、新構築の広報にも貢献した。

みんなく映画会「波伝谷に生きる人びと」

民博では、東日本大震災以降、被災地の有形・無形の民俗文化財への支援を継続している。これまで3年間にわたって無形の民俗文化財である芸能団体を招へいし、研究公演を実施してきた。現在、被災地では復興に向け日常生活に戻る動きもあり、芸能団体も被災地の日常生活のなかで活動が落ち着きつつある。一方で、日常が意識されるほど、震災に対する記憶の風化が懸念されるとともに、震災以前の地域文化の記憶をどのように伝えるのかという課題が浮かび上がってきた。

そこで、今年度の震災支援プロジェクトの中で実施する企画として映画会を開催した。具体的には民博研究者も文化財レスキューをおこなった宮城県南三陸町の波伝谷において、震災以前から波伝谷の生活文化を取り続けてきた我妻和樹監督作品の「波伝谷に生きる人びと」を上映した。また、本企画に合わせて、映画出演者との座談会をおこない、映画会当日のパネルディスカッションの材料とする研究会を開催した。

「東日本大震災等大規模災害に関わる人間文化研究」

本研究は、連携研究「文化遺産の復興に向けたミュージアムの活用のための基礎的研究-大学共同利用機関の視点から」を引き継ぐものであり、「被災地における無形の文化遺産の保護活動」と「災害の記録・記憶の継承」を目的として開発中の「記憶をつなぐDB」の機能強化を図った。「被災地における無形の文化遺産の保護活動」では、これまで継続調査をおこなってきた岩手県三陸沿岸部の芸能の実態調査を引き続きおこなった。また、「記憶をつなぐDB」の機能強化では、三陸沿岸の津波碑をはじめとするモニュメントの情報収集をおこなうとともに、DBに掲載している情報のクリーニングと修正、情報収集の結果をアップロードするとともにWEB公開のためのシステム環境を整えた。あわせて、来年度以降展開する予定の人間文化研究機構基幹研究「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築にかかる準備調査」のなかで、東北大学災害科学国際研究所や国立歴史民俗博物館との連携に関する意見交換会をおこなった。

(その他館の運営などに関するもの3件)

民博研究懇談会

第265回 2015年5月20日

チュ・スワン・ザオ 「ベトナムにおける市場経済化の進展と地域文化の生成——東北地方のヌン・アン集団の事例から」

第266回 2015年6月17日

寺村裕史 「考古学・文化財科学における“情報”とは何か」

第267回 2015年7月8日

ギジェルモ・ウィルデ 「接触領域の時空間——植民地期の知覚体制への比較的アプローチ」

第268回 2015年10月28日

ママドゥ・シセ 「意味を刻む——西アフリカのアジャミ書法」

第269回 2015年11月18日

卯田宗平 「鵜飼——人間と動物の関係論再考」

第270回 2015年12月9日

サムアン・サム 「クメールの影絵芝居と伝統芸能の将来」

第271回 2016年1月20日

伊藤敦規 「民族学博物館資料の高度情報化とオンライン協働環境整備に向けた取り組み——フォーラム型情報ミュージアムプロジェクトの中間報告として」

2-2 外部資金による研究

科学研究費助成事業による研究プロジェクト

2015年度科学研究費助成事業 採択課題一覧

区分	種目	研究課題	研究代表者	研究年度
新	基盤研究 (A) 一般	ネットワーク型博物館学の創成	須藤健一	2015 ～2019
	基盤研究 (A) 一般	アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する人類学的研究	吉田憲司	2015 ～2019
	基盤研究 (A) 一般	アンデスにおける植民地的近代 ——副王トレドの総集住化の総合的研究	齋藤 晃	2015 ～2019
	基盤研究 (A) 海外	中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究	塚田誠之	2015 ～2017
	基盤研究 (A) 海外	グローバル化時代の捕鯨文化に関する人類学的研究 ——伝統継承と反捕鯨運動の相克	岸上伸啓	2015 ～2018
	基盤研究 (B) 一般	セルロース系ナノファイバーの紙資料保存への応用	園田直子	2015 ～2017
	基盤研究 (B) 一般	東日本大震災で被災した民俗文化財の保存および活用に関する基礎研究	日高真吾	2015 ～2017
	基盤研究 (B) 一般	映像人類学とアーカイブズ実践 ——活用と保存の新展開	大森康宏	2015 ～2017
	基盤研究 (B) 海外	ポスト福祉国家時代のケア・ネットワーク編成に関する人類学的研究	森 明子	2015 ～2017
	基盤研究 (C) 一般	ガリラヤ地方とレバノンのキリスト教徒によるアラブ・ナショナリズムの再考	菅瀬晶子	2015 ～2017
	基盤研究 (C) 一般	本州とその周辺の島々及び多島海海域における民俗芸能の研究	笹原亮二	2015 ～2019
	規	若手研究 (A)	北パキスタン諸言語の記述言語学的研究	吉岡 乾
若手研究 (A)		西アフリカにおける感染症対策と生権力の複数性に関する人類学的研究	浜田明範	2015 ～2018
若手研究 (B)		笑い話に注目した日本語ナラティブの「型」と「技」の地域比較	金田純平	2015 ～2017
若手研究 (B)		パナマ東部先住民エンベラにおける「共同体企業」の実践に関する人類学的研究	近藤 宏	2015 ～2017
若手研究 (B)		世界文化遺産バンチェン遺跡と地域社会： 住民の生活史の視点から	中村真里絵	2015 ～2017
若手研究 (B)		アフリカ障害者の生活基盤に関する地域研究	戸田美佳子	2015 ～2017
挑戦的萌芽研究		法・会計・文化融合型の公共政策国際比較研究 チャリティ制度を事例に	出口正之	2015 ～2016
挑戦的萌芽研究		コミュニティ通訳者を対象とした学術手話通訳者養成プログラムの開発	中野聡子	2015 ～2016
研究活動スタート 支援		モノを通してみる現代バレーにおける聖人信仰の形成と発展に関する人類学的研究	八木百合子	2015 ～2016
研究成果公開促進費 学術図書		バリ島仮面舞踏劇の人類学	吉田ゆか子	2015
特別研究員奨励費	近現代インドにおけるヒンドゥー寺院運営の意義 ——商業集団マールワリーを事例として	田中铁也	2015	
特別研究員奨励費	花街の担い手コミュニティの日常の実践に関する歴史人類学的研究	松田有紀子	2015 ～2017	
特別研究員奨励費	バリ島の「障害」のある役者たちの演劇実践 ——遊戯性・あいだ性・日常との連続性	吉田ゆか子	2015 ～2017	

新規	特別研究員奨励費	シヨナ音楽文化と憑依儀礼の政治・宗教人類学的研究	松平勇二	2015 ～2017	
	新学術領域研究 (研究領域提案型)	植民地時代から現代の中南米の先住民文化	鈴木 紀	2014 ～2018	
継	基盤研究 (S)	権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築	關 雄二	2011 ～2015	
	基盤研究 (A) 一般	アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト ——エジプト系伝承形成の謎を解く	西尾哲夫	2012 ～2016	
	基盤研究 (A) 一般	世界の中のアフリカ史の再構築	竹沢尚一郎	2012 ～2015	
	基盤研究 (A) 海外	熱帯高地における環境開発の地域間比較研究 ——「高地文明」の発見に向けて	山本紀夫	2011 ～2015	
	基盤研究 (A) 海外	熱帯の牧畜における生産と流通に関する政治生態学的研究	池谷和信	2014 ～2017	
	基盤研究 (B) 海外	経済自由化後の南インド社会の構造変動に関する総合的研究	杉本良男	2013 ～2015	
	基盤研究 (B) 一般	ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合	丸川雄三	2014 ～2016	
	基盤研究 (B) 海外	墳墓からみたインダス文明期の社会景観	寺村裕史	2014 ～2016	
	基盤研究 (B) 海外	台湾原住民族の分類とアイデンティティの可変性に関する人類学的研究	野林厚志	2014 ～2017	
	基盤研究 (B) 海外	北方寒冷地域における織布技術と布の機能	佐々木史郎	2014 ～2016	
	基盤研究 (B) 特設分野研究	多世代共生「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」構想と実践の国際共同研究	鈴木七美	2014 ～2016	
	基盤研究 (C) 一般	水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究	平井京之介	2013 ～2015	
	基盤研究 (C) 一般	トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学： オセアニア大国の移民を事例に	丹羽典生	2013 ～2016	
	基盤研究 (C) 一般	バイパス型私企業活動の活性化による、マダガスカル山間部の 住民行動と地域構造の変容	飯田 卓	2013 ～2015	
	基盤研究 (C) 一般	スイスにおける高齢者のウェルビーイングと代替医療の適用に 関する文化人類学研究	鈴木七美	2013 ～2015	
	基盤研究 (C) 一般	インド災害後のローカル文化再編におけるコミュニティ資源と しての「手工芸」の意義	金谷美和	2014 ～2017	
	続	基盤研究 (C) 一般	現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術 学的研究	上羽陽子	2014 ～2017
		基盤研究 (C) 一般	現代イタリア社会におけるローカリティに関する文化人類学的 研究	宇田川妙子	2014 ～2017
		若手研究 (A)	日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する 文化人類学的研究	伊藤敦規	2014 ～2017
若手研究 (B)		現代エジプトのオルタナティヴ・モダニティとしての空手実践 に関する社会人類学的研究	相島葉月	2012 ～2015	
若手研究 (B)		言語多様性の記述を通して見る中国雲南省チベット語の方言形 成の研究	鈴木博之	2013 ～2016	
若手研究 (B)		漢族の特色の空間利用とエスニシティの再編 ——中・越隣接エリアの調査研究	河合洋尚	2013 ～2015	
若手研究 (B)		アフリカの無形文化保護における民族誌映画の活用	川瀬 慈	2013 ～2016	
若手研究 (B)		高齢者介護と相続の相関にみる沖縄の「家族」に関する人類学 的研究	加賀谷真梨	2013 ～2015	
若手研究 (B)		中国大興安嶺における生業環境の変化とトナカイ飼養民の適応 形態：1940-2010	卯田宗平	2013 ～2015	

	若手研究 (B)	博物館展示の再編過程の国際比較による「真正な文化」の生成メカニズムの解明	太田心平	2013 ～2016
	若手研究 (B)	現代ブータンの多角的宗教空間における仏教と屠畜に関する政治人類学的研究	宮本万里	2014 ～2018
	若手研究 (B)	『千一夜物語』 仏語訳者マルドリユス再考 ——<遺贈コレクション>の分析を中心に	岡本尚子	2014 ～2016
	若手研究 (B)	滞日ネパール人の生活実践と労働動態の研究	森田剛光	2014 ～2016
継	若手研究 (B)	植民地インドにおける商業カーストの邸宅建築に関する基礎的研究	豊山亜希	2014 ～2016
	挑戦的萌芽研究	人類学におけるフォト・エスノグラフィーの手法の探求	岩谷洋史	2014 ～2015
統	研究活動スタート支援	中国石窟芸術技法・材料の解明による美術史観再考 ——麦積山石窟を事例として——	末森 薫	2014 ～2015
	研究成果公開促進費 学術図書	Oral Chronicles of the Boorana in Southern Ethiopia	大場千景	2014 ～2015
	研究成果公開促進費 データベース	梅棹忠夫資料のデジタルアーカイブズ	久保正敏	2013 ～2016
	研究成果公開促進費 データベース	服装・身装文化デジタルアーカイブ	高橋晴子	2014 ～2018
	特別研究員奨励費	社会空間の動態と行為の演劇性をめぐる人類学的研究： ポリネシアにおける贈与の全体性	比嘉夏子	2013 ～2015

受託事業

「手話言語学に関する講義の実施およびシンポジウム・セミナーの開催」

委託者：公益財団法人 日本財団

担当教員：菊澤律子

実施機関：2015年4月1日～2016年3月31日

目的と概要

1. 手話言語学についての国際シンポジウムを開催し、言語学の基礎概念や海外の研究動向に触れる機会を研究者・手話通訳者・一般社会に提供する。同時に、各国での日本財団の支援による手話言語学研究関連事業を広く紹介する。
2. 手話言語学の開講に関心を持つ大学や学会等に、集中講義や単独の講演のための講師や通訳者を派遣する。
3. 一般を対象とした「手話による言語学講義」、「楽しい言語学を学ぶ会」を開催する。
4. 西日本における学術手話通訳者養成事業を行う。スクリーニングにより選考した手話通訳者4～6名（うち2名は2014年度から継続）を対象とする。
5. 以上を遂行するために、昨年に引き続き、ろうのプロジェクト研究員を雇用して手話言語学に関する研究をすすめる機会を提供すると同時に、プロジェクト・コーディネーターの役割を担ってもらう。国内外の研究者との連携やネットワークづくりをすすめる。
6. セントラルランカシャー大学所蔵の世界の手話言語約30言語の映像のデータベース化に着手する。映像データの加工作業等のために、ろうの研究支援員を二名雇用する。

以上により、諸大学や社会における手話言語学に対する認識の向上に加え、申請機関においては、大学等での手話言語学の開講や研究者育成に関わる現状と問題点を把握する。1～2年目の事業の経験も踏まえ、国内外の高等教育機関におけるカリキュラムの特徴、対象が聴者またはろう者であるときの具体的な条件の違い、手話通訳者養成を視野にいれ、国内のニーズや現状により即した長期的な事業展開の計画をたてる。

実施状況

以下の通り、諸大学および研究機関に派遣した。東北大学では、全学教育枠での「手話言語学」の講義の開講二年度目として派遣済である。

1) 手話言語学の専門家の諸大学および諸機関への派遣

日程：2015年4月26日、6月28日（2日間、講義）

講師：森壮也（JETRO-IDE）

派遣先：豊田工業大学

内容：「手話学概論」「手話音韻論」

聴講者数：30名程度（学生、教員）

受け入れ研究者：原 大介

日本手話（手話通訳付き）

日程：2015年6月24-25日（2日間、講義）

講師：相良啓子（国立民族学博物館）

派遣先：関西学院大学

内容：「世界の手話～数のしくみを通して～」 「世界のろう事情」

聴講者数：30名程度（学生、教員）

受け入れ研究者：関西手話研究会（関西学院大学）

日本手話（手話通訳付き）

日程：2015年7月14日（1日間、講義）

講師：中野聡子（国立民族学博物館）

派遣先：大阪教育大学

内容：「障がい者支援入門I」

聴講者数：30名程度（学生、教員）

受け入れ研究者：池谷航介（大阪教育大学）

日本手話（手話通訳付き）

日 程：2015年8月6日～9日
講 師：松岡和美（慶応義塾大学）
紹介先：山口大学
内 容：「手話言語学概論」
※一般集中講義のための講師紹介。

日 程：2015年10月19日～25日
講 師：スーザン・フィッシャー（国立民族学博物館）
派遣先：台湾・清華大学、国立中正大学
内 容：手話言語学に関する講演および学術交流（学生および教員）
聴講者数：各20名程度
受け入れ研究者：James Tai, Jane S. Tsay（国立中正大学）
実施言語：英語

日 程：2015年10月27日（1日間、講義）
講 師：スーザン・フィッシャー（国立民族学博物館）
派遣先：東北大学
内 容：「日本手話と世界の手話」
聴講者数：35名
受け入れ研究者：小泉政利
実施言語：英語

日 程：2015年後期
講 師：全15名によるリレー講義（コーディネーター 菊澤律子）
派遣先：東北大学
内 容：全学教育授業「手話の世界と世界の手話言語☆入門」
聴講者数：20人
受け入れ研究者：小泉政利（東北大学大学院文学研究科・文学部言語学研究科）
実施言語：日本語、日本手話、英語。日本手話による講義については原則として通訳を派遣。

日 程：2015年通年講義のうち、半年間（15日間）
講 師：市田泰弘（国立障害者リハビリテーションセンター学院、国立民族学博物館）
派遣先：東京大学
内 容：言語学概論（大学院および学部）
聴講者数：4人
受け入れ研究者：非該当
実施言語：日本語
※昨年に引き続き、本事業開始以前から開講されていた講義の継続。制度面での整備による協力。

日 程：2015年1月12日（1日間、講義）
講 師：中野聡子（国立民族学博物館）
派遣先：大阪教育大学
内 容：「障がい者支援入門II」
聴講者数：30名程度（学生、教員）
受け入れ研究者：池谷航介（大阪教育大学）
日本手話（手話通訳付き）

2) 国際シンポジウム等の開催

- 1 国際シンポジウムについては、以下の通り開催した。通訳士交流会については予定通り、ラウンドテーブル形式のワークショップとした。

<http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/news/corp/20150920-21>

時 期：① 2015年9月20～21日（シンポジウム）

② 2015年9月22日（通訳士交流会）

場 所：大阪・国立民族学博物館

対象者：① 国内外の大学生、大学院生、および研究者（一般の聴講可）

② ①で通訳をした通訳者（通訳コーディネーター、日本手話、日英同時通訳、アメリカ手話）および菊澤。

内 容：① 日本財団および香港中文大学との共催によるシンポジウム「手話言語学研究の現在」、「文法の強制・許容・制約と回避」開催

② 通訳者間の反省および交流会

参加者数：① 363名、② 約20名

受け入れ研究者：非該当

使用言語：① 英語、アメリカ手話、香港手話、日本語、日本手話

② 英語、日本語（日英同時通訳付き）

- 2 みんなくセミナー「通訳学☆最前線」を以下の通り、開催した。

<http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/104.html>

時 期：2016年1月9日（セミナー）

場 所：大阪・国立民族学博物館

対象者：国内外の大学生、大学院生、および研究者（一般の聴講可）

内 容：通訳学に関する国内外の動向の報告

参加者数：約80名

受け入れ研究者：非該当

使用言語：① 日本語、日本手話

3) 民博学術通訳研究事業の開催

期 間：2015年5月～2016年1月

場 所：大阪・国立民族学博物館

対象者：関西在住の通訳者の中で一定の通訳技能を持つもの（スクリーニングにより選考）

内 容：関西における学術通訳チーム養成

参加者数：通訳者4名

受け入れ研究者：非該当

使用言語：日本語、日本手話、英語（日本手話通訳、必要に応じて日英同時通訳付き）

学術通訳に必要な知識を身につけ、技量を伸ばすことができるよう、月一回、通訳者養成の専門家を招待してのミーティングや評価等を行った。カリキュラム作成は主として飯泉菜穂子（世田谷福祉専門学校）が担当した。

通訳者 長浜栄昭、川鶴和子（以上、継続）

山崎晋、隅田伸子（今年度新規）

運営メンバー 飯泉菜穂子（世田谷福祉専門学校、国立民族学博物館）、市田泰弘（国立障害者リハビリテーションセンター学院、国立民族学博物館）、岡森結子（通訳コーディネーター）、菊澤律子（国立民族学博物館）、中野聡子（国立民族学博物館）、高道由子（国立民族学博物館）

講 師 木村晴美（国立障害者リハビリテーションセンター学院）、吉川あゆみ（世田谷福祉専門学校）、高木真知子（通訳コーディネーター）、森壮也（JETRO-IDE）、西村（日英通訳者）

オブザーバー 甲斐更紗（九州大学）、川上恵、相良啓子（国立民族学博物館）、馬場博史（関西学院大学）、前川和

美（関西学院大学）

4) ろう者や通訳者を対象とした言語学講座の開催

日 程：2015年4月より8月まで全6回

講 師：森壮也（JETRO-IDE）

場 所：国立民族学博物館

内 容：「手話による言語学入門」

聴講者数：35名程度（一般ろう・聴）

受け入れ研究者：非該当

使用言語：日本手話（手話通訳なし）

日 程：2015年4月より8月まで全6回

講 師：吉岡乾（国立民族学博物館）

場 所：国立民族学博物館

内 容：「たのしい言語学を学ぶ会」

聴講者数：35名程度（一般ろう・聴）

受け入れ研究者：非該当

使用言語：日本語（通訳研究事業 OJT による手話通訳あり）

5) 事業2.のインターネット配信

事業2.については、インターネット配信を行った。（アクセス数9月20日248名、9月21日225名）。

成果

1～2年目の事業の経験も踏まえ、また、3年目の事業を推進することにより、国内外のより広い研究者、一般参加者に事業内容に関心を持っていただくと同時に、参加していただくことができた。また、その結果、国内のニーズや現状をよりよく把握することができ、今後の計画につなげることができた。とくに、手話言語学のアウトリーチ活動と学術手話通訳養成については、その効果がみられるようになると同時に、継続して事業を展開する必要性が確認された。手話の言語としての特徴や手話話者の社会参加への推進に向けて、より発展した形でつなげてゆくために、今後は、諸大学や言語系学会等との連携等も視野にいれる必要性の確認、またその基盤づくりができた。

• 事業広報のためのウェブサイト

日本語のみで公開

<http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/>（プロジェクトウェブサイト）

• シンポジウムウェブサイト

<http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/news/corp/20150920-21>

• シンポジウム写真

<https://www.dropbox.com/sh/o86tn41qubta3ef/AABbghXD5ljypYj016RRORXra?dl=0>

• セミナーウェブサイト

<http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/104.html>

• セミナー写真

<https://www.dropbox.com/sh/ecw21sm50uwg81g/AADI4QjxS3PPcHeM6liBoBg3a?dl=0>

• シンポジウム内容のビデオ記録

DVDを添付

「台湾文化光点事業計画——台湾の客家」

委 託 者：The Ministry of culture, ROC (Taiwan) CHU WEN CHING

担当教員：河合洋尚

実施機関：2015年1月1日～2015年12月31日

目的と概要

本年度は、台湾文化のうち「客家文化」をテーマとし、講演会、映画祭、芸術祭など5つの関連イベントを開催した。そのうち最も多くの観客を動員した『一八九五』をはじめ、延べ人数1000名近くの来館者が台湾客家文化に

触れた。そのうちの大多数は研究者ではなく一般市民であり、日本における台湾客家文化の宣伝と普及に貢献できたと考えている。各イベントの質疑応答および終了後には、市民からの積極的な質問もあり、例えば11月29日に開催した最後のワークショップでは、終了後も質問が終わらず時間を延期したほどであった。映画祭と芸術イベントについてはアンケート調査も実施したが、概して満足度も高かったといえる。

実施状況

台湾客家文化について実施したイベントの内容は、以下の通りである。

① ウィークエンドサロン「台湾客家——日本、アメリカへの移住」（4月12日実施）

講演者は、本プロジェクトの企画者である河合洋尚であり、今年度開催する4つのイベントの基礎知識として、台湾の客家をめぐる基礎知識、及び台湾客家の特に日本、アメリカへの移住の状況について解説した。とりわけ日本とアメリカに移住した台湾客家の研究は世界的にもほとんど存在していない。それゆえ、本講演は、河合が近年実施している最新のデータでもって、台湾、日本、アメリカの客家について一般向けに解説をおこなった。

② 講演会「台湾客家文化を学ぶ」（7月11日実施）

この講演会では、本館の須藤健一館長が開幕の挨拶を、河合が趣旨説明をおこなったあと、3名の講演者により台湾客家文化の紹介をおこなった。3名の講演者は、いずれも台湾の客家地域で長年フィールドワークをおこなってきた研究者である。

1つ目の講演は、元日本文化人類学会会長である渡邊欣雄教授による「客家文化と台湾——70～80年代の調査経験から」である。渡邊教授は、1970年代後半から台湾南部の客家地域でフィールドワークをおこなってきており、当時の台湾客家の生活文化について多くの記録を残している。渡邊教授は、先行研究を批判的に検証しつつ、当時の台湾客家文化がどのようなものであったかを写真付きで説明した。1970年代から80年代にかけては、台湾の客家研究がそれほど多くない時期であり、しかも文化人類学の視野から当時の客家社会を記録する研究は一部のアメリカ人、日本人研究者に委ねられていた。渡邊教授の講演は、当時のデータを研究者や一般の人々に伝えるという意味でも貴重であった。

続く2つの講演は、21世紀に入り台湾客家地域でフィールドワークをおこなった若い研究者による報告であった。2つ目の講演は、横田祥子助教による「客家人国際結婚事情——台湾とインドネシアを結ぶ縁」である。この講演は、台湾で近年増加している東南アジアからの女性と台湾客家男性との結婚に注目したもので、台湾とインドネシアの両地の状況から国際結婚の現状を説明した。横田助教は、台湾客家社会においてはインドネシア女性を嫁にとる比率が高いことを指摘し、その要因として、台湾客家の男性がインドネシアの客家女性との結婚を望むという「客家性の強調」という側面を説明した。

3つ目の講演は、建築学者である長野真紀助教による「台湾客家の住まい——集落形態と居住文化」である。この講演は、台湾の村落空間構造に着目することで、台湾の客家文化を紹介するという趣旨で進められた。長野助教は、周囲の環境や民族関係により、台湾の客家集落はいくつかの類型に分かれることを説明した後、中部の客家村落の空間構造を詳細に説明することで、背後の文化的意味を説明した。特に興味深かったのは、台湾中部のある村落の空間構造が、中国大陸の客家地域である梅州に広がる伝統住宅・囲籠屋の空間構造と極めて似ているということである。客家文化というと、円形土楼や囲籠屋といった囲い込み型の住宅が有名であるが、同様の建築は台湾の客家社会には存在しないと言われてきた。しかし、家屋と家屋を比較するのではなく、家屋と村落構造を比較した場合、両者の背景には似通った思想的コンセプトがあるということが明らかになった。

③ 講演会「日本の客家——歴史と現在」（9月5日開催）

この講演会は、日本の客家研究者でなく、日本に在住する客家に日本の客家について語る目的で開催した。日本の客家団体に所属する成員は、98%以上が台湾に出自をもつ客家である。日本の客家団体である全日本崇正会連合総会会長、日本関西崇正会、日本関東崇正会には共催単位になってもらった。講演会では、まず本館館長の須藤健一、全日本崇正会連合総会会長の陳荊芳氏の挨拶の後、河合が趣旨説明をおこなった。続いて、日本関東崇正会の周子秋会長、元宝塚歌劇団女優である謝珠栄氏に講演をお願いした。

周子秋の発表題目は「日本客家の歩み——客家在日70年の歴史をたどる」であり、日本の客家の軌跡について語っていただいた。日本では、女優の余貴美子氏の祖父である余家麟氏が初代会長となり、1945年に初の客家団体である客家公会が成立した。その後、客家公会は自然消滅するが、丘逢甲の息子である丘念台の働きかけにより、東京崇正会が成立する。その後、日本で客家団体が次々と成立していくことになるが、周氏は、その歴史と現在の活動について紹介した。

他方で、謝珠栄氏は、日本生まれの客家二世としての立場から客家とのかかわりやアイデンティティについて

語った。謝氏は宝塚歌劇団を引退後、多くの歌劇のプロデュースに関わっており、いくつもの賞を受賞している。謝氏は、「私と客家」として題して、子供の頃は客家としてのアイデンティティを全くもたなかったのが、関西崇正会の会長である父の影響を受け、客家としての自覚に芽生えていたライフストーリーについて語った。謝氏は、歌劇『客家』に代表されるように、客家としての自己とパーソナリティをいかに作品に投影してきたかを話した。

日本において日本客家の研究はほとんどなく、この講演会は日本の客家を知り記録するうえでの学術的価値があった。さらに、それだけでなく、日本の一般市民に日本の客家の足跡を理解していただくいい機会となった。この講演会については新聞の報道もあり、雨天であったにもかかわらず、第5セミナーの定員を超える人々が集まった。

また、9月6日は第7セミナー室をまるごと展示場にし、日本の客家、および台湾の客家に関する展示会もおこなった。来館者は、この日しか見ることができない展示を手にとって真剣に見ており、概して盛況であった。

④ 映画祭『一八九五』（9月23日開催）

9月23日には台湾で初めて客家語を中心に製作された『一八九五』を上映した。司会を本館教授の野林厚志が務め、映画の内容とそれと関係する客家文化の意味について、河合洋尚が解説した。

この映画は本邦初公開であったこともあり、『産経新聞』『毎日新聞』『大阪日日新聞』『中日新聞』などのメディア媒体が事前に大々的に報道した。特に、『産経新聞』は、森嶋外役を演じた貴島功一朗氏へのインタビューを通して、添付資料にあるように大きくとりあげた。その縁で、貴島氏にはこの映画祭でサプライズ登場し、映画の紹介をしてもらうことができた。後述の通り、映画祭は主催者の予想をはるかに上回る盛況ぶりであった。

⑤ 学術公演「伝統と創意——台湾客家の工芸と音楽」（11月28日開催）、および国際ワークショップ「台湾の客家文化産業——音楽と工芸」（11月29日開催）

11月28日、29日の2日連続で、台湾客家の音楽と工芸を紹介するイベントをおこなった。このイベントでは、台湾から約10名の工芸家や音楽家を招へいし、台湾の芸術について紹介をおこなった。

まず、28日に開催した「伝統と創意——台湾客家の工芸と音楽」では、台湾南部の美濃から10名ほどのアーティストを招聘し、客家の工芸（紙傘、藍染）、音楽（八音、歌唱）などの紹介と実演をおこなった。紙傘は李明祥（美濃李家傘・美濃製傘工芸家）夫婦、客家藍染は洪静文（三文顔色布工房・植物染創作芸術家）、八音は、鐘彩祥（美濃竹頭背客家八音団、二弦）、鐘兆生（美濃竹頭背客家八音団、嗩吶）、黄沛文（美濃竹頭背客家八音団、胡弦）、呉佩玲（美濃竹頭背客家八音団、二弦）、鍾佳佑（美濃竹頭背客家八音団、銅鑼）、客家歌唱は、羅思蓉（羅思蓉与毛頭楽団、歌手）、黄宇燦（羅思蓉与毛頭楽団、ギター）を招待した。このイベントでは、台湾でも失われている伝統文化がいかに創作と刷新を通して継承されているかについて紹介した。

次に、29日には、前日に実演と紹介をおこなった芸術家たちと交流する目的でワークショップをおこなった。このワークショップでは、高雄師範大学の洪馨蘭が「台湾の客家文化産業——過去・現在・未来」と題する基調講演をおこない、現在の台湾における客家文化産業についての現状の紹介、および現在抱える課題について論じた。続いて、28日に出演した4名の工芸家と音楽家が各自のライフストーリーを話し、それに基づいて台湾の伝統客家文化についての現状や課題について議論をおこなった。また、美濃で客家文化を推進するNGO団体である美濃愛郷協進会のプロジェクト・マネージャーである李玄斌氏が異なる立場から台湾の客家文化産業について述べた。

6名の語りと議論を受け、総合討論では活発な議論がおこなわれた。

成果

開催した5つのイベントは、ともに台湾客家にテーマを絞り紹介・解説をおこなうというものであった。そのうち、先の3つは講演会の形式をとったが、いずれも多くの来館者が足を運んだ。

まず、4月12日の講演会では、約35名の聴衆が集まり、台湾客家とその移住についての理解を深めた。聴衆の大半は展示に来ていた来客であったが、日本やアメリカの移住に関する研究は上述の通りほとんどないので、数名の研究者も遠くから足を運んだ。

次に、7月11日の講演会では、国立民族学博物館で最も広いセミナー室を利用したが、満室に近い盛況であった。大半が台湾文化に関心をもつ一般聴衆であったが、一部には研究者や日本の客家もあり、多方面の方々に関心をもって参加していただくことができた。3つの講演に関しては聴衆からの反響も大きく、例えば、国際結婚により台湾客家社会でインドネシア人がどのようにみられるのか、中国の客家建築と台湾の村落構造は出身地でつながっていないのになぜ似ているのかなど、研究者や一般の参加者から多くの質問がでた。

広報は、国立民族学博物館のホームページやフェイスブックだけでなく、当館の台湾文化ファンの集まりにイン

ターネット上でおこなった。また、台湾学会、東アジア人類学研究会などの研究者ネットワークにおいても広く紹介された。

そして、9月6日に開催した日本客家の講演会では、雨天であったにもかかわらず、90名の人々が集まった。会場に入りきらなかったため、会場の後ろに椅子を準備するほどの盛況であった。参加者のうち研究者は1割にも満たず、大半は、日本の客家、宝塚歌劇団のファン、台湾文化愛好者など、日本の客家に関心をもつ市民であった。この講演会も同様に新聞で紹介された。

今年度のイベントで最も集客数が多かったのは、本邦初公開の『一八九五』であった。開催前から新聞など各メディアで大々的に報道され、会場の定員をはるかに上回る観客が集まった。その後も『一八九五』の再放映を望む声は多く、大変な盛況ぶりであった。映画の解説後は、その内容に興味をもつ来館者から約1時間に及ぶ質問があり、「客家（文化）とは何なのか」についての関心の高まりを実感することができた。

それに比べて、11月28日に開催した芸術イベントの参加者は約80名とそれほど多くはなかった。しかし、アンケートの結果では、約55%が「大変良かった」、約40%が「良かった」と内容に関する評価は非常に高かった。そのため、11月29日の国際ワークショップは学術会議の形式をとったにもかかわらず、第4セミナーがほぼ満室になるほど参加者が多かった。会議終了後は、閉館の時間が過ぎても話者との対話を希望する市民が多く、充実した内容の国際ワークショップとなった。

民間などの研究助成金などによる研究活動

・寄附金

椿原敦子外来研究員研究助成金（公益信託 澁澤民族学振興基金）	——	椿原敦子
山本文子外来研究員研究助成金（公益信託 澁澤民族学振興基金）	——	山本文子
順益台湾原住民博物館研究賛助金	——	順益台湾原住民博物館
菊澤律子准教授研究助成金	——	（株）エデュケーショナル・デザイン
2015年特別展「韓日食博」に係る助成金	——	公益財団法人 日韓文化交流基金
KOREA FOUNDATION 特別展助成金	——	韓国国際交流財団

2-3 研究成果の公開

刊行物

●国立民族学博物館研究報告

40巻1号（2015年6月12日発行）

・論文

大規模災害時における文化財レスキュー事業に関する一考察——東日本大震災の活動から振り返る

日高真吾

メディアをめぐる公共圏の検討——ベナンの視聴者参加番組の事例をとおして

田中正隆

・Special Issue

Introduction

Japan in Global Circulation: Transnational Migration and Multicultural Politics

Blai Guarné and Shinji Yamashita

Transnational Families in a Global Circulation Context: The Case of Cross-border Marriages between

Japanese Women and Pakistani Migrants

Masako Kudo

Micro-politics of Identity in a Multicultural Japan: The Use of Western Colonial Heritages among

Japanese Filipino Children (JFC)

Taichi Uchio

Transnational Labor Migration in Japan: The Case of Korean Nightclub Hostesses in Osaka

Haeng-ja Chung

A Ruptured Circuit: The Economic Crisis and the Breakdown of the *Dekassegui* Migration System

Koji Sasaki

Commentary

Japan in Global Circulation: Transnational Migration and Multicultural Politics

Glenda S. Roberts

40巻2号 (2015年11月27日発行)

特集：マダム・ブラヴァツキーのチベット

• 序論 杉本良男

入口としてのカルムイク草原——19世紀前半のカルムイク人とその信仰に関する知識と記憶 —— 井上岳彦
 ブッダの世界の小さな花——エレナ・ガンの『ウトバーラ』が描くカルムイク仏教の世界 —— 高橋沙奈美
 不可視の「チベット」、可視の「チベット」——欧米と日本におけるチベット・イメージ —— 高本康子
 闇戦争と隠秘主義——マダム・ブラヴァツキーと不可視の聖地チベット —— 杉本良男

• 論文

かたちを変えていく歌詞——チベット難民社会におけるチベタン・ポップの作詞実践を事例に —— 山本達也

• 研究ノート

Reinterpretation of the Ramayana in Indonesia: A Consideration of the Comic Works of R. A. Kosasih
 ————— MadokaFukuoka

40巻3号 (2016年1月27日発行)

• 論文

オーストラリア・アジア系専門職移民の文化・社会参加戦略——ある作家の自叙伝と文化・社会活動に注目して
 ————— 石井由香

• 書評論文

壮族の「民族英雄」儂智高に関する研究の動向と問題点 —— 塚田誠之

• 研究ノート

赤子と母のいのちを守るための江戸時代の民間療法 —— 沢山美果子
 The Role of Meals in the Well-being of American and Japanese Elderly: Meal Programs at Senior
 Centers and Senior Day-service Centers —— Mariko Fujita-Sano

40巻4号 (2016年3月31日発行)

• 論文

博物館におけるLED照明の現状——2015年夏 国立民族学博物館展示場での実験データから
 ————— 園田直子・日高真吾・末森 薫・奥村泰之・河村友佳子・橋本沙知・和高智美
 「アーティスト」として生きていく——ナイジェリアの都市イレ・イフェにおける「アート」のあり方
 ————— 緒方しらべ

• 研究ノート

イスラエル・ガリラヤ地方のアラブ人市民にみられる豚肉食の現在——キリスト教徒とムスリム、ユダヤ
 教徒の相互的影響 —— 菅瀬晶子

● Senri Ethnological Studies

No.91 (2015年7月31日発行)

Kyonosuke Hirai (ed.) *Social Movements and the Production of Knowledge: Body, Practice, and Society in East Asia*

No.92 (2016年3月31日発行)

Yuki Konagaya, Olga Shaglanova (eds.) *Northeast Asian Borders: History, Politics, and Local Societies*

● Senri Ethnological Reports (国立民族学博物館調査報告)

No.130 (2015年11月27日発行)

娜仁格日勒編 『梅棹忠夫の内モンゴル調査を検証する』

No.131 (2015年11月30日発行)

齋藤玲子編 『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題——国立民族学博物館所蔵のイヌイットおよび北西海岸先住民の版画コレクションをとおして』

No.132 (2015年12月1日発行)

岸上伸啓編 『環北太平洋地域の先住民文化』

No.133 (2016年1月25日発行)

Terada Yoshitaka (ed.) *An Audiovisual Exploration of Philippine Music: The Historical Contribution of Robert Garfias*

No.134 (2016年3月7日発行)

中川 裕・遠藤志保編 『国立民族学博物館所蔵 鍋沢元蔵ノートの研究』

No.135 (2016年3月8日発行)

Шагланова Ольга А. и Сасаки Сиро (ред.) *Культура народов Сибири и Дальнего Востока в музейных коллекциях России и Японии методы сбора, учета, хранения и экспозиции*

No.136 (2016年3月22日発行)

河合洋尚・飯田 卓編 『中国地域の文化遺産——人類学の視点から』

●民博通信

No.149 (2015年6月30日発行)

評論・展望「新たなサブスタンスとつながりの再配置——インドの生殖医療のフィールドから」 松尾瑞穂

No.150 (2015年9月30日発行)

評論・展望「帰納的アプローチと演繹的アプローチの統合——アンデス考古学からの視点」 関 雄二

No.151 (2015年12月24日発行)

評論・展望「世界の屋根の言語事情・研究事情——系統を越えた言語接触の現場」 吉岡 乾

No.152 (2016年3月30日発行)

評論・展望「ミュージアムの中の古代アメリカ文明」 鈴木 紀

●国立民族学博物館論集

No.4 (2016年3月31日発行)

佐々木史郎・渡邊日編 『ポスト社会主義以後のスラヴ・ユーラシア世界——比較民族誌的研究』 東京：風響社

●研究年報2014 (2015年12月25日発行)

●外部出版

藤本透子編 『現代アジアの宗教——社会主義を経た地域を読む』 横浜：春風社 (2015年5月31日刊行)

竹沢尚一郎編 『ミュージアムと負の記憶——戦争・公害・疾病・災害：人類の負の記憶をどう展示するか』 東京：東信堂 (2015年10月20日刊行)

山中由里子編 『<驚異>の文化史——中東とヨーロッパを中心に』 名古屋：名古屋大学出版会 (2015年11月10日刊行)

中谷文美・宇田川妙子編 『仕事の人類学——労働中心主義の向こうへ』 京都：世界思想社 (2016年3月17日刊行)

河合洋尚編 『景観人類学——身体・政治・マテリアリティ』 東京：時潮社 (2016年3月24日刊行)

丹羽典生編 『<紛争>の比較民族誌——グローバル化におけるオセアニアの暴力・民族対立・政治的混乱』 横浜：春風社 (2016年3月30日刊行)

塚田誠之編 『民族文化資源とポリティクス——中国南部地域の分析から』 東京：風響社 (2016年3月30日刊行)

●共同研究の成果

広瀬浩二郎著 『身体でみる異文化——目に見えないアメリカを描く』 (臨川選書31) 京都：臨川書店 (2015年4月8日刊行)

* 共同研究「触文化に関する人類学的研究——博物館を活用した“手学問”理論の構築」(2012~2014年度)

Crispin Bates & Minoru Mio (eds.) *Cities in South Asia* London: Routledge (2015年4月29日刊行)

* 共同研究「南アジアにおける都市の人類学的研究」(2006～2009年度)

藤本透子編『現代アジアの宗教——社会主義を経た地域を読む』横浜：春風社(2015年5月31日刊行)

* 共同研究「内陸アジアの宗教復興——体制移行と越境を経験した多文化社会における宗教実践の展開」(2010～2012年度)

山中由里子編『＜驚異＞の文化史——中東とヨーロッパを中心に』名古屋：名古屋大学出版会(2015年11月10日刊行)

* 共同研究「驚異譚にみる文化交流の諸相——中東・ヨーロッパを中心に」(2010～2013年度)

浮ヶ谷幸代編『苦悩とケアの人類学——サファリングは創造性の源泉になりうるか?』京都：世界思想社(2015年12月17日刊行)

* 共同研究「サファリングとケアの人類学的研究」(2009～2012年度)

橋本裕之・林勲男編『災害文化の継承と創造』京都：臨川書店(2016年2月29日刊行)

* 共同研究「災害復興における在来知——無形文化の再生と記憶の継承」(2012～2014年度)

中川裕・遠藤志保編『国立民族学博物館所蔵 鍋沢元蔵筆録ノート研究』(Senri Ethnological Reports No.134) 大阪：国立民族学博物館(2016年3月7日刊行)

* 共同研究「アイヌ語を中心とする国立民族学博物館所蔵北方諸言語音声資料の分析」(2007～2009年)

中谷文美・宇田川妙子編『仕事の人類学——労働中心主義の向こうへ』京都：世界思想社(2016年3月17日刊行)

* 共同研究「ジェンダー視点による「仕事」の文化人類学的研究」(2008～2011年度)

河合洋尚編『景観人類学——身体・政治・マテリアリティ』東京：時潮社(2016年3月24日刊行)

* 共同研究「ランドスケープの人類学的研究——視覚化と身体化の視点から」(2012～2014年度)

丹羽典生編『＜紛争＞の比較民族誌——グローバル化におけるオセアニアの暴力・民族対立・政治的混乱』横浜：春風社(2016年3月30日刊行)

* 共同研究「オセアニアにおける独立期以降の＜紛争＞に関する比較民族誌的研究」(2009～2012)

塚田誠之編『民族文化資源とポリティクス——中国南部地域の分析から』東京：風響社(2016年3月30日刊行)

* 共同研究「中国における民族文化の資源化とポリティクス——南部地域を中心とした人類学・歴史学的研究」(2009～2012年度)

佐々木史郎・渡邊日日編『ポスト社会主義以後のスラヴ・ユーラシア世界——比較民族誌的研究』(国立民族学博物館論集④) 東京：風響社(2016年3月30日刊行)

* 共同研究「ポスト社会主義以後の社会変容——比較民族誌的研究」(2008～2011年度)

桑山敬己編著『日本はどのように語られたか：海外の文化人類学的・民俗学的日本研究』京都：昭和堂(2016年3月31日刊行)

* 共同研究「海外における人類学的日本研究の総合的分析」(2010～2013年度)

国立民族学博物館学術情報リポジトリ

「みんなくりポジトリ」は、一般公開後6年が経過した。今年度も、恒常的な館内刊行物の登録を継続するとともに、『研究年報2013』の掲載業績を基に個人業績の抽出・許諾・登録作業を行った。今年度新たに登録したコンテンツは303件で、2016年3月末のコンテンツ登録数は4,807件となった。過去のコンテンツの公開許諾は、著者本人から許可が下りても出版社から取得しにくいのが問題ではあるが、今後も、年間200件以上の登録を目指している。

コンテンツのダウンロード数は、2015年度は年間750,000件に達している。前年度と比較して、月平均も10,000ダウンロード以上増加しており、「みんぱくりポジトリ」に対する認知度の高さが安定していることがうかがえる。

「みんぱくりポジトリ」は国際的にも評価は高く、スペイン高等科学研究院 CSICがおこなっているリポジトリの定量的総合評価では、日本298機関中61位、世界2,297機関中839位にランキングされた。

また、今までの館内サーバーで運用していた「みんぱくりポジトリ」(DSpace) から NII (国立情報学研究所) の JAIRO Cloud (共用リポジトリサービス) を利用した人間文化研究機構の「機構リポジトリ」への移行が順調に完了し、2016年2月17日から正式に公開の運びとなった。

学術講演会

●みんぱく公開講演会

「育児の人類学、介護の民俗学——フィールドワークによる再発見」

実施日 2015年11月13日

場 所 日経ホール (東京)

共 催 日本経済新聞社

参加者 366人

講演1 「心に寄り添う子育てとは?——遊びと学びのすごろくワールド」

講 師 信田敏宏

内 容 「心に寄り添う」「共感する」をモットーに取り組んできた我が家の子育て。ダウン症のある娘の心が清らかに成長していくプロセスを語る。人類学者として、父親として、これからの社会はどうあるべきか、心豊かで幸せな人生を送るために必要なこととは何かを問いかけた。

講演2 「聞き書きで介護の世界が変わっていく——介護民俗学の実践から」

講 師 六車由実 (デイサービス「すまいるほーむ」管理者・生活相談員、民俗学者)

内 容 民俗学の「聞き書き」の手法を介護現場で試みていくと、閉塞的だった介護の世界が少しずつ変化していった。それまで介護する／されるという非対称的な関係に固定されていた介護職員と利用者との関係が、教えられる／教えるという関係に逆転し、さらに利用者同士もそれぞれの人生に共感し、互いに思いやる関係に深まっていったのである。介護民俗学の実践を通して、人が最期まで人として生きられる、希望のある介護の在り方を探った。

パネルディスカッション

鈴木七美×信田敏宏×六車由実

司 会 南 真木人

内 容 ダウン症のある子どもを療育する人類学者と介護施設で働きながらお年寄りの話を聞き書きする民俗学者。そこには障がいのある子どもの家族や認知症、介護の現場などにつきまとう否定的なイメージを払拭するばかりか、多様な人びとが暮らしやすい社会を実現する新たな可能性が見えてきた。育児と介護の現場におけるフィールドワークから、少子高齢化をむかえた日本社会のゆくえを探った。

(講演と討論は、一部編集を経て2016「みんぱく公開講演会「育児の人類学、介護の民俗学」より」『季刊民族学』156号、61-81頁に掲載された。)

「ワールドアートの最前線——アイヌの文様とエチオピアの響き」

実施日 2016年3月25日

場 所 オーバルホール (大阪)

共 催 毎日新聞社

参加者 271人

講演1 「アイヌの衣服の素材と文様」

講 師 佐々木史郎

内 容 最近の研究では、北海道に暮らすアイヌの人々の間でも江戸時代初期から絹や木綿の衣服と布地が流入して、晴着やその文様にふんだんに使われていたことがわかってきた。しかも、時代を遡るほどよい素材が使われる傾向にある。この講演では、北海道とロシアの博物館に収蔵されているアイヌの古い衣服から、その素材と文様の歴史を追った。

講演2 「職能者からアーティストへ——世界に羽ばたくエチオピアの楽師たち」

講師 川瀬 慈

内容 古よりエチオピア北部の社会において音楽を担ってきた楽師アズマリは、近年ポピュラーミュージックの世界やエチオピア国外の音楽シーンにおいても活躍するようになった。地域社会の職能者から“表現者／アーティスト”まで姿を変えつつ、グローバルに活動する彼らを紹介した。

パネルディスカッション

上羽陽子×佐々木史郎×川瀬 慈

司会 丹羽典生

内容 ワールドアートとは、近年のアート（芸術）研究の流れのなかから生み出された言葉である。この言葉は、西洋中心の芸術概念に偏重する傾向のあった従来の研究を反省し、批判的にとらえて、アートという枠組み自体を考え直していこうとする人びとによって使われている。そこでは、従来ではとてもアートとは考えられてこなかったものまで積極的に取り扱われるようになってきている。たとえばこれまでは、むしろ人類学、考古学といった学問分野の対象となるようなものであったり、工芸、手芸など作品としての質の高さは認められながらも芸術品として扱われなかったようなさまざまな事物を旺盛に研究の対象に取り込んでいる。

現在のアート（芸術）の世界でどのような変化が起きているのか、その変化と現在の姿、さらには将来について、日本と海外のデザインや音楽を対象に、アートという概念自体やその境界を問い直す、ワールドアートの動向について、紹介した。

2-4 学会開催

学会開催

2015年5月29日 日本文化人類学会課題研究懇談会「医療人類学教育の検討」

開催場所：国立民族学博物館第六回研究会 第4セミナー室

2015年5月30日～31日 国立民族学博物館主催：日本文化人類学会第49回研究大会

開催場所：大阪国際交流センター

2015年9月20日～21日《機関研究成果公開》「みんなく手話言語学フェスタ2015」

開催場所：国立民族学博物館

2015年9月25日～9月27日 How Do Biomedicines Shape Life, Sociality and Landscape?

Venue: Conference Room 4, National Museum of Ethnology, Osaka

2015年11月22日 日本文化人類学会第四次世代育成セミナー

開催場所：国立民族学博物館 第3・第4セミナー室

2016年1月9日 「みんなくセミナー「通訳学☆最前線」」

開催場所：国立民族学博物館 第4セミナー室

2-5 研究員制度

外来研究員

BULIAN, Giovanni (ブリアン ジョヴァンニ) イタリア ヴェネツィア大学アジア・北アフリカ研究学部研究員

研究課題：日本の村落地域における在来気象知識の研究

CHOI, Hye Eun 崔 慧銀 (チェ ヘウン) 韓国 ウィスコンシン大学マディソン校歴史学科博士後期課程 (Ph.D.Candidate)

研究課題：日帝時代における韓国大衆音楽の形成：レコード産業を中心にした研究

COUCHONNAL CANCIO, Ana Ines (コウチョナル カンシオ アナ イネス) アルゼンチン 国立サンマルティン大学人文科学研究科非常勤講師

研究課題：植民地期パラグアイの宣教政策における先住民言語——17・18世紀のグアラニ語の適応と葛藤

DAHL SHAYNE (ドール シェーン) カナダ トロント大学大学院人類学部博士課程

研究課題：東日本大震災発生以降の山岳宗教と巡礼——山形県出羽三山信仰をめぐって

ERTL, John (アートル ジョン) 米国 金沢大学外国語教育研究センター／国際文化資源学センター准教授

研究課題：考古学の民族誌：考古学的知識の多様な形成・利用・変成過程の研究

GEOFFREY Frank Humble (ジェフリー フランク ハンブル) 英国 バーミンガム大学博士課程

研究課題：元史における民族アイデンティティの語り——オゴデイ・カアンンの治世

KIM, Wolduk 金 月徳 (キム ウォルドク) 韓国 全北大学校人文大学国語国文学科講師

研究課題：民俗文化の解釈と変容についての談論の検討

KURNIASIH Sukenti (クルニアシ スケンティ) インドネシア ブラウイジャヤ大学生物学科博士課程

研究課題：インドネシア西ヌサトゥンガラ諸島ロンボック島におけるササク族の伝統的食文化に関する民族植物学的研究

LEE, Young-Mi 李 英美 (イ ヨンミ) 韓国 国立アルティプラノ大学人類学科専任講師

研究課題：在日ペルー人の文化的アイデンティティの変化と社会的ネットワークの関係に関する研究

LIN, Liying 林 麗英 (リン レイエイ) 台湾

研究課題：グローバル化のなかの台湾の原住民族文化遺産の保存と継承についての考察

MARZEC AGNIESZKA (マジェッツ アグネシカ) ポーランド

研究課題：異文化接触場面におけるコミュニケーション・ストラテジー～在日外国人を中心に～

McGUIRE, Jennifer Mary (マグワイア ジェニファー メアリー) 米国 日本学術振興会外国人特別研究員 (欧米短期)

研究課題：違いを受け入れる——日本の一般学校におけるろうおよび難聴の生徒と教育制度

NARAN 娜然 (ナラン) 中国

研究課題：環境政策実施後の内モンゴルにおける牧畜の変化と土地劣化

野中 アンジェラ 美雪 (ノナカ アンジェラ ミユキ) 米国 テキサス大学オースティン校社会福祉事業学部助教

研究課題：日本手話における敬語表現の研究

SAUCEDO SEGAMI Daniel Dante (サウセド セガミ ダニエル ダンテ) ベルー 同志社大学グローバル地域文化学部非常勤講師／摂南大学外国語学部非常勤講師

研究課題：現代ペルーにおける文化遺産の活用に関する文化人類学研究

SCHROEDER, Anja (シュローダー アニヤ) ドイツ カイザースラウテルン大学戦略マネジメント学科ポスドク／日本学術振興会外国人特別研究員 (欧米短期)

研究課題：巨大災害の経験を生かしたリスク管理における空間マネジメント

YAMADA, Naomi 山田 ナオミ (やまだ なおみ) 米国 中央大学総合政策学部非常勤講師

研究課題：中国の教育現場における民族起源の表象に関する教育人類学的研究

YOTOVA, Mariya Ivanova (ヨトヴァ マリア イヴァノヴァ) ブルガリア 総合研究大学院大学文化科学研究科
博士後期課程修了

研究課題：バルカン地域における社会経済変動と文化変容

ZHAO, Furong 趙 芙蓉 (ジャオ フーロン) 中国 京都大学大学院人間・環境学研究科共生文明学専攻博士後期
課程修了

研究課題：北アジアにおけるシャマニズムの再活性化に関する人類学的比較研究

YIMIN 伊敏 (イミン) 中国 滋賀県立大学大学院人間文化学研究科博士後期課程単位修得退学

研究課題：中国における少数民族言語地名の漢字表記にみる歴史と文化——内モンゴル地域におけるモンゴル語
と満洲語の地名を中心に

KIM, Satbyul 金 セッピーオル (キム セッピーオル) 韓国 総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程単位修
得退学

研究課題：韓国における国家主導型の自然葬の形成に関する人類学的研究

WU, Tianyue 吴 天躍 (ゴ テンヤク) 中国 中国中央美术学院人文学院博士生

研究課題：仏教的文化遺産保護に関する日中比較研究——景観人類学の視点から

TANG, SHAOLING 湯 紹玲 (トウ ショウレイ) 中国 滋賀県立大学大学院人間文化学研究科博士後期課程単位
修得退学

研究課題：日本の盆行事と中国の中元節の比較研究

相島葉月 (あいしま はつき) 日本 英国マンチェスター大学人文学部中東研究学科講師

研究課題：現代エジプトのオルタナティヴ・モダニティとしての空手実践に関する社会人類学的研究

浅見恵理 (あざみ えり) 日本 明治大学校地内遺跡調査団短期嘱託職員

研究課題：地域社会の発展と独自性の形成過程——チャンカイ文化の世帯考古学的研究

荒田 恵 (あらた めぐみ) 日本

研究課題：アンデス形成期祭祀遺跡における工芸品製作

飯塚真弓 (いづか まゆみ) 日本 高崎経済大学助手／研究員

研究課題：南インドのヒンドゥー寺院からみるトランスナショナリズムと宗教実践をめぐる人類学的研究

飯田淳子 (いいた じゅんこ) 日本 川崎医療福祉大学医療福祉学部准教授

研究課題：医療者向け医療人類学教育の検討：保健医療福祉専門職との協働

石森大知 (いしもり だいち) 日本 武蔵大学社会学部准教授

研究課題：宗教の開発実践と公共性に関する人類学的研究

市野澤潤平 (いちのざわ じゅんぺい) 日本 宮城学院女子大学学芸学部准教授

研究課題：確率的事象と不確実性の人類学：「リスク社会」化に抗する世界像の描出

猪股(松井)智子 (いのまた(まつい) ともこ) 日本

研究課題：女性移民・人身売買被害者支援運動の変容とその多元的リアリティの解明：タイを事例に

今中崇文 (いまなか たかふみ) 日本 摂南大学外国語学部、看護学部非常勤講師／大阪人間科学大学非常勤講師

研究課題：中国陝西省西安市における回族の宗教指導者をめぐる人類学的研究

岩谷洋史（いわたに ひろふみ） 日本 神戸大学国際文化学部非常勤講師／立命館大学理工学部非常勤講師／関西大学文学部非常勤講師

研究課題：人類学におけるフォト・エスノグラフィーの手法の探求

内田修一（うちだ しゅういち） 日本 総合研究大学院大学博士課程単位修得退学

研究課題：都市的環境におけるソンガイの精霊憑依の実践

梅津綾子（うめつ あやこ） 日本 埼玉大学教養学部非常勤講師

研究課題：親子・家族概念の再考——ナイジェリアの里親養育と日本のセクシュアル・マイノリティの家族を事例に

太田好信（おおた よしのぶ） 日本 九州大学大学院比較社会文化研究院教授

研究課題：政治的分類——被支配者の視点からエスニシティ・人種を再考する

大場千景（おおば ちかげ） 日本 メケレ大学外国語学部非常勤講師

研究課題：エチオピア南部、ボラナにおける口頭年代史

岡田浩樹（おかだ ひろき） 日本 神戸大学大学院国際文化学研究科准教授

研究課題：宇宙開発に関する文化人類学からの接近

緒方(浜田)しらべ（おがた(はまだ) しらべ） 日本 大阪大学外国語学部非常勤講師

研究課題：「アート」の生産と受容に関する人類学的研究——ナイジェリア国内都市の事例から

岡本尚子（おかもと なおこ） 日本 国際基督教大学高等学校教務員

研究課題：『千一夜物語』仏語訳者マルドリユス再考——「〈遺贈コレクション〉」の分析を中心に

小野林太郎（おの りんたろう） 日本 東海大学海洋学部専任講師

研究課題：アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類史的研究：資源利用と物質文化の時空間比較

小尾 淳（おび じゅん） 日本 大東文化大学国際関係学部研究補助員

研究課題：インドの宗教歌謡「キールタン」の環流とソーシャルメディアの役割

鏡味治也（かがみ はるや） 日本 金沢大学人間社会研究域人間科学系教授

研究課題：生活用品から見たライフスタイルの近代化とその国別差異の研究

加賀谷真梨（かがや まり） 日本

研究課題：高齢者介護と相続の相関にみる沖縄の「家族」に関する人類学的研究

登 久希子（のほり くきこ） 日本 大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程単位修得退学

研究課題：現代美術の人類学：作品の一時性とアーカイヴをめぐる

金谷美和（かねたに みわ） 日本 京都大学地球環境学堂三才学林研究員／大阪芸術大学芸術学部非常勤講師

研究課題：インド災害後のローカル文化再編におけるコミュニティ資源としての「手工芸」の意義

川田牧人（かわだ まきと） 日本 成城大学文学部教授

研究課題：呪術的实践＝知の現代的位相——他の諸実践＝知との関係性に着目して

神田每実（かんだ つねみ） 日本 愛知県立芸術大学美術学部教授

研究課題：造形美術様式と風土の関係

菊田 悠（きくた はるか） 日本 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター非常勤研究員
研究課題：「中央アジア」セクションの更新とウズベキスタン独立後の社会変化

熊谷瑞恵（くまがい みずえ） 日本 ウイグル・アカデミー外国人研究員
研究課題：牧畜民と言語情報をめぐる人類学的研究——パキスタンのワヒを対象に

窪田幸子（くぼた さちこ） 日本 神戸大学大学院国際文化学研究科教授
研究課題：表象のポリティックス——グローバル世界における先住民／少数者を焦点に

是澤博昭（これさわ ひろあき） 日本 大妻女子大学家政学部准教授
研究課題：モノにみる近代日本の子どもの文化と社会の総合的研究——国立民族学博物館所蔵多田コレクションを中心に

小林貴徳（こばやし たかのり） 日本 愛知県立大学国際文化研究科多文化共生研究所客員共同研究員／大阪経済大学人間科学部非常勤講師／摂南大学外国語学部非常勤講師／同志社大学グローバル地域文化学部非常勤講師／神戸市外国語大学外国語学部非常勤講師／関西学院大学国際学部非常勤講師／神戸大学国際文化学部非常勤講師
研究課題：メキシコにおける無形／有形文化財の観光資源化に関する研究

呉屋淳子（ごや じゅんこ） 日本 山形大学教育開発連携支援センター講師
研究課題：高等教育機関における伝統芸能の教授に関する研究

近藤 宏（こんどう ひろし） 日本 立命館大学理工学部先端総合学術研究科非常勤講師
研究課題：パナマ東部先住民エンペラにおける「共同体企業」の実践に関する人類学的研究

齋藤 剛（さいとう つよし） 日本 神戸大学国際文化学研究科准教授
研究課題：個－世界論：中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム

澤野美智子（さわの みちこ） 日本 近大姫路大学看護学部非常勤講師／西宮市医師会看護専門学校非常勤講師
研究課題：フィード（ものを食べさせる行為）に関する人類学的研究

新本万里子（しんもと まりこ） 日本 広島女学院大学国際教養学部非常勤講師／福山大学人間文化部非常勤講師／広島大学大学院国際協力研究科契約一般職員
研究課題：女性の身体をめぐる言説と消費：パプアニューギニアにおける生理用品の受容を事例に

杉島敬志（すぎしま たかし） 日本 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授
研究課題：エージェンシーの定立と作用——コミュニケーションから構想する次世代人類学の展望

鈴木博之（すずき ひろゆき） 日本 Laboratoire Parole et Langage (CNRS) PD 非常勤研究員
研究課題：言語多様性の記述を通して見る中国雲南省チベット語の方言形成の研究

瀬木志央（せぎ しおう） 日本 メルボルン大学メルボルン土地環境大学院資源管理・地理学部フェロー／ラトロープ大学フィリピン・オーストラリア研究センターリサーチ・アシリエイト／オーストラリア・カトリック大学人文・教育学部非常勤講師
研究課題：熱帯地域における海洋保護区の社会的持続性に関する研究

宗野ふもと（そうの ふもと） 日本 公益財団法人京都市景観・まちづくりセンター嘱託職員
研究課題：ウズベキスタンにおける社会変容と女性

添野 勉（そえの つとむ） 日本 成城大学社会イノベーション学部非常勤講師／城西国際大学メディア学部非常勤講師／淑徳大学国際コミュニケーション学部兼任講師

研究課題：社会集団の写真資料に対する分類・メタデータ付与手法の研究

藺田 郁（そのだ いく） 日本 大阪芸術大学音楽学科非常勤講師

研究課題：近代日本における大衆芸能の地方伝播に関する研究——人形芝居を中心に

高田絹代（たかだ きぬよ） 日本 アイヌ刺しゅう家

研究課題：アイヌ刺しゅうについて——着物の裏側の調査及び布製針刺しの調査

高橋晴子（たかはし はるこ） 日本 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター招へい教授

研究課題：服装・身装文化デジタルアーカイブ

高村美也子（たかむら みやこ） 日本

研究課題：スワヒリ地域におけるヤシ科植物の利用についての環境人類学的研究

田中鉄也（たなか てつや） 日本 日本学術振興会特別研究員

研究課題：近現代インドにおけるヒンドゥー寺院運営の意義——商業集団マールワリーを事例として

玉山ともよ（たまやま ともよ） 日本 近畿大学理工学部非常勤講師

研究課題：北米先住民聖地での地下資源開発をめぐる国際的な「協働」のありかたについての研究

辻 貴志（つじ たかし） 日本 園田学園女子大学人間健康学部非常勤講師／近畿大学経営学部非常勤講師／岡山理科大学総合情報学部非常勤講師／京都外国語大学外国語学部非常勤講師／神戸女子大学健康福祉学部特別講師

研究課題：フィリピン・パラワン島南部の焼畑農耕民の鳥の狩猟と保全に関する人類学的研究

辻 輝之（つじ てるゆき） 日本 The University of the West Indies Visiting Fellow

研究課題：宗教と移民の社会関係資本形成

辻本香子（つじもと きょうこ） 日本 総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程単位修得退学

研究課題：東アジア地域におけるリズム楽器を使用したパフォーマンスの研究

椿原敦子（つばきはら あつこ） 日本 龍谷大学社会学部非常勤講師／和歌山県立医科大学保健看護学部非常勤講師

研究課題：「言説的伝統」としてのイスラームのトランスローカリティをめぐる研究：十二イマーム・シーア派の哀悼儀礼を中心に

徳岡(七五三)泰輔（とくおか(しめ) たいすけ） 日本 株式会社タスクアソシエーツコンサルタント部コンサルタント

研究課題：参加を通じた政治実践の民族誌的研究：バングラデシュにおける参加型開発と開発援助を通じた参加型ガバナンスを事例として

土佐桂子（とさ けいこ） 日本 東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授

研究課題：「統制」と公共性の人類学的研究：ミャンマーにおけるモノ・情報・コミュニティ

中野(金澤)聡子（なかの(かなざわ) さとこ） 日本 東京福祉大学通信教育課程非常勤講師／日本社会事業大学社会福祉学部非常勤講師／広島大学アクセシビリティセンター特任講師

研究課題：言語知識の獲得と通訳作業過程に着目した学術手話通訳養成カリキュラムの開発

長坂康代（ながさか やすよ） 日本 岐阜県立多治見看護専門学校非常勤講師／愛知大学国際コミュニケーション学部非常勤講師／中部大学健康生命学部非常勤講師／金城学院大学生活環境学部非常勤講師

研究課題：ベトナムの首都ハノイにおけるストリート民衆の生活戦略に関する都市人類学的研究

長谷千代子（ながたに ちよこ） 日本 九州大学大学院比較社会文化研究院講師

研究課題：宗教人類学の再創造——滲出する宗教性と現代社会

中原聖乃（なかはら さとえ） 日本 中京大学社会科学研究所准教授

研究課題：放射線影響をめぐる「当事者性」に関する学際的研究

中村真里絵（なかむら まりえ） 日本 岡山理科大学非常勤講師／四條畷学園短期大学非常勤講師

研究課題：世界文化遺産バンチェン遺跡と地域社会：住民の生活史の視点から

奈良雅史（なら まさし） 日本 日本学術振興会特別研究員

研究課題：宗教と公共性をめぐる人類学的研究——現代中国におけるイスラーム復興運動の事例から

西本 太（にしもと ふとし） 日本 長崎大学大学院国際健康開発研究科助教

研究課題：ラオス農村社会の人口変化に関する人類学研究

長谷川 清（はせがわ きよし） 日本 文教大学文学部教授

研究課題：資源化される「歴史」——中国南部諸民族の分析から

比嘉夏子（ひが なつこ） 日本 日本学術振興会特別研究員

研究課題：社会空間の動態と行為の演劇性をめぐる人類学的研究：ポリネシアにおける贈与の全体性

廣川昌嘉（ひろかわ まさかず） 日本 アイヌ彫刻家

研究課題：彫刻と刺しゅうのアイヌ文様の相違について

福岡まどか（ふくおか まどか） 日本 大阪大学大学院人間科学研究科准教授

研究課題：東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ、国家、グローバル化

藤井龍彦（ふじい たつひこ） 日本 国立民族学博物館名誉教授／総合研究大学院大学学融合推進センター特任教授

研究課題：総研大文化科学研究科「学術資料マネジメント教育プログラム開発によるグローバルな人文研究者の養成機能強化」におけるプログラム開発事業

藤倉康子（ふじくら やすこ） 日本 The New School for Social Research (USA) Ph. D.

研究課題：ネパールにおける「家族」をめぐる政治と周縁性の人類学的研究

堀田あゆみ（ほった あゆみ） 日本 滋賀県立大学人間文化学部非常勤講師

研究課題：モンゴル遊牧民のモノをめぐる文化研究

前島訓子（まえじま のりこ） 日本 椋山女学園大学人間関係学部現代マネジメント学部非常勤講師／鈴鹿工業高等専門学校非常勤講師／岐阜大学地域科学部非常勤講師／愛知大学国際コミュニケーション学部非常勤講師

研究課題：インドにおける「聖地」の比較研究

松岡葉月（まつおか はつき） 日本

研究課題：博物館における全天周科学映像の開発および評価に関する人文・社会学的研究

松川孝祐（まつかわ こうすけ） 日本 青山学院大学経営学部非常勤講師
研究課題：ミシュテク語系トーン言語の比較研究

松嶋 健（まつしま たけし） 日本 日本学術振興会特別研究員
研究課題：社会的なるものの生態学——イタリアの社会協同組合を軸とした統治と連帯の人類学的研究

松田有紀子（まつだ ゆきこ） 日本 日本学術振興会特別研究員
研究課題：花街の担い手コミュニティの日常的実践に関する歴史人類学的研究

松平勇二（まつひら ゆうじ） 日本 日本学術振興会特別研究員
研究課題：シヨナ音楽文化と憑依儀礼の政治・宗教人類学的研究

宮本万里（みやもと まり） 日本 人間文化研究機構地域研究推進センター研究員／国立民族学博物館現代インド地域研究拠点拠点研究員／英国アカデミー Newton International Fellow
研究課題：現代ブータンの多元的宗教空間における仏教と屠畜に関する政治人類学的研究

森田剛光（もりた たけみつ） 日本 公益財団法人日本ネパール協会関西支部事務局長
研究課題：滞日ネパール人の生活実践と労働動態の研究

矢野原佑史（やのはら ゆうし） 日本 京都大学アフリカ地域研究資料センター研究員
研究課題：知識・経験・想像の共有を目指す映像人類学

山崎浩平（やまざき こうへい） 日本
研究課題：インド・ヒジュラ社会における共同性と移動の人類学研究

山本文子（やまもと あやこ） 日本 大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程単位修得退学
研究課題：現代のミャンマー・ヤンゴンにおける精霊信仰の民族誌的研究

藪中剛司（やぶなか たけし） 日本 新ひだか町教育委員会社会教育課文化財グループ主幹
研究課題：アイヌ民具の中にみられる特徴的な漆器資料の分析

吉江貴文（よしえ たかふみ） 日本 広島市立大学国際学部准教授
研究課題：近代ヒスパニック世界における文書ネットワーク・システムの成立と展開

吉田ゆか子（よしだ ゆかこ） 日本 日本学術振興会特別研究員
研究課題：バリ島の「障害」のある役者たちの演劇実践——遊戯性・あいだ性・日常との連続性

吉本康子（よしもと やすこ） 日本 神戸学院大学非常勤講師／園田学園女子大学非常勤講師／放送大学非常勤講師
研究課題：チャム系住民とイスラームとの関係に関する地域間比較研究

特別共同利用研究員

本館は、大学共同利用機関として研究活動を展開すると同時に、大学院教育の一環として、全国の国公私立大学の博士後期課程に在籍する学生を、当該大学院生の所属する大学院研究科からの委託を受けて特別共同利用研究員として受け入れ、一定の期間、特定の研究課題に関して研究指導をおこなっている。

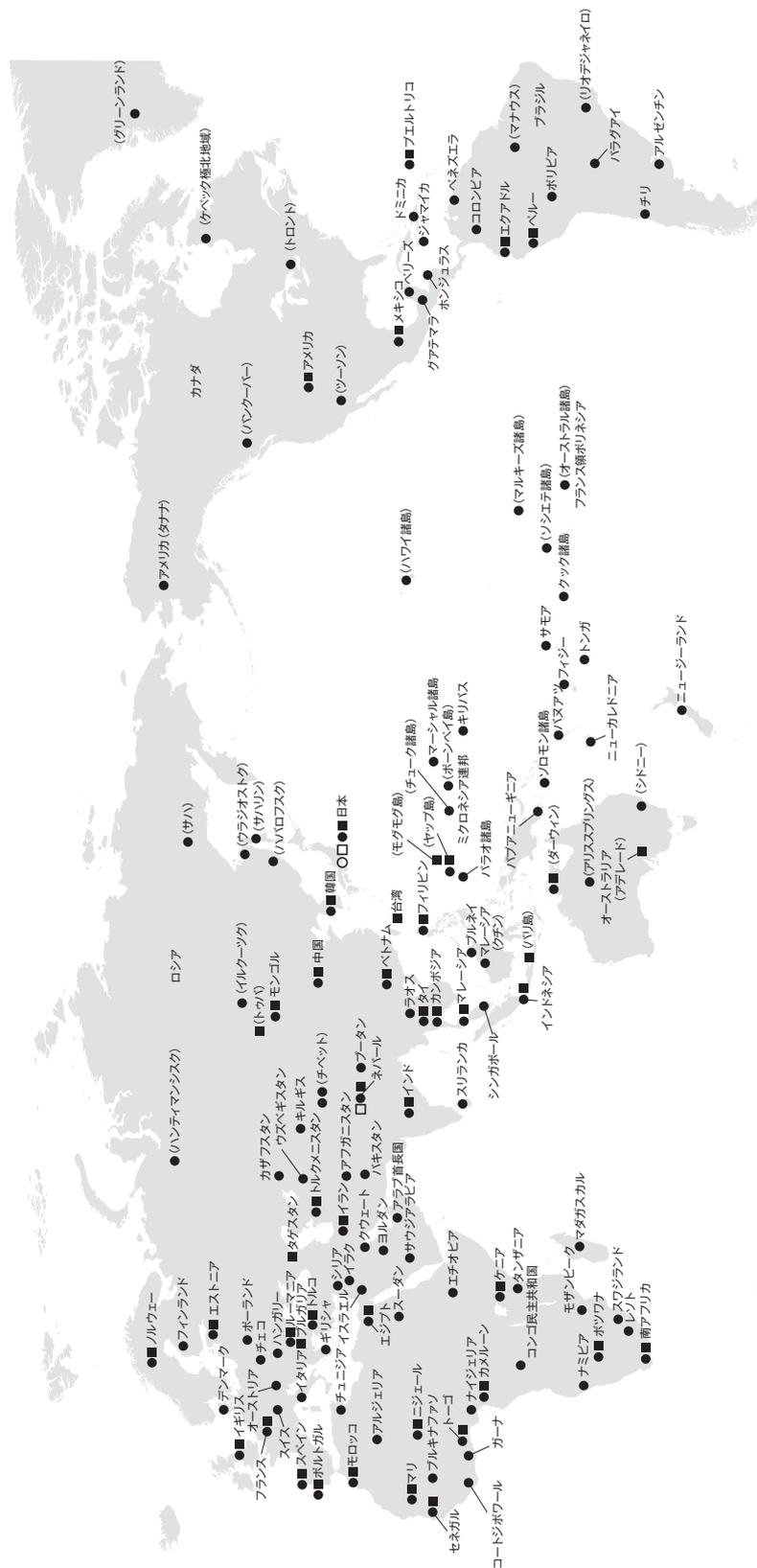
特別共同利用研究員は、各々の特定の研究課題に応じて指導教員から研究指導を受け、本館の諸施設を利用し研究を遂行するだけでなく、本館に設置されている、総合研究大学院大学文化科学研究科の講義を受けることができる。

2015年度は、国立大学1人、公立大学4人、私立大学4人、計9人の大学院生を受け入れた。

2-6 データの利用

標本資料および映像音響資料に関するデータ

● 標本資料収集および映像取材地域



- 2015年度までの標本資料調査・収集地域
- 2016年度の標本資料調査・収集計画地域
- 2015年度までの映像取材地域
- 2016年度の映像取材計画地域

研究および
共同利用

●標本資料の収集・利用状況

•2016年3月31日現在の収蔵資料数

海外資料／178,465点 (未登録資料含む) 国内資料／163,686点 (未登録資料含む) 総点数／342,151点 (未登録資料含む)

•大学・博物館等への貸し出し

総点数／1,075点

●映像音響資料の収集・利用状況

•取材

笹原亮二 愛媛県今治市、秋田県潟上市、千葉県香取郡・茨城県龍ヶ崎市、神奈川県川崎市、岩手県大船渡市
日本各地の軽業系民俗芸能

————— 2015年5月3日～5月5日、7月6日～7月8日、7月26日～7月28日、
10月4日～10月5日、10月30日～10月31日

寺田吉孝 大阪府大阪市・東京都葛飾区・荒川区、東京都小平市 在日コリアン音楽の現状

————— 2015年6月8日、6月21日、11月8日、12月25日～12月27日、
2016年1月31日、3月24日～3月25日

南 真木人 ネパール ネパール関連のビデオテーク番組制作

————— 2016年1月12日～1月25日

•2016年3月現在の収蔵資料数

映像資料／8,009点 音響資料／62,651点 総点数／70,660点

•資料の利用

利用総件数／135件 (内、大学32件) 資料利用総点数 678点 (内、大学172点)

館内利用など

利用件数／69件 資料利用点数／349点

特別利用 (館外での上映・試聴など)

利用件数／66件 資料利用点数／329点

文献図書資料の収集・整理・利用状況

●2015年度図書室の活動

1.利用者サービス

1) 4年ぶりに図書システムを更新しOPAC (蔵書検索) 等が新しく使いやすくなり、利用者が求める資料へより早くアクセスできるようになった。

2.利用者講習会の開催——教育・研究支援

- 1) 総研大新入生ガイダンス
- 2) 博物館学コース (JICA) オリエンテーション
- 3) 若手研究者奨励セミナー 等
* 随時受付のツアーも、実施している。

3.資料整備関係

- 1) 遡及入力を引き続き実施し、約10,000冊を登録した。
- 2) 研究業績棚の点検および整理業務は、207件の整理を行った。
- 3) 昨年度より5年計画で開始した蔵書実査 (3年目) として、書庫全体における不明資料の再調査に加えて、雑誌 (1層) 約6万冊に「カラーバーコード」を貼付し、総計6万2千冊の蔵書実査を行った。

4.施設整備

- 1) マイクロリーダーを新たに1台整備した。
- 2) マイクロリーダー用27インチ縦型モニターを2台整備した。
- 3) マイクロリーダー用A3対応プリンターを整備した。

5. 広報、社会貢献その他

1) 「みんぱく図書室ニュース」を月に一度発行し、図書室の情報提供を行った。

2) 中学生の職場体験学習受入れ。

箕面市立第五中学校 (2015年10月28日 2年生女子3名)

吹田市立竹見台中学校 (2015年11月11日 2年生女子2名)

茨木市立豊川中学校 (2015年11月11日 2年生男子1名)

箕面市立第一中学校 (2015年11月18日 2年生男子2名)

●2015年度新規受入数

日本語図書	2,020点	外国語図書	2,883点		
AV資料他	100点	製本雑誌	692点	合計	5,695点

●2015年3月末現在の収蔵図書数

日本語図書	268,538点	外国語図書	396,892点	合計	665,430点
日本語雑誌	10,141種	外国語雑誌	6,874種	合計	17,015種
HRAF	385ファイル	HRAF原典(テキスト)	7,141冊		

●利用状況(2015年度)

入室者	全体	12,444人
	館外者	1,663人
時間外入室者		112人
うち日曜、祝日		27人
貸出	図書	11,437冊
	雑誌	497冊
うち館外貸出図書		3,500冊
HRAF利用受付		4件
		(カウンター受付件数)

文献複写	受付	国内(うち謝絶)	1,686(218)件
		国外(うち謝絶)	65(36)件
	来室*	4,580件	
依頼	国内	250(18)件	
	国外	18(3)件	
現物貸借	受付	国内	788(34)件
		国内	267(14)件
	依頼	国外	3(0)件
事項調査	受付	51件	

*うち大学等の機関1,353件

民族学資料共同利用窓口

本館の所蔵する民族学資料は多岐に渡り、館内外における諸分野の研究や教育、他の博物館への貸し付けなどを通して社会に還元し利用されるためには、各種問い合わせに効率よく対応する必要があった。そうした観点から、2006年度から「民族学資料共同利用窓口」が設置された。

2015年度の問い合わせ利用件数は、290件であった。

問い合わせ者別	(件)
教員(大学)	40
大学院生	6
大学生	11
教員(小・中・高)	2
学生(小・中・高)	0
博物館・美術館関係	14
図書館	9
教育・研究機関	1
マスコミ関係	5
会社・団体	60
一般	68
民博教職員	74
計	290

問い合わせ者の所属機関別	(件)	
公的機関	大学・大学図書館	62
	博物館・美術館	23
	小・中・高	2
	その他教育機関	0
	研究機関	0
	公共図書館	5
	地方公共団体	18
	各種団体	1
	研究機関	0
民間	会社	40
	団体	7
	館外	69
個人	館内	63
	不明	0
	計	290

資料の利用目的

(件)

調査・研究	研究*1	69
	論文作成	6
	学習*2	0
	図書館から	8
	授業で利用	36
	その他	48
	小計	167
館内利用	刊行物作成	1
	館の事業	17
	参考資料	0
	資料の複製	5
	小計	23

業務用	展示用	38
	番組制作	9
	出版物作製	23
	参考資料	20
	入手方法	2
	その他	4
	小計	96
その他	寄贈申出	4
	その他	1
	小計	5
合計		291

*1 大学生以上の調査を「研究」とする

*2 高校生以下の調査を「学習」とする

民族学研究アーカイブズの構築事業

本館には発足以来、民族学者の研究ノートや原稿、フィールドワークで生成、収集された映像・録音記録など、さまざまな資料が蓄積されている。2005年、民博創設30年を迎えるにあたり、民族学研究の拠点である本館が備えるべき機能の一つとして、アーカイブズ管理体制整備の必要性が検討され、かつ、これらの資料・情報を公開し、研究・教育での共同利用や社会還元に供してその価値を再認識しようと、「民族学研究アーカイブズ」の構築事業が開始された。

2007年度に、民族学研究アーカイブズHome Pageを立ち上げ、これまで青木文教、大内青琥、桂米之助、鹿野忠雄、菊沢季生、篠田統、杉浦健一、土方久功、馬淵東一、及び「日本文化の地域類型研究会」アーカイブ、松尾三憲旧蔵絵葉書コレクションなどの資料リスト作成等を行い、その成果を順次公開している。

2015年度は、昨年度に引き続き既存アーカイブズの整理作業を行い、梅棹忠夫アーカイブの権利処理に関する覚書を作成するとともに、泉靖一アーカイブの紙資料リストおよび岩本公夫アーカイブの写真資料リストを一般公開した。また、沖守弘・インド民族文化資料の「紙資料」は一覧リストを、「写真資料」はデータベースを作成した。

現在、リストを公開し、利用に供しているアーカイブは13件である。2015年度の利用状況は閲覧5件、特別利用2件であった。

データベースの作成・利用状況

●館外公開しているデータベース

●標本資料目録

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。ほぼすべての資料について、標本名、地域、民族、寸法・重量、受入年度などの基本情報を収録。

2014年度までの作成件数 278,019

2015年度の作成件数 1,521

2015年度のアクセス件数 52,030

●標本資料詳細情報

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録。

2014年度までの作成件数 57,724

2015年度の作成件数 3,854

2015年度のアクセス件数 4,881

- 標本資料記事索引

本館関連出版物から所蔵標本資料の解説部分を抽出し、その書誌事項を標本資料別に整理した情報。

2014年度までの作成件数	56,440
2015年度の作成件数	2,509
2015年度のアクセス件数	4,205

- 韓国生活財

ソウルの李さん一家の生活財を網羅した情報。アパートの中にあつたすべての物について、配置と入手方法、物にまつわる家族の思い出を記録（画像あり）。

2014年度までの作成件数	7,827
2015年度の作成件数	0
2015年度のアクセス件数	4,791

- ジョージ・ブラウン・コレクション（日本語版、英語版）

宣教師であり神学博士でもあつたジョージ・ブラウン氏が19世紀末から20世紀初頭にかけて南太平洋諸島で収集し、現在、本館に収蔵されている民族誌資料の基本情報（画像あり）。

2014年度までの作成件数	2,992
2015年度の作成件数	0
2015年度のアクセス件数	2,258

- 映像資料目録

本館が所蔵する映画フィルム、ビデオテープ、DVD など映像資料の情報。

2014年度までの作成件数	7,966
2015年度の作成件数	43
2015年度のアクセス件数	4,473

- ビデオテーク

本館展示場で提供しているビデオテーク番組の情報。番組をキーワードで検索したり、ビデオテークブースと同じメニューから探すことができる。

2014年度までの作成件数	710
2015年度の作成件数	30
2015年度のアクセス件数	2,288

- 音楽・芸能の映像

本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に関係する部分を、1曲または1テーマごとに抽出した動画データベース。映像は館内限定公開。

2014年度までの作成件数	849
2015年度の作成件数	0
2015年度のアクセス件数	326

- ネパール写真（日本語版、英語版）

「西北ネパール学術探検隊」（1958年）に参加した高山龍三氏（当時大阪市立大学大学院生）らがネパールで撮影した写真、および、同隊が収集し、現在本館に収蔵されている標本資料の情報（画像あり）。

2014年度までの作成件数	3,879
2015年度の作成件数	0
2015年度のアクセス件数	1,301

- 松尾三憲旧蔵絵葉書コレクション

松尾三憲（みのり）氏が、1919年から1923年までの海軍在職中に、訓練航海の途上訪れた現地で買い求めた絵葉書の情報（画像あり）。

2014年度までの作成件数	170
2015年度の作成件数	1
2015年度のアクセス件数	1,124

- 音響資料目録

本館が所蔵するレコード、CD、テープなど音響資料の情報。

2014年度までの作成件数	62,651
2015年度の作成件数	0

2015年度のアクセス件数 976

• 音響資料曲目

本館が所蔵する音響資料について、音楽の曲単位、昔話の一話単位で収録した情報。

2014年度までの作成件数 346,772

2015年度の作成件数 5,030

2015年度のアクセス件数 493

• 図書・雑誌目録

本館が所蔵する図書・雑誌資料（マイクロフィルムなどを含む）の書誌・所蔵情報。

2014年度までの作成件数 640,781

2015年度の作成件数 4,882

2015年度のアクセス件数 226,577

• 梅棹忠夫著作目録（1934～）

梅棹忠夫本館初代館長の論文・著書から本の帯の推薦文まで、あらゆる著作を網羅した目録情報。

2014年度までの作成件数 6,504

2015年度の作成件数 90

2015年度のアクセス件数 2,643

• 中西コレクション——世界の文字資料——

世界のさまざまな文字で書かれた図書・新聞・手稿・標本などの資料に関する分析情報と書誌情報、文字サンプルの画像。これらの資料は、中西印刷株式会社・故中西亮氏が世界各地で収集。

2014年度までの作成件数 2,729

2015年度の作成件数 0

2015年度のアクセス件数 30,377

• 吉川「シュメール語辞書」

吉川守氏（広島大学名誉教授）が40年ほどの年月をかけて完成させた、シュメール語の研究ノート。親字33,450語をキーワードに検索・閲覧できる。

2014年度までの作成件数 33,450語（40,596頁）

2015年度の作成件数 0

2015年度のアクセス件数 310

• Talking Dictionary of Khinina-ang Bontok（ボントック語音声画像辞書）

Lawrence A. Reid氏（ハワイ大学名誉教授）が編集した、フィリピン・ルソン島北部で話されるボントック語のギナアン方言の辞書。語の派生関係、例文、音声・画像などのデータを結びつけたマルチメディア・データベース辞書。

2014年度までの作成件数 7,637

2015年度の作成件数 0

2015年度のアクセス件数 498

• 日本昔話資料（稲田浩二コレクション）

稲田浩二氏（当時京都女子大学教授）らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録音取材した日本昔話資料（446本のテープ・約190時間）の情報（音声あり）。音声は館内限定公開。

2014年度までの作成件数 3,696

2015年度の作成件数 0

2015年度のアクセス件数 922

• rGyalrongic Languages（ギャロン系諸語）[英語、中国語]

長野泰彦本館名誉教授と Marielle Prins 博士が編集した、中国四川省の西北部で話されるギャロン系諸語のデータベース（音声あり）。81の方言ないし言語それぞれについて、425または1200の語彙項目と200文例を収録している。

2014年度までの作成件数 39,826語（文例：15,706件）

2015年度の作成件数 0

2015年度のアクセス件数 11,093

- 衣服・アクセサリ

本館が所蔵する衣服標本資料とアクセサリ標本資料の詳細分析情報、および関連フィールド写真の情報（画像あり）。

2014年度までの作成件数	23,733
2015年度の作成件数	1,504
2015年度のアクセス件数	241,27

- 身装文献

身装文化に関する雑誌記事、図書の索引情報。1) 服装関連日本語雑誌記事（カレント）、2) 服装関連日本語雑誌記事（戦前編）、3) 服装関連外国語雑誌記事、4) 服装関連日本語図書、5) 服装関連外国語民族誌で構成。

2014年度までの作成件数	165,534
2015年度の作成件数	4,581
2015年度のアクセス件数	11,063

- 近代日本の身装電子年表

洋装がまだ日本に定着していなかった1868年（明治元年）から1945年（昭和20年）の日本を対象とした身装関連の電子年表。「事件」と「現況」、「その年の情景」、「回顧」、テキスト画像で構成される。当時の新聞記事と身装関連雑誌から情報を収録。

2014年度までの作成件数	10,049
2015年度の作成件数	0
2015年度のアクセス件数	2,164

- 館内で利用できるデータベース

- 標本資料詳細情報（館内専用）

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録。

2014年度までの作成件数	264,406
2015年度の作成件数	0
2015年度のアクセス件数	40,535

- カナダ先住民版画

本館が所蔵する代表的なカナダ先住民版画の基本情報と解説（画像あり）。特別展「自然のこえ 命のかたち——カナダ先住民の生み出す美」（2009年）の展示資料を中心に収録。

2014年度までの作成件数	158
2015年度の作成件数	0
2015年度のアクセス件数	80

- 音楽・芸能の映像

本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に関する部分を、1曲または1テーマごとに抽出した動画データベース。

2014年度までの作成件数	849
2015年度の作成件数	0
2015年度のアクセス件数	306

- 朝枝利男コレクション

朝枝利男氏が1930年代にアメリカの学術調査団に数回にわたり同行し撮影した、南太平洋の人々や動植物の写真の情報（画像あり）。

2014年度までの作成件数	3,966
2015年度の作成件数	0
2015年度のアクセス件数	62

- タイ民族誌映像——精霊ダンス——

田辺繁治本館名誉教授が調査したタイの精霊ダンスの写真情報（画像付き）。精霊ダンスの系統、開催地域、祭主から写真群を閲覧できる。写真は調査報告（タイ語）とも関連づけられている。

2014年度までの作成件数	10,082
---------------	--------

2015年度の作成件数	0
2015年度のアクセス件数	31

● 東南アジア稲作民族文化総合調査団写真

日本民族学協会が1957年から1964年にかけて三次にわたり東南アジアに派遣した調査団のうち、第一次調査団（1957年）と第二次調査団（1960年）が記録した写真の情報（画像あり）。

2014年度までの作成件数	4,393
2015年度の作成件数	0
2015年度のアクセス件数	28

● オーストラリア・アボリジニ研究フィールド写真

小山修三本館名誉教授が、1980年から2004年にかけて、オーストラリア・アボリジニ文化の調査で記録した、儀式から風景までの多彩な写真の情報（画像あり）。

2014年度までの作成件数	7,999
2015年度の作成件数	0
2015年度のアクセス件数	224

● 西北ネパール及びマナスル写真

「西北ネパール学術探検隊」（1958年～1959年）が撮影した写真の情報（画像あり）。一部に「日本山岳会第一次マナスル登山隊」（1953年）科学班の写真（推定）を含む。本館に移管された旧文部省史料館資料の一部。

2014年度までの作成件数	620
2015年度の作成件数	0
2015年度のアクセス件数	95

● 京都大学学術調査隊写真コレクション

「京都大学アフリカ学術調査隊」（1961年～1967年）と「京都大学探検部トンガ王国調査隊」（1960年）が撮影した写真の情報（画像あり）。

2014年度までの作成件数	33,690
2015年度の作成件数	8,370
2015年度のアクセス件数	5,471

● 梅棹忠夫写真コレクション

梅棹忠夫本館初代館長が、世界各地における調査研究活動の過程で撮影した写真の情報（画像あり）。

2014年度までの作成件数	35,420
2015年度の作成件数	0
2015年度のアクセス件数	6,218

● 日本昔話資料（稲田コレクション）

稲田浩二氏（当時京都女子大学教授）らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録音取材した日本昔話資料（446本のテープ・約190時間）の情報（音声あり）。

2014年度までの作成件数	3,696
2015年度の作成件数	0
2015年度のアクセス件数	55

● 国内資料調査報告集

日本国内における、1) 民具などの標本資料類の所在、2) 伝統技術伝承者の所在、3) 民族・民俗映像記録の所在、4) 民族・民俗関係出版物の所在、に関する情報。本館が委嘱した国内資料調査委員による調査報告集（1980年～2003年）をデータベース化。

2014年度までの作成件数	21,373
2015年度の作成件数	0
2015年度のアクセス件数	37

● 2015年度に館外公開されたデータベース

国立民族学博物館所蔵 京都大学学術調査隊写真コレクション（2016年3月28日公開）

● 2015年度に館内公開されたデータベース

身装画像データベース「近代日本の身装文化」（2016年1月7日公開）

沖守弘インド写真データベース（2016年3月14日公開）

2-7 みんなく施設の利用

博物館施設の利用状況

●国立民族学博物館（展示場）を利用した大学・研究機関等（50音順、カッコ内は人数）

愛知県立大学（16）、上田安子服飾専門学校（35）、桜花学園大学（11）、追手門学院大学（319）、大阪大学（78）、大阪市立大学（6）、大阪大谷大学（90）、大阪学院大学（64）、大阪教育大学（93）、大阪芸術大学（97）、大阪工業大学（14）、大阪国際大学（5）、大阪産業大学（58）、大阪樟蔭女子大学（44）、大阪成蹊大学（40）、大阪総合デザイン専門学校（166）、大阪ハイテクノロジー専門学校（49）、大阪美術専門学校（4）、大阪府立大学（15）、大阪文化国際学校（14）、大阪文化服装学院（23）、大阪モード学園（53）、大阪YWCA専門学校（71）、大阪YMCA学院（81）、岡山理科大学（9）、沖縄県立芸術大学（9）、神奈川大学（7）、金沢大学（8）、関西大学（48）、関西外語専門学校（40）、関西学院大学（23）、関東学院大学（11）、京都大学（26）、京都教育大学（10）、京都光華女子大学（7）、京都精華大学（114）、京都西山短期大学（146）、京都造形芸術大学（103）、京都橘大学（138）、京都ノートルダム女子大学（7）、京都府立大学（33）、京都市立芸術大学（44）、近畿大学（75）、慶應義塾大学（13）、甲南大学（107）、甲南女子大学（32）、神戸大学（86）、神戸大学大学院（31）、学校法人神戸学園専門学校アートカレッジ神戸（12）、神戸芸術工科大学（16）、神戸国際大学（13）、神戸女学院大学（84）、神戸松蔭女子学院大学（10）、神戸女子大学（52）、さくらサイエンスプラン（神戸大学大学院）（12）、札幌大谷大学（5）、滋賀大学大学院（6）、学校法人自由学園（10）、秀明大学（4）、上越教育大学（4）、杉野服飾大学（93）、駿台観光&外語ビジネス専門学校（4）、成安造形大学（56）、成蹊大学（5）、千里金蘭大学（60）、相愛大学（19）、園田学園女子大学（39）、宝塚大学（7）、中国学園大学（89）、日中文化芸術専門学校（16）、帝京大学（11）、帝塚山学院大学（33）、帝塚山大学（3）、東亜大学（30）、東京藝術大学（23）、東京農業大学（84）、同志社大学（8）、同志社女子大学（5）、東北学院大学（40）、東北生活文化大学（19）、学校法人東洋Fデザイン専門学校（4）、獨協大学（14）、富山大学人文学部（11）、豊中看護専門学校（41）、ドレスメーカー学院（70）、奈良大学（26）、奈良教育大学（22）、奈良女子大学（30）、日本メディカル福祉専門学校（17）、梅花女子大学（25）、阪南大学（16）、フェリス女学院大学（10）、福井大学（3）、佛教大学（6）、文化学園大学（25）、文化服装学院（51）、平安女学院大学（117）、北海学園大学（17）、武庫川女子大学（13）、桃山学院大学（3）、大和大学（60）、行岡医学技術専門学校（162）、立命館大学（50）、琉球大学（1）、龍谷大学（63）

*注 利用申請手続きを行った大学・研究機関等

●来館目的（アンケート回答より、順不同抜粋）

- ・ 新入生歓迎研修行事「フレッシュマン・キャンプ」の企画として
- ・ 大学3年生の「児童学発展実習Ⅰ」の授業の一部
- ・ 社会言語学を対象にしたゼミで、言語展示を見学するため
- ・ ベトナム人留学生に日本における民族学の展示について学んでもらうため
- ・ 気候風土地域文化歴史等、広い視野で服飾を考える能力育成のきっかけになる事を目的として
- ・ 博物館教育論の講義
- ・ 博物館実習の一環として、民族衣装・染織品の展示方法を見るため
- ・ 博物館学芸員資格の取得を目指す学生に対し、民族学資料に触れることにより、知識を深め考察する力を磨くため
- ・ 情報メディアを展示に活用している例として、実際に展示に見て触れて体験する機会をもつため
- ・ 留学生に日本文化のセクションと日本の宗教文化に関するビデオトークを見せるため
- ・ 文化人類学の演習で日本の代表的な文化人類学館を紹介するため
- ・ 工芸基礎（1回生）の授業の一環
- ・ 世界の諸民族について知識を深めるため
- ・ 考古学、人類学のゼミでの学習を深めるため
- ・ 社会学部社会学科の学生に、人類学、民俗学、博物館学の世界にふれてもらうため
- ・ 異文化や東南アジアを学ぶ大学のセミナーで実物を見て学習するため
- ・ 学生の異文化理解のため
- ・ 文化資源マネージャー養成プログラムに所属する学生が文化資源の利活用に関心を寄せているため

●国立民族学博物館キャンパスメンバーズ利用実績（カッコ内は人数）

大阪大学、京都文教学園大学・短期大学、同志社大学文化情報学部・文化情報学研究所、千里金蘭大学、学校法人立命館（1,425）

施設の整備状況

博物館施設の整備状況

1) 授乳を必要とする来館者等への配慮についての取組状況

・1階ホールに授乳やオムツの取替が出来る個室（授乳室）を設置し、授乳ソファ、調乳キッチン、電気瞬間給湯器、オムツ替え台を完備し、利用者が安心して利用出来るように非常通報ボタン、扉の鍵も設置している。

2) 既存施設・設備の有効活用への取組状況

・施設の有効利用及び適切な管理のための施策の検討を行うために、施設マネジメント委員会を2015年度は5回開催した。

3) 施設の維持管理の取組状況

・常設展示場のうち、中央北アジア及びアイヌ文化の展示場を新構築展示施工に合わせて老朽化した床材の修繕を実施した。

・衛生的環境を確保するため、今年度も館内害虫駆除を行った。

・特別収蔵庫の環境を改善するために、壁面等を調湿出来る内装材に、また、収納容量を多く出来るよう固定棚から可動棚へ更新した。

・団体待合室の壁及び天井を更新し、利用者が気軽に利用出来る雰囲気改修した。

・セミナー室（一部）の絨毯を更新し、埃やカビの発生しにくいものに更新した。

・自主点検及び保全業務の報告書に基づいて、予防保全・不良箇所を含めて計画的に改修計画を推進し、修繕経費の抑制を図った。

・安全対策として、館内（展示場・収蔵庫除く）の状況調査を行い、防災管理点検、安全巡視点検の結果と照合し、危険箇所の改善を行った。

4) 省エネルギー対策等や地球温暖化対策に対する取組状況

・昨年に引き続き、夏季及び冬季における省エネルギーへの取組について館内に周知した。

・展示場、ホール及び事務室等の点灯時間が長い場所の照明器具をLEDタイプに更新し、省エネルギー化に努めた。

・空調用冷却塔の熱交換コアを更新し、冷却効率の改善をはかり、省エネルギー化に努めた。

2-8 受賞・特許

受賞

●2015年度の職員受賞者

關 雄二 2015年8月4日 ペルー国文化功労賞

知的財産形成・特許出願など

●商標登録

商標の名称：みんぱく（ロゴ）

登録日：2015年8月7日

登録番号：第5784667号

商標の名称：ロゴマーク

登録日：2015年8月7日

登録番号：第5784668号

